
偽モノですが、何か問題でも？

安道 カズイチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

偽モノですが、何か問題でも？

【Nコード】

N0082V

【作者名】

安道 カズイチ

【あらすじ】

今日から高校二年生になり、『生徒会副会長』という名誉な肩書を手に入れた、天月伊織の新学期初日は、朝から踏んだり蹴ったりだった…。

登校中、まずは人助けの嵐、そして、曲がり角で美少女に吹き飛ばされて、生と死の際どい淵を彷徨い、朝のホームルームでは変態扱いされて、恥をかき、拳句の果てには『偽生徒会執行部』という選挙で落選した人達で構成された、いわゆる『負け犬の集団』に勢いで入会してしまうのだった。

『偽生徒会執行部』。後にこの集団が学園全体を巻き込む『戦争』を引き起こすとは知らずに……。

新学期早々、狂い始めた彼の青春は、果たしていかなる結末か。

とりあえず、謎の最低系学園ラブ(?) コメディ参上

登場人物紹介（前書き）

最初から最新話までに登場する人たちの紹介です。

この人誰？となった時に此処に目を通して頂ければ、と思っています。

登場人物紹介

『主人公』

あまつきいおり
天月伊織

二年九組。男子。

生徒会執行部では副会長、偽生徒会執行部では雑用を務める。
勉強のできる馬鹿。無自覚の変態。

一人だけ主人公枠なんて死ねばいいのに b y 風美香

『偽生徒会執行部』

あまつきふみか
天月風美香

何かと最低なメインヒロイン。

二年九組。女子。

伊織と奇跡的に名字が同じ。

偽生徒会執行部では会計を務める。

黒髪ロングの美人。

頭は良いが性格が捻くれてまくっている。趣味は罵倒。

そのべうみひこ
園部海彦

変態。

三年十組（理数科）のメガネ男。
偽生徒会執行部の創設者。偽生徒会執行部では会長を務める。
学年では優等生。しかし下衆。

くさかるな
日下瑠奈

ロリ。

もちろん貧乳。

一年二組。女子。

偽生徒会執行部では副会長を務める。
将来の夢は爆乳になること。

ほすみゆうま
穂積佑馬

清純派最低イケメン。

二年八組。男子。

偽生徒会執行部では書記を務める。
偽会長命。

P・S・貧乳は嫌いではない。

『生徒会執行部』

なだなきつはき
灘崎椿

何から何まで完璧な人。
校則違反と思われる銀髪。

三年十組（理数科）。女子。
生徒会執行部では会長を務める。
一言で表すなら『美』。
実は園部とは……。

うりわりなみと
瓜破波人

能天気で馬鹿っぽい人。
三年二組。男子。
生徒会執行部では会計を務める。

ほりかわありす
堀川有澄

達筆で女王様な人。
三年二組。女子。
生徒会執行部では書記を務める。
一言で表すなら『艶』。

こだまたくま
児玉拓真

身長189センチの巨人。
クールマッチョな人。
三年二組。男子。
生徒会執行部では庶務を務める。

『風紀委員会』

いたがきれん
板垣恋

何から何まで最強な人。

三年十組（理数科）。女子。

肩に掛かるか掛からないかのショートヘア、それにヘアピンが
似合うボーイッシュな美人。

歴代最強の風紀委員長。

一言で表すなら『剛』。

すずきひろし
鈴木宏

その、華麗な尻さばき（KSS）から突いたあだ名が、
尻白三兄弟の長男（伊織の妄想内での話）。
尻白孔貴。

二年八組。男子。

性格は割と悪い。

一言で表すなら『尻』。

『図書委員会』

ほんださだのり
本田定則

凛々しい筋肉の持ち主。

二年一組。男子。

スポーツ馬鹿で文学大好きな図書委員長。

火坂美穂 ひさかみほ

学校一、形が良く豊満な胸の持ち主。
陸上部、短距離走のエース。
どうしても可愛いことで有名。
三年一組。女子。
一言で表すなら『富』。

『教師』

二年九組担任教師 にねんきゅうくみたんにんきょうし

離婚したてホヤホヤ。
男性教師。

林先生 はやし

偽生徒会執行部の残念な顧問。
独身アラフォー男。
全国の父親を憎む男性教師。

森先生 もり

生徒会執行部の顧問。
女性教師。

『美術部』

美術部長 びじゅつぶちやう

なんだか可愛い人。

二年十組（理数科）。女子。

『男子陸上部』

陸上部長 りくじやうぶちやう

感じのいい人。

陸上競技はオールマイティにこなす。

三年一組。男子。

『その他』

親父 おやじ

伊織の父親。

常に変人、いや、変態。

母さん^{かあ}

伊織の母親。

優しい、しかし、曲者。

小夜^{さよ}

伊織の妄想の幼馴染。

中西^{なかにし}

伊織の親友。

まさかのオネエ系。

自称、仲良し委員長。

誰も知らない（前書き）

さて、どうなるのか見当もつかないのを書いてしまいました。

元々は、この小説の協力者（通称、イマジンメイカー）が最初に考えたのしようと思っていたのですが、全く違う方向に突き進みました。（あまりに斬新過ぎて、形に出来なかった）

それでも尚、イマジンメイカーに協力してもらってます（笑）。

文才なんて知るか！というレベルの出来ですが、読んで、楽しんで下されば光栄です。

それではどうぞ！

誰も知らない

世に数多あまたの人間あれど、それが全て良人であるとは限らない。

きつと、幾多の人間の中には最低な人間も数多くいることだろう。

己の地位のために人を蹴落とす者、他人を痛罵する者、自己中心的な者、そんな多種多様な人間が。

そんな、人として最低な連中が集う場所を、お前は知っているか？

きつと、お前は知らないと答えるだろう。

無理もない、俺だって最近になって知ったことだから。

強引且つ最低なやり方で、勝ち組に入ろうとしている負け犬の集団を、まだ誰も知らない。

そして、俺も知らなかった。

これから起きる、とんでもなく最低で最高の青春の日々を。

誰も知らない（後書き）

どうぞ！とか言いつつ、最初は超短いんですよ（笑）。
本編は次からです。

宙を舞う、絞り雑巾のような俺

四月六日。

もう、とうに冬は去り、温和な春になったものの、まだ微かに肌を刺すような寒さの名残がある。

春独特の陽光を浴びて、俺は真っ黒なアスファルトの上を歩く。朝から良い日差しだ。

今日、俺が通う高校にて始業式が行われる。

昨层高1だった俺は、今年で高2に進級することになる。世の中には、進級できずに留年する人も多数いるようだが、俺の学年は一人としてそんな生徒はいなかった。

一学年が四百人超えという、割と生徒数が多い学校であつたから、俺は一人くらは留年する奴が出るであらうと思っていた。だから、全員進級と聞いた時は、感動とかそいつたものではなく、ただ単に驚いた。

確かに今日は始業式が行われる。が、しかし、今日は俺にとって、それよりもっと重大なイベントがある。それは別に、クラス替えだとか、転校生だとか、そんな取るに足りないことではない。本当にビックないイベント。俺だけではなく、俺以外の何人かにとっても重要なこと。

それは、生徒会執行部の選挙結果の発表だ。

うちの学校は、始業式が閉式後、生徒会執行部の任命式が行われる。執行部の一員になったかどうかは、任命されるまでのお楽しみという、実にスリリング且つサプライズな、それでいて、ちょいとエロい任命式だと俺は思う。

一月に立候補してそこから新学期まで、どうなるのか、どうなるのかと、ゾワゾワと待たなければならぬところがいやらしい。こ

の制度を考えた奴の頭の中が手に取るように分かる。おそらく、そういう類の変態たぐいなのだ。

ちなみに俺は、副会長に立候補した。

結果発表と任命式が同時に来る日、つまりは今日、普通なら多少は緊張するだろうが、今の俺に緊張なんて微塵もない。何故なら、今日は縁起のいいことが立て続けに起こったからだ。

まず、朝、やけに機嫌のいい我が母に、『伊織いおり、朝よー。起きなさい。小夜ちゃんが一階で待ってるわよー』と、居もしない架空の幼馴染の名前を使って起こされた。その時寝ぼけていた俺は、『マジか！小夜の奴、怒ってるだろうな』と、多少リア充な気分で起きた。

爽快な目覚めだった。

起きた瞬間は、幸福且つ多少の焦りという、モテない男から見たらたまらなく悔しいであろう、幸多き気分だった。が、しかし、すぐに自分に幼馴染がいないことに気付き、『事業で失敗し、かてて加えて病魔に冒された時の気分』になった。

あ、ちなみに伊織というのは俺の名前。あまつきいおり天月伊織。この、少し珍しい名前は俺のちょっとした自慢でもある。突然だが、親に感謝を。

……てか、これは別に縁起が良いことでもなんでもない。

ちゃんと縁起のいいことがあった話をしよう。

その後、俺は二階の自分の部屋で学校に行く支度を済ませ、一階のリビングへと向かった。

説明ばかりで悪いが、俺の家は二階建ての一軒家で、家族構成は、母、父、俺の三人家族。人数の割に家が異常にでかい。二階なんか使っていない部屋すらある。

一階のリビングに着き、まず俺の目に飛び込んできたのは、親父の後頭部。

入って真正面にあるテーブルに、こちらに背を向け足を組み、そ

のアレな後頭部を堂々と見せつける父。

彼はこちらに顔を向けず、両手で広げている新聞を見ながら、『伊織、おはよう』と朝の挨拶をしてきた。それに対し俺は一言、『親父、その髪どうした？害虫にやられたのか？』と挨拶代わりに、親父の頭の感想を述べた。すると親父は、『俺は別にハゲてない！最近頭がかゆくなって、かいていたら多少何本かの髪が逝っただけだ！だがな、人間とは神秘的な生物だから、少々髪が抜けたくらいじゃビクともしないのさ！』とキレた。

そりや普通、髪が抜け落ちたくらいで弱っていく人間なんていない。

そんなことも己は知らんのか。そして、ちよつとツツコミが遅れたが、頭をかいて髪が抜けるとは如何なるものか。それは、自らの手によって自らの盆栽をみすばらしい姿に変貌させていつているということと等しい。

自滅ではないか。馬鹿じゃないのか、我が父は。

それとも、そういう性癖の持ち主なのか？髪が抜けていき、見た目が貧弱になっていく自分に興奮する特殊な性癖。……………気持ち悪いにも程がある。

『この自滅ハゲが』俺は自分でも無意識の内に、新語を作っていた。それを聞いて『何だその新単語は？英語か？』と、とぼける親父。俺はハゲの親父のことは無視して、テーブルに用意されていた、母特製のおいしそうな和食の数々を食べる為に、親父の向かい側の椅子に座る。

……………言っておくが、ここからが、縁起のいいことが立て続けに起こった話だ。前振りが長過ぎたな。

椅子に座ってまず、お茶の茶柱が立っていたことに感動した。人生初の出来事だった。

そして、続いて後ろのテレビから、新人女子アナウンサーの声が聞こえる。チラリとテレビを見るに、この番組は、フジテレビ系列の朝のワイドショー！。

テレビから聞こえるその声はこう言っていた、『今日の血液型占いの一位は、B型です』。マジかよ、と思った。何故なら、俺はB型だからだ。『朝から、異性との衝撃的な出会いがあるかも……？』、その言葉を聞いた瞬間、俺はこれからの高校二年生としての青春の日々を想像する。

生徒会副会長になって、彼女もでき、運動も勉強もそこそこ努力し、最高に楽しい日々を満喫する自分。

それはもう、言葉にできないくらい幸せな日々だろう。逆に想像の自分が、憎たらしくも思う。

『今日の星座占いの一位は、獅子座のあなた！』、いつの間にか番組が変わっていて、またも、占いのコーナーだった。しかも、俺獅子座。やっベエ、超嬉びー。

『ラッキーアイテムは、曲がり角！』、それはアイテムじゃなくて、道だな。

このコーナーの制作者は、一体何を思ったんだ。地味に気になる疑問が頭に引っかかる。

その時、急に親父が俺に『手のひらを見せろ』と言ってきたので、俺は言われた通り、とりあえず左手を差し出す。

『ふーむ。生命線なし。結婚線爆発。エロス線豊富。よし、今日は吉日だな』

聞いた感じ、どこが吉日を表しているのだろうか。結婚線爆発とは、一体何なのか。何故エロス線なんてものを視認しにんしたのか。そもそも、手相で今日の占いが出来るのか？何よりお前の髪あたまは何なんだ。でも、まあ、何だかんだ言って、親父が言うには、今日はハッピーな日らしい。

その後、登校する為に外に出たら、家の目の前を時速二メートルぐらいで歩行する、婆さんがいた。俺は、その婆さんが背中に背負っている、巨大な風呂敷を持ってあげ、タクシーを呼んだ。すると婆さんは俺に感謝感激の言葉を送り、ついでに現金一万円を送ってくれた。太っ腹な婆さんだった。

俺の吉事はそれだけでは済まない。

今日の朝は、まだまだたくさん良いことがあった。

電柱に引っかかった赤い風船を、女の子の為に取ってあげたら、ほっぺにチュー。

通りすがりのおじさんの落とした、黒髪のズラを拾ってあげたら、感謝の意志が込められた別のスピアのズラをゲット。今度、うちの親父にでも与えよう。

飛んでくるカラスの下を通ったら、なんだかネバいものを、頭でキャッチ。

と、いった具合に、一步步くごとに、本当に運のいい出来事が起きた。いろんな意味で。

そして、今。

俺は、この位置から数十メートル先の曲がり角を見詰めていた。右折する曲がり角を。

朝のワイドショーで見た、ラッキーアイテムの話。曲がり角がアイテムなのかは謎だが、あの曲がり角には何かを感じる。

そう、例えて言うなら、ギャルゲーでよくある、朝の登校時のシチュエーション。

学校に遅刻しそうになり、食パンを銜えて走った結果、曲がり角で運命の相手と衝突するっていう、アレだ。

「なんだか、今日はぶつかりそうな気がする……」

俺はそう一言呟くと、朝の人助けラッシュで手に入れた、戦利品フランクフルトをビニール袋から取り出し、銜える。

そして俺は走った。何か間違っているとは知りながら……。

今日はとても足が軽く感じる。頬を撫でる風が心地いい。

俺はどんどん加速していく。

しかし、勢いに乗り過ぎてしまいそうになるところを堪え、小走り程度に止めて^{とど}いる。何故なら、もしも運命の人とぶつかったとき、

相手を弾き飛ばしてしまつたら、後味が悪過ぎる上に、折角のフラグを逃してしまうことに成りかねないからだ。

俺って、なんて計画的で優しい奴なんだろう。

曲がり角まであと七メートル程度。

朝の占いの数々は完璧。しかも良いことづくし。今の俺に出来ぬことなど有りはしない。

そう、余の辞書に不可能という文字は無い。不可能という文字は愚か者の辞書にのみ存在する。

前歯で加えたフランクフルトが、ブルンブルンと上下に揺れて、俺の視界を妨げる。

残り五メートル。

ブルンブルン。

四メートル。

三メートル。

ぶるる、ブルン。

二メートル。

ブルンブルンブルンブルンブルンブルンブルンブルンブルンぶるんぶるんブルンぶるんぶるん。

さて、どんな娘こが来る！？

俺はその時、上下の揺動運動から回転運動に昇華しょうかしたフランクフルトとは別に、視界の右端に、黒い長髪の女性を確認した。
ビンゴ！

心の中で俺はそう叫び、喜んだ。

が、しかし、その喜びはすぐに潰つぶえた。

相手の顔を見る暇が無かった。それは、一瞬だったから。

満面の笑みを作る隙すら与えて貰えなかった。それは、目に見えなかったから。

ぶつかる瞬間に、何気ない感じで胸を触る予備動作すら許されなかった。それは、今日はいてるパンツがトランクスだから。

「げバアッ!？」

俺の首はゴキッ!という鈍い音を上げ、口に銜えたフランクフルトの、ブルンブルンな回転に合わせ、視界が突然旋回した。物凄い回転の最中、俺のフランクフルトが口から離脱し、宙を舞い、いつかのズラのおじさんのズラを掠めた。直撃はしてないものの、ヘリコプターのように回転したフランクフルトの風圧に負け、おじさんのズラは、呆気なく地面にポトリと落ちた。

「…せめて、盛大に吹き飛ばして欲しかった……」

おじさんの嘆きは、視界が激しくローリングしている最中でも、しつかりと聞き取れた。

切なくなつた。

そして気付けば、俺は近くの壁に衝突して、地面に仰向けに倒れていた。

体中が、突然の激痛の所為で、ピクリとも動かない。

一体何が起きたのか、俺には理解できなかった。

俺の視線の先には、さっきの長い黒髪の女性が、何事もなかったかのように無傷で居た。

その女性…いや…その女の子は、よく見ると、俺と同年くらいだ。

長い髪の女の子は、一回サラッとその美しい黒髪を靡かせると、俺を険しい表情で睨み、こう言った。

「何処^{どこ}見てほつき走ってんのよ！いつそ、死ねばいいのにッ！
！」

む、胸が…胸がガチで痛い…ま、まさか……………これが……………恋！？
噂には聞いていたが、まさかここまで胸が痛いものなのか…。まるで、折れた肋骨^{ろっこつ}が心臓に突き刺さったような痛みだ…。

気のせいかな、口から血が…………。

女の子は、『フンッ！』とそっぽを向くと、そのまま体の向きを180°変え、俺に背を向けトコトコと、歩いて行ってしまふ。

そんなちよつと暴力的な彼女の背中を見て、俺は漸く^{やうやう}理解するのだった。

…俺、女の子にぶつ飛ばされたんだ…………。しかも、相手の子は無傷だし…………。

フラグどころの話じゃねえ。

ふと、朝の占いの内容を思い出す。

『朝から、異性との衝撃的な出会いがあるかも……？』

ああ、そういうことか。

衝撃的というのはこういうこと。『物理的な衝撃が伴う出会い』
だってことか…。

人生、そう簡単にいかないものだな…。

体から完全に力が抜けていくのが分かる。

気のせいであると信じたいが、吐血の量がパネエ。どんどん、気が遠くなっていく。

春の柔らかな日差しの中、俺はこう考えるのであった。

……誰か……救急車を……。

この『衝撃的』な出会いが、俺、天月伊織と黒髪あまの女の子、天月
風美香つきふみかとの、辛く、楽しく、面倒くさく、最低で、最高の青春の日
々の始まりでもあった。

偽生徒会執行部（前書き）

話のメインとなってくる、最低な人達が登場する回です。

偽生徒会執行部

二年九組。

そこが俺のクラス。

うちの学校は、さっきも言ったように、一学年、四百人以上。ちなみにクラスは二年十組までである。つまり、一クラス、四十人程度いることになる。

一つの教室に四十人とは割と多いもので、少しむさ苦しい感じがする。

それは、俺が中学生だった頃、一クラス二十人ちょっとという、少人数だったことが原因かもしれない。

だが、俺も今日から高校二年生。もう、高校生活も一年は過ぎた。いい加減、人の多さには慣れなければ。

今日の授業の時間割は、一時間目に始業式、二時間目に学活、三時間目に掃除、という三時間で下校する、新学期初日によくあるパターンだ。

そして、現在、二時間目の学活。

俺は、窓際の列の最後尾の席に頬杖を突き、担任の教師の話をBGMに、窓の外を眺めている。

…というわけではなく、廊下側の列の先頭の席で、先生の話を目に聞いていた。

仕方がない。俺は天月の憎き『あ』の所為で、ほとんどの場合、出席番号が『1』になるからだ。

出席番号が1の人は大抵、廊下側の列の先頭になるのが、日本の

学校の定番だ。

突然だが、親に（特に親父に）憎悪を…。

でも、まあ、中途半端な22番になって、先生と真正面からご対面になるよりは、全然マシだろうが。

「えー。先生ね、去年の秋に離婚しちゃってね、未だにブルーな気分なんです、唐突に転校生の紹介をしちゃいます。まあ、どうせ、転校生だろうがなんだろうが、この教室に居る人たちは、ほぼ全員が初対面だろうから、新顔が入ってきたと言われても、実感がわかないよね」

驚くべき急展開だな。

話が鋭角に曲がったぞ。話の繋がりが全く見えん。

しかも、そんな前振りで転校生を紹介しないでほしい。その転校生も堪ったもんじゃないな。

「では、天月さん入りなさい」

あまつき？

教室の前のドアがガラガラと音を立てて開いた。教室は外の空気と遮断されていたため、開いたドアから、新鮮な空気が入ってくる。

そして、すぐ右斜め前から、コツツという廊下を歩く足音が聞こえたと思ったら、目の前を黒髪の子女生徒が通過していった。

微かな甘い香りが鼻を撫^{くすぐ}る。その香りはまるで、この世の良い香りの集合体の様だった。

彼女の腰までありそうな長い黒髪は、思わず目を見張ってしまうぐらい美しく、凜としている。

その子女生徒が先生の隣まで来ると、先生は、黒板に自分の名前を書いて自己紹介をするようにと指示を出した。

転校生は『はい』と軽く返事をする、黒板に白色のチョークで名前を書き記した。

彼女は達筆な人だった。

最初の横棒を書いた瞬間に、それは分かった。

一点、一画、丁寧に書き、彼女はこちらに振り向く。

あまつぎ ふみが
「天月風美香です。よろしくお願いします」

彼女は一言、いや、二言そう言つと、一礼する。

無愛想なのか、そうでないのかよく分からない挨拶だった。

声を聞いた感想を言つと、か弱い女の子というイメージとは掛離れてはいるものの、それでも女の子らしい声だ。

簡単に言つと、ツンデレの声優になれそうな、良い声質をしている。

だが、そんなことは、はっきり言つて、どうでも良かった。

俺は彼女の顔を見た瞬間から、叫びたくてしょうがないことがあった。

それは……。

「お前、登校中に俺を絞り雑巾のように、華麗に弾き飛ばした奴じゃないか！しかも同じ名字かい！人生に一度も同じ名字の人と会わない自信があつたのにい！」

俺は我慢できなくなり、勢いよく席から立ち上がり、思わず転校生を指差し叫んでしまった。

後から、やつちまつたぜ、と後悔する。

そんな俺を見て、転校生も俺を指差し言つた。

「アンタ、私の胸を揉み拉しだこうとして、副会長に任命された変態じゃない！」

ツチ、バレてたのか。

つてそうじゃなかった。

それだと、『胸揉み未遂』が原因で、俺が生徒会副会長に任命されたみたいじゃないか。

とんだ猥褻な副会長だな。この世に存在する意味が分からない。

この、天月風美香とかいう転校生の所為で、俺の吉報きつほうである、生

徒会副会長に任命されたことが、全然良く聞こえない。

任命式の時に思わずガツポーズをとった自分を恥ずかしく思う。別に、恥じることなんて何処にもないのだろう。だが、『胸揉み未遂』という、紛れもクソもない事実と混同されては、恥じるほかない。

ハッズカシー！。

俺が過去に『頭に白いブリーフを被れば、ハゲが治るんだってよ』と親父に言ったら、『俺はハゲてない！勝手に髪を殺すな！』と言いつつも、その晩、自室で白いブリーフをこっそりと頭に装着した親父を目撃した時ぐらい恥ずかしい。

まさに『恥ずかしい』。

口からパンツが出るかと思った。

チラリと周りを見渡すが、ほとんど初対面のクラスメイト全員が、転校生でなく、俺を凝視している。

恥ずかしい。

口からパンツが出るかと思った。

放課後、俺は廊下を歩いていった。

向かうべきところは、生徒会室。

現在地の校舎は、一階に一年生、二階に二年生、三階に三年生と
いうように、全学年の一から十のクラスが全部ある校舎で、理科室
や音楽室などの、教科ごとの教室は一つもない。

そのため、生徒会室はこの校舎には無く、向かいの校舎にある。

その校舎は、今いる校舎よりも階層が多く、五階建てで、教科ご
との教室の他に、文化部の部室や、委員会専用の部屋も用意されて
いる。

確か、生徒会室はその校舎の、四階だったか、五階だったかにあ
ると聞いた。

俺は部活動に入っていないし、委員会すらしたことがなかったから、
授業以外でその校舎に行ったことが無い。だから、どこに何の部屋
があるかはあやふやだ。

二時間目の終わり、三時間目の掃除の前に、今回の生徒会長に任
命された、灘崎椿先輩なだきつばきに、『放課後、生徒会室に集合』と言われた
ものの、一体、何処に生徒会室はあるのだろうか。

場所が分からず、色々と考えている間に、気付けば俺は、クラス
専用の校舎から、多目的用の校舎に来ていたようだ。

いつの間に渡り廊下を渡ったのだろうか？

渡り廊下は、クラス専用の校舎の階層に合わせ、三階まで二つの
校舎を結んでいる。

横長で平行に並ぶ二つの校舎の両端に、渡り廊下があるので、上空から校舎を見たら、カタカナの口の字のように見える。

ふと、右側に広がる長い廊下を見る。

すぐ手前には、コンピュータ室や音楽室、奥の方には第一理科室（科学室）や美術室が見える。

俺は無意識の内に二階の渡り廊下を通ってきたようだ。

見たところ、この階には生徒会室はなさそうだから、俺は三階に続く階段を上る。

三階に着くのに、残り階段が四段というところで、巨大な木の板が俺の行く手を遮った。

その板を運んでいるのは美術部員のようなが、上の階から次から次へと大きな木材を持って下りてくる。

美術部員の一人が、すみませんと俺に謝って、道を確保してくれただが、それは四階へと続く階段を上るスペースを空けてくれただけ。それでは、三階を見ることが出来ない。

「でも、まあ、四階か五階だったと思うから、別にいいか……」

突然、訳の分からないことを言われた美術部員は、顔を顰めるが、俺は一言、何でもないと言うと、気にせず再び階段を上り始める。

三階を素通りして、四階に辿り着いた。

今更ながら、エレベーターでもエスカレーターでも何でもいいから、とにかく上るのをもつと楽にしてくれる設備が欲しいと思う。

もしも、一階から、最上階の五階へと階段を使うとすると、かなりの体力を要するだろう。

俺は、四階の真っ直ぐに続く廊下を歩く。

ゲー研にラノ研、ダンス部、その隣にバレエ部、二次元同好会（？）、おつとこんなところに吹奏楽部と、いろいろな部活動や同好会の名前が書かれた標示を見ながら歩いていたら、一つ、目に付くものがあった。

それは、生徒会執行部の拠点、『生徒会室』だった。

他の部室や同好会の部屋よりも、何でかドアが豪華だ。

コンコンと右の手の甲で、ドアを軽くノックすると、中から『どうぞ』という男の声が聞こえてきた。

俺はドアノブを捻ると、そのまま生徒会室の中に入った。

生徒会室の中は妙に日当たりが悪く、思っていたよりも涼しい。入ってすぐに目に飛び込んできたのは、幾つかの長机を組み合わせて出来た巨大な卓。

その机を取り囲むようにして、何人かが椅子に座っている。

「おや、君は…？」

声のした方を向く。

すると、俺から真つ直ぐの場所にある、おそらく会長の座る席である場所に、眼鏡をかけた如何にも真面目そうな人が座っていた。「あ、あの。この度、生徒会副会長を任せました、天月伊織といます」

俺は少し戸惑いながらも、出来る限り滑舌よく、最後まで言い切った。

「ああ、君が…」

彼は一言、そこに座ってと指しながら言った。

上級生だろうか？

俺はそんな疑問を抱きながらも、彼に指示された場所へと座る。

椅子は学校に有り余るほどある、パイプ椅子で、少し茶色く錆びている。座った瞬間、ギギイ、とその古さを感じさせる、金属と金属がこすれる音が鳴った。

眼鏡の彼とは別に、この部屋には、俺を除き、三人いる。

一人は、こちらを笑顔で見詰めてくる、何から何まで完璧そうな、好印象の清纯派イケメン。

もう一人は、こちらに興味津津といった視線を送ってくる、肩に

掛かるくらいの長さの金色こんじきの髪かみの少女。唯一、左の前髪を、可愛らしいヘアピンで留めている。

そして、最後の一人は……天月風美香だ。

「何故お前がここに!？」

驚きの余り、俺は椅子から五ミリ浮遊した。

天月風美香は

「なんでだろう?」

と、何故か疑問形で返してきた。

「いや、ね、私、転校生だから、何処に何の部屋があるのか把握したくて、校舎をウロウロしてたら、その男の子が、『まあ、お茶でもどうです?』っていう感じに、私をこの部屋に招き入れたのよ」
それって、拉致じゃね?

天月風美香に指された、清純派イケメンは、高校生ながらも、もう、そんなデンジャラスゾーンに到達しているのか。世の中分かったもんじゃないな。

「いやー、その、この部屋の前で立ち止まっていらっしゃったから、つい……。それに、付け加えると、俺の名前は、穂積ほずみ佑馬ゆうまと言います。二年八組です」

穂積とかいうイケメンは、ニツコリと、はにかんだ。

ていうか、コイツ、俺たちと同じ年か。

「あの一」

今まで会話に入って来なかった、金髪きんぱつの女子が右手を軽く挙げて、自分の存在アピールをする。

部屋の窓から差し込む光で、彼女の髪は美しく映えている。

ちなみに、俺の親父の髪はハゲている。

「私は一年の、日下瑠奈くさか るなって言います。見たところ、お二人とも、二年生のおうですが……」

この子は長州から来たのか、と一瞬思うような名前だったが、顔には出さない。

飽く迄あまでも、ポーカフェイス、フルフェイス。

ん？なんか間違えた気が。

「ああ、俺とコイツは、同じクラスだ」

俺と天月風美香を交互に見る日下に、俺はそう答える。

すると、日下と穂積は目と目で何かを語ると、日下が眼鏡の先輩

のところに近寄り、コシヨコシヨと何か、小声で話し始めた。

「……………ま…か？」

「…うだ…。……………」『やっちまうか』」

「何を！？」

この二人は何を考えているんだ？

『やっちまうか』とは何だ？

例えばどうという表記の仕方なんだろう。

殺っちまうか。

遣っちまうか。

ヤっちまうか？

……………え？

尻しりに危機感が…。

「あー。すまない、すまない。僕は三年生の、そのへうみひこ園部海彦。とりあ

えず、この紙に、学年、組、名前等を書いてくれるかい？」

そう言った園部先輩は、俺と天月風美香に一枚ずつ、何かの紙を差し出してきた。

俺たちは互いに顔を見合わせ、頭に『？』を浮かべるが、紙と一緒に差し出されたボールペンを使って、何気ない感じで紙に必要な情報を記入する。

全部の欄に記入を終えると、園部先輩に紙とボールペンを渡す。

「あのー。突然ですみませんが、ここって『生徒会室』ですよね？」

「ああ」

俺の質問に対して、園部先輩は一言返す。

「あのー。先輩は生徒会の役員でしたっけ？」

「ああ」

「ちなみに何をされますか？」

「生徒会長だ」

「嘘だ！」

俺は顔を強張らせ、目を見開き、叫んだ。

有り得ない。

何故なら、生徒会長は、灘崎先輩のはず。

一体何がどうなっているのか…。

困惑している俺に、園部先輩はその顔に嫌な笑みを浮かべながら

「但し、『偽』のな」

「？」

更に謎な展開になってきた。

「僕たちの顔、何処かで見たこと無いかい？」

園部先輩は、眼鏡をチャキチャキと鳴らして、そう言った。

俺は、周りの人の顔をチラチラと見回してみる。

すると、一つの答えに辿り着いた。

「あ！生徒会の選挙で落選した人達だ！」

「『殺す！』」

俺は、三方向から跳びかかってきた、園部先輩、穂積、日下、の三人に押し倒された。

地面に背中から衝突し、五臓六腑が口から吐き出そうになる。

「僕はな！僕はな！絶対に生徒会長に当選するはずだった…それなのに！あのクソ女が当選しやがってよぉー！全ッ然、納得がいかないんだよッ！フギヤァー！下着がクマちゃんの癖にイツ！」

園部先輩が、俺に馬乗りに跨り、俺の胸倉を掴んでそう言った。
く、クマちゃんって？

次いで、穂積が

「俺は、字の上手さ、それしか取柄が無いのに…。それなのに、書記の座を別の人に奪われてしまったんですよ…。…あなたは何も分かってない、分かるハズがない…。俺のこの気持ち…。あなたに分かりますかッ！？」

「その字の上手さは、何処か別のところで活かせよ！」

俺がそう反論すると、何故か日下の踵落としを顔面に食らった。

『何故お前が！？』とかいう疑問の前に、日下のスンバらしい下着が目飛び込んできた。

見たところ、綿98%かな？

「私の副会長を横取りしやりました、先輩みたいなクソ野郎は死ねばいいですよ！DIE！DIE！DIE！DIE！クタバレッツ！消滅しろッ！斬首しろッ！滅鬼積鬼！四苦八苦！」
めっきしゃっき しゅくはつく

「死んで欲しいのか、苦しんで欲しいのか、どちらか一方にして下さいッ！それに、お前は一年生だから、どう頑張っても生徒会に入れなげバァ！」

俺は現在進行形、発狂している三人組に、サンドバック状態にされている。

助けて下さい！誰か、助けて下さい！あ、そ、そこは！
らめえー！

そんな乱戦状態の中、ずっと俺たちの戦況を傍観していた、天月
風美香がようやく発言した。

女神だ、コイツは天使に違いない、俺は一瞬だけそう思った。

「この戦い、いつ終わるのかしら？」

「その時には、俺はもう天使になっちまってるよッ！」

結局、天月風美香は悪魔だった。

「で、ここは『偽』の生徒会だと？」

だいいちじあつたたいせん

第一次殴打大戦は—まず休戦となり、俺たちは元居た位置に、座
っている。

「ああ。生徒会選挙に落ちた数名の有志を集め、立ち上げたのさ。
正式名称は『偽生徒会執行部』。通称『NSS』。どちらも僕が考
えたんだ」

「自分たちで偽って認めてるのッ！？」

俺は悲しくなった。いや、哀れに思った。

まず、この集団の名称が切なかった…。何の捻りもない、『偽生
徒会執行部』。

偽と認めているところが何とも言えない。

そして、何故、態々、通称なんてものを作ったのか。そもそも、
通称は自分たちで考えるものでないのを、園部先輩は知らんのか。
無理に有名ぶってるところが、哀愁を誘う。

「でも、部屋の名前が、『生徒会室』になってたような？」

「先輩はちゃんと見なかったんですか？」

俺の疑問に対し、日下が首を傾げて、そう答えた。

俺は一度部屋から出て、外に書いてある部屋の名前を確認する。

…やっぱり、生徒会室……いや、待てよ、この生の字の左隣の点は……『偽』。

「ちっさッ！」

俺が廊下でそう叫ぶと、偽生徒会室から園部先輩が出てきた。

「まあ、その、なんだ…。ちよつと恥ずかしくてね、『偽』なんて…」

「だったら、最初から団体名を、偽にしなければいいのに！アンタは馬鹿か！」

「もう遅いんだよ！僕たちは『偽』に染まってしまった！だから、自分たちへの戒めと、慰めの為に、『偽』という文字を多量に使うんだ！」

「逆に自分たちが傷ついていると思うのは俺だけか！？」

俺がそう言った瞬間、園部先輩の目が鋭くなった。

狩りをする狼のように、冷酷な目だ。

「ハッ！偽物がどうしたってんだよ！別に、痛くも痒くもないもんね！僕はね、君を含めた、今の正式な生徒会執行部が、大大ッ嫌いなのださ！もう、奴らを見る時の目が、フルオートでメンチを切ってしまうくらいにねッ！…どんな手を使ってもいい、ただ、僕は奴らを地獄の底まで叩き落してやりたい！奴らが負け犬になるのを大笑いしてやりたいのさッ！その何処が悪いと君は言うんだっ！？え！？答えてみるよッ！この超下衆野郎！^{ゲス}」

「下衆はお前だ！」

俺は断言した。

そして、こう思った。

この人は『外道』だと。

「あのー。お二人とも中にお入りになっては？」

俺と園部先輩がヒートアップしそうになっているところに、清純派イケメンの穂積が仲裁に入ってきてくれた。

俺は頭を冷やし、偽生徒会室の中に再び入った。

「なんだか、質問したいことばかりですが……。まず、この集まりの目的は？」

俺が現メンバーの三人に向かって質問を投げかける。
すると、穂積が

「まあ、とりあえず、現生徒会執行部の役員を心の底から憎む、選挙で落ちた人たちの集まりだということを、まずは知っておいた方が良いでしょうね」

要するに、『負け犬の集団』ってことが。
偉そうに言うな。

穂積に続いて、日下が喋る。

「そして、生徒会役員に代わる、学校のトップに君臨すること。
それがこの集団の目的です」

「ん？なんて？」

何か、とんでもないことを仰られた気がしたから、もう一度だけ訊いておこう。

「だから、生徒会より上を目指すんですよ」

日下が、金色こんじきのサラサラとした髪を揺らして、俺の方に乗り出してくる。

「簡単に言うと、この組織の目的は……」

俺から真っ直ぐ前の、『偽生徒会長席』に座っていた園部先輩が、両腕を胸の前に組み、目を瞑り、少しのたれを作る。

先輩の掛けている眼鏡が光を反射して、キラキラと眩く輝いてい

る。

一、二秒の間を空け、先輩は口を開いた。

「生徒会をぶっ潰し、学校を征服することだ」

「へえー。『学校の制服を着ることだ』の間違いじゃなくて？」

「その目的だったら、既に達成してしまっているじゃないか。君は馬鹿野郎かい？」

「え、本当に学校を征服するつもりですか？」

「ああ。そのつもりだけど、何か？」

「……マジかよ」

俺は嘆息をもらし、額に右手を当てる。

訳が分からない。

この人たちの世界が分からない。

親父の実家の犬の名前が、『うんちょ』だというぐらい、意味が分からない。

「……ん？」

俺は不意に疑問が脳裏に過る。

疑問に思ったのは、六、七分ほど前の自分の行動。いや、俺だけではない、俺と、天月風美香の行動だ。

園部先輩に渡された謎の紙に、黒の油性ボールペンで署名したところ。

今思えば、あの紙にはなにやら、『入部届』みたいな、不吉な文字があつた気がする。

この組織が学校では部活扱いなのか、同好会扱いなのかは不明だが、これはとってもまずいような？

俺は恐る恐る、園部先輩に尋ねる。

「あのー。さっき俺たちが署名した書類はまさか…」

「ああー。言い忘れていたが、もう君たち二人は、偽生徒会のメンバーだ。光栄に思え」

「なんー!？」

驚きの余り、『だと』が出なかった。

ふと、左の方を見ると、天月風美香は依然として凜とした態度を保ったままだ。

コイツ、どんだけ冷静なんだよ。

少しはこんな馬鹿げた組織に無理矢理のメンバーになってしまったことに、怒りや焦りはないのか。

俺は右の拳で机をバンツと一発殴ると、叫び放つ。

「こんなくだらない奴らの集団に入ってたまるか!」

後ろを振り返り、そのまま扉を開いて外に出ようとするが、俺の前に穂積が立ち塞がった。

「おやおや、駄目じゃないですか。あなたはこの組織のメンバー。勝手に脱退することは許されませんよ」

「俺はこんな組織に入ったと認めていない…」

「しかし、メンバーはメンバーなんですよ。あなたは嫌なことはすぐに投げ出す最低な野郎なんですか？それが、生徒会副会長の本性なんですか？……ハッキリ言って、あなたのようなクズがやっていけるほど、この世は甘くないんですよ」

その時、俺の頭に衝撃が走った。

外部から頭を金槌で殴られたのとは違い、脳の血管がプチンと切れる感覚。

次いで、腹の底から湧きあがってくる怒り。

「……………」

俺は無言で穂積を睨みつける。

「一つ訊きます。あなたは、最低なクズですか？それとも…」

「クズじゃない」

俺は穂積の言葉を遮り言った。

そして、そのまま続ける。

「俺はクズじゃない……。俺は投げ出さない。だから、最低な野郎じゃないってことを証明してやるよ」

そう言った直後、穂積の口元が軽く吊りあがった気がしたが、気のせいだろうか。

俺はそんなことを思いながらも、自分の元居た席に座る。

俺に続き、穂積も元居た席に座る。

少しの沈黙が流れるが、それを破るように、天月風美香が一言だけ

「私もやります」

と言った。

すると、園部先輩は満面の笑みを浮かべ、

「よし！これで必要な人員も揃ったことだし、今日この日この時より、我ら『偽生徒会執行部』の活動を開始する！」

ハイ、皆拍手、という園部先輩の煽りで俺たちは両手を鳴らす。パチパチと乾いた音が、狭くなければ広くもない室内に鳴り響く。窓の外から差し込む真昼の光があっても、部屋はうす暗く、不健康そうだ。

俺の狂った高校生活は、今日この日この時よりスタートを切ったのだった。

「それじゃあ、役の確認をしよう」

園部先輩は楽しそうに言う。

「まず、生徒会長は僕、園部海彦。副会長は日下瑠奈。会計は天月風美香。書記は穂積佑馬。雑用は天月伊織」

ふーん。俺が雑用ね。

へー。

は？

「なんすか、雑用って！？普通そこは庶務じゃないんですか！」
俺は両手をバンツ！と机に突き、勢いよく立ち上がる。

そんな俺を園部先輩は哀れな人を見るような、それでいて人を小馬鹿にした目で言った。

「えー。君は僕たちと違って正式な生徒会役員なんだよ。しかも、二年生にして『副会長』の座を奪い取った者。憎い奴に決まってるでしょ。だから、君には雑用っていう不名誉な仕事を与えようってわけさ。まあ、君は、『Mr・パシリ』を全力で全うしてくれればいいんだよ。精々頑張ったまえ。自分がクズじゃないってことを証明するんだろ？」

活動開始、二十秒で、この組織に入ったことを後悔した。

幕を閉じる新学期初日（前書き）

これで、前置き完了といったところですかね。

幕を閉じる新学期初日

「なんで、お前は会計なんだよ…」

俺は一言、天月風美香に向かつて呟くと

「それは、そこしか空いてないからじゃない。馬鹿じゃないの？」
と、本日何度目か分からない『馬鹿』を喰らった。

ここは『偽生徒会室』。

偽生徒会の活動が始まってから、あと三秒ほどで一分が経とうとしている。

園部先輩が

「さあ、とりあえず、僕たちの具体的な活動内容を皆に教えます。
日下さん、お願い」

日下は立ち上がると、近くにあったホワイトボードに、大きな紙を貼った。

その紙には、黒い太字でデカデカと、『活動ナイヨ！』と書かれている。

何処^{どこ}のチャラ男だ。

「皆さん、私たちの学校の生徒会規約をどれくらい知っていますか？第一章では名目、第二章では目的、第三章では会員、第四章では組織に関して記されています。私たちの活動で最も重要となってくるのは、第四章の組織について書かれているところです」

ビシッと日下が生徒会規約の一部が書かれた部分を指す。

どうやらあの、『活動ナイヨ！』には、これから日下が説明に使う資料が書かれているようだ。

「『第十九条、本校には、風紀委員会、学習委員会、健康委員会、

整備委員会、広報委員会、図書委員会、の六つの委員会をおく」これが重要になってくるわけです」

「……？どうして？」

俺が質問をすると、日下は嬉しそうな顔で、自慢するように言った。

「なぜなら、この六つの委員会は、学校の中心であり、高い権力を持つ組織だからです。委員長以外は学期ごとにメンバーの再編成が行われますが、まあ、メンバーがどのこのうのではなく、その委員会自体が持つ、『特権』が重要なんです。例えば、風紀委員会なんかは、生徒の生活態度の指導や、持ち物検査という名目で人の鞆をあさることができますよね。仕事上、嫌われ役な分、学校での自由度が高く、教師たちから一番信頼されている組織ですよね」

「うーん……。そうかもな」

適当に相槌を打つておくと、日下は上機嫌になった。

ない胸を強調するように、上体を後ろに反らせ、両手を腰に当てている。

そんな日下の体中から、『わたし凄いでしょオーラ』が撒き散らされている。

…一体、何処が凄いのかは謎だが。

「私たちの目的は、生徒会執行部の撃破と学校を征服すること、それには、委員会が重要な役割を担うんですよ」

俺は頭にクエスチョンマークを浮かべる。

「つまりです、今の私たちの力で、生徒会執行部を倒せると思いますか？」

「いや」

俺は即答する。

一瞬、園部先輩から殺気を感じたが、気付かないふりをしておこう。

「その通り。だから、私たちは『打倒、生徒会執行部』の為、まずは学校で様々な特権を持つ、委員会を支配下に置こうということ

です。結局、私たちの主な活動内容を簡単に言えば、全委員会を制覇するために様々な方法を思案し、実行に移すことです」

「あーなるほど。『外堀を埋める』ってことか。へー……………」
一息つき。

「アンタらは馬鹿か？委員会さえ味方に出来れば、執行部を倒せるだ？笑わせるな、そんなに上手くいくわけがない。どんだけ頑張ろうが、例え全校生徒から認められようが、最終的には『教師』に叩き潰される。下手すれば、教育委員会が出てくるかもしれない。そんな絵空事に過ぎないことをほざいて…」

「やってみなければ分からないですよ……………」
今まで黙っていた穂積が俺の言葉を遮る。

その瞳には、怒りの色が窺える。

「そんなこと、やってみなければ分からないでしょうがッ！俺はね、あなたのようなすぐに『出来ない』と決めつけて、即諦める野郎が大っ嫌いなんですよ！」

穂積に胸倉を掴まれる。

あともう一步で、殴られそうになるが、俺たちの間に割って入るように、園部先輩が出てくる。

「まあ、まあ、君たちやめたまえ。そんな互いに損しか与えない喧嘩は時間の無駄だ。そんなクソみたいな時間と、労力の無駄遣いをするぐらいなら、日下さんの話を聞け。彼女が言うことは、この場の長である、僕が言うことと同じことなのだよ」

最後の方を暗めに言うと、園部先輩は再び偽生徒会長席へと座った。

すると、穂積は俺から両手を話すと

「……………すみませんでした……………俺が悪かったです」

椅子に座る穂積を無言で目で追うと、俺も元の位置へと座った。どんよりとした黒い空気が部屋を充滿しているように錯覚するほど、今の部屋の雰囲気は最悪だ。

日下があからさまに気まずそうな顔をしながら、話を続ける。

「……えっと。話を戻しますね。私たちは明日から本格的に活動を開始します」

息を大きく吸うと、日下は、周りの嫌な空気を吹き飛ばす勢いで、こう言い放った。

「最初の標的は、ターゲット図書委員会ですッ！」

「すみませんでした！」

俺は反省の思いを込めて、頭を深々と下げている。

そんな俺を上から見下ろすように見ているのは、この学校の『本当の生徒会長』。

校則違反ではないかと疑う、銀髪の麗しき女性。

灘崎椿先輩だ。

彼女の肩までかかる銀髪には、飾りも何もされてはいない。

強いて言うなら、片耳に前髪を掛けているということぐらいしか、洒落たものはない。

しかしながら、彼女の髪に当たった光の、独特な照り返しがとても美しい。

灘崎先輩は元々上がり目ではあったが、今は更に目が吊ってしま

っている。

「つまり、君は、『偽生徒会執行部』とかいう頭が狂った負け犬どもに拉致された揚句、その一員になってしまったと」

「はい…」

「そんな馬鹿だ」

「馬鹿つて断言されたッ！」

灘崎先輩は、嘆息をもらし、呆れたような顔をする。

そして、生徒会長席に踏ん反り返った。

きつちり着こなした制服のスカートが、中が見えない程度に軽く舞い上がる。

いや、俺も、何が何だか分からなくて…どうすればいいのか…。

「だいたい、生徒会室は三階にあるということ、君は知らなかったのか」

俺はすみませんと一言。

灘崎先輩は、俺を軽く睨み

「その集団を束ねている奴の名前は？」

「園部海彦という、三年生の男子生徒です」

「ふえ！？」

先輩は珍しく動揺した。

俺は、男勝りのクールな先輩が女の子っぽい態度をとったのに驚きつつ、先輩の様子を窺う。

「どうかされました？」

「い、いや…。と、とにかく、君は生徒会の顔合わせに出られなかったわけだが、どうするつもりだ？他の人は帰ってしまったぞ。私とだけ顔合わせをしてどうする？」

「えっと、まあ、それは大丈夫だと思います。皆さんが俺のことを知ってるかどうかは別として、俺は皆さんのことは完璧把握して

いるので」

そう、俺は任命式の時に、執行部全員の顔と名前を覚えていた。自慢ではないが、人を覚えるのは、割と早い方だ。

二人しかいない生徒会室に、沈黙が流れる。

その沈黙は心地いいものではなく、むしろ、思わず逃げ出したくなるくらいに心地悪い。

こうして見ると、生徒会室と、偽生徒会室の内部は、大して変わらない。

幾つかの長机を組み合わせで出来た長方形の卓に、まるで大企業の社長が所有してそうな、会長専用の席と机。

部屋の大きさもほぼ同じ。

もしかしたら、園部先輩が態わざと、そうなるようにしたのかもしれない。

「本当に、うみひ……じゃなくて、園部なのか？」

さつきから、灘崎先輩の歯切れが悪い。

「はい。何か問題でも？」

「ありありだアツ！」

「ひいッ！」

灘崎先輩の、予想外の切り返しに、俺は思わず喉から絞り出したような声をあげてしまった。

すると、灘崎先輩が、焦燥の表情を浮かべ

「あ、その、なんだ……。そんな明らかに、私たちに害を及ぼしそうな輩の長に、問題が無いわけがないだろう？ すぐにでも、対処しなければ……。まだ発足間もない組織なら、間に合うハズだ。害の元になる芽は、早めに摘んでおくに限る」

確かにそうかもしれない。

だけど、そう簡単にあの人たちが引き下がるわけがないと俺は思う。

「しかし、灘崎先輩。まだ、何も問題を起こしていない連中を抑えつけるのは難しいと思います。園部先輩は、生徒会をぶっ潰して、学校を征服するなんて言ってますけど、それが本気かどうか怪しいですし」

「ほう…。アイツはそんな馬鹿げたことを言い出したのか……。例えば、学校征服のための活動とか言ってたかったか？」

「まだ、具体的ではないですが、とりあえず外堀を埋める為、図書委員会を配下に置くとかなんとか…。」

灘崎先輩が、両手を胸の前で組み、困惑する。

おそらく、これからどうやって奴らの馬鹿げた考えを正すのかを考えているのだろう。

彼女のことだから、きっと、この問題を早急に解決できる、ミラクルな案を出してくれる。

俺はそう確信していた。

……だが。

「よし、では、天月、君に副会長としての任務を与える。それは、『そのまま偽生徒会に入って、奴らの動きを監視すること』だ」

「えッ！」

「何をそんなに驚く？まだ、奴らは動いていない。つまり、こちらから奴らに相応の処分を下すことができない。とはいえ、奴らがいつ動き出すか分からない。となれば、君が奴らの監視を担うことが最良の選択だと思うんだが。君は奴らの一員ってことになってい

るのだろうか？」

「……で、ですが先輩。それだと、俺がスパイってことですよね……。なんすか、そのインポッシブルな展開」

「大丈夫。君ならやれるさ」

先輩は、投げやりだった。

軽く俺に微笑みかけると、先輩は

「じゃあ、定期的に監視報告をよろしく」

と、さようならの挨拶代わりにそう言い残して、部屋から立ち去った。

そう、先輩は、逃げ帰ったのだった。

……無責任ですな。

おかしい。

何かがおかしい。

いや、全てがおかしい。

俺は精神的に疲れた体をひきずるように、トボトボとゆっくり家路を歩く。

頭の中は、今日あったことであっただけだ。

別に、新学期早々、女子からの嬉しハズカシ告白イベントがあったわけではなく、ラッキースケベイベントがあったわけでもない。

そんな煩惱とは無縁の出来事。

それは、生徒会執行部と偽生徒会執行部の、同時入会。

片方は実力行使で入れたが、もう片方は相手の恨みをかけて、強引に入れられた。

今日は、嬉しいことと悲しいことが同時に来た日だ。

プラス要素があっても、それと同じ、いや、それよりも多いマイナス要素があれば、結果的にマイナス。

要するに、新学期初日から、テンションダウンということだ。

そんな、お先真つ暗な俺の前に、誰かが立ち塞がった。

下を向いていた目線を、少し上に向ける。

すると、そこにいたのは…。

「ちよつと、話があるんだけど」

「……天月風美香だったけ？…何の用だ」

今日転校してきて、今日、偽生徒会執行部会計に任命された、天月風美香だった。

「…なんで、フルネームで呼ぶのよ」

「なんでって言われても、同じ名字の奴を、天月って呼ぶ方がおかしいだろ」

「だったら、風美香ってよべばいいじゃない」

「は？」

俺は正直驚いた。

下の名前で呼び合うのは、普通、仲が良くなった者同士がするものだという概念があったから。

「そうする以外方法はないと思うけど？私もアンタのことを名前
で呼ぶからいいでしょ？…えーと、確か……アンタの名前は…」

あまつきあきやまのしたびをと

「天月秋山之下氷壮夫だ」

「アンタの親は何を考えてるの？一度、顔を見てみたいわ」

「ハゲ親父とアホな母だよ」

「？」

俺のちよつとした冗談は、軽く流された。

「ところで、伊織。どうして、アンタは偽生徒会執行部に入ったの？」

名前、覚えてたのかよ…。

「はあ？俺は別に入りたくて入ったわけじゃないが…。お前こそ、何で入ったんだよ？」

「実は、私は生徒会の会計をやリたかつたの。前の学校でも、やろうと思つてたからね。だけど、この学校の執行部の選挙は既に終わつた。だから、それに近い、偽生徒会執行部に入つたのよ」
別に近くはないと俺は思うが…。

「それにね」

風美香は、少しの間をおくと

「単に面白そうだったから」
と、初めて見る笑顔で言つた。

……コイツ、かなりの『ひねくれ者』だな。

例えば、『右』と言つたら、『上！』つていうぐらいの変人。

「はあ……」

よくは分らないが、とりあえず俺は頷いておく。

「それで、朝のことなんだけど…」

「朝のこと？」

そつえば、朝、コイツにぶつ飛ばされたんだつたということを、
今更ながら思い出す。

まさか、謝罪をしに来たのか？

俺は風美香の言葉の続きを聞き逃さないように、聞き耳を立てる。

「朝のことなんだけど……。ざまあないわね！私も生徒会に入つたアンタが憎くて堪らないわ！」

[illegible]

何故、罵ののしったツ！？

そこは謝罪の言葉じゃないのっ！？

「ていうことで、明日からよろしくね。大嫌いな伊織。いつそ明日、変死体で見つかればいいのに」

じゃあね、と軽いノリで立ち去ろうとする風美香の背中に向けて、俺は大声で叫ぶのだった。

「死んで欲しいくらい俺が嫌いカッ！」

どうやら、天月風美香という女は、人を罵る為だけに態々時間を浪費する、相当の馬鹿で最低な奴らしい。

家に帰り、まず、俺の目に飛び込んできたのは、全裸で廊下に倒れている親父。

車に轢かれたカエルのようだ。

近くにある、脱衣所のドアが開いていた。

そこからモコモコと空気中の水蒸気が冷やされてできた、霧の様な水滴が立ち込めている。

俺はとりあえず、靴を脱ぎ、地面にうつ伏せで倒れている親父を
一瞥すると、その横を通り抜け、リビングに入る……と、見せか
けて、親父に近寄り、一発踏んでからリビングに入った。

「なんで、一発噛ましてくのツ!？」

背後から親父の声が聞こえたような気がした。

「あら、伊織。おかえりー。別に鍵で入って来なくてもよかった
のに」

「ただいま。だって、めんどくさいだろ」

リビングに入ると、カレーのいい香りが部屋に充満していた。

いつも、こうしてリビングに漂う夕食の香りを嗅いだ時、俺は家
に帰ってきた、と実感するのだ。

やはり、家には落ち着くものがある。

母さんが鍋の中身を混ぜながら、俺に話しかけてくる。

「伊織、どうだった？生徒会？」

「ああ。バッチリ副会長になってきたよ」

「そう！それは良かった！さすが私の息子！今日はお祝いね！」

「別にいいよ。でさ、廊下に落ちてた、猥褻物の塊は何？」

俺はナチュラルに大して気にも留めていない話題を振る。

母さんは一瞬、うん？、と唸ったが、すぐに何の事か理解して、
そのまま続ける

「ああ、アレね。アレは、父さんよ」

「そっちじゃねえーよッ！俺が聞きたいのは、なんで倒れてるの
かってことだよ！」

「えーとね。それは、お風呂に三時間籠ってたからじゃないの？
『ダイエツトじゃい!』とか言ってたわよ」

呆れた。

サウナごっこをしようとしたら、熱中症にかかったのか。

それに三時間ってなんだ、今は夕方の四時だぞ。

仕事はどうした、仕事は。

「どうしたの？浮かない顔して」

「それは親父に呆れてるからだよ」

「ううん。伊織、リビングに入ってきたときから元氣無さそうな顔してたわよ」

「……気のせいだって」

さすが、母親だ。

俺は内心、そんなことを思いながら、これ以上母さんと話してい
たらボロがでそうと考え、逃げるようにリビングを出て、親父の尻
を目尻に小走りで二階へと続く階段を駆け上がった。いった。

「それにしても、さすがは穂積先輩。上手いこと丸めこみました
ね」

そう言ったのは、偽生徒会執行部の副会長、日下瑠奈。

「いやいや、彼がちよつとアホだっただけですよ」

書記の穂積佑馬は、お得意の営業スマイルで最低なことを言う。

「これで、生徒会執行部に対抗できる頭数は揃った。僕の予想よ
りも、ずいぶん早い結成だったな」

チャームポイントの眼鏡をチャキッと鳴らすのは、会長の園部海
彦。

彼ら三人は、二人の天月がいなくなった今でも、偽生徒会室に居
座っていた。

「お二人とも、天月っていう珍しい名字でしたね。まあ、俺たちが言える義理じゃないでしょうけど」

「確かに、私たちも珍しい名字や名前の集まりですからねー。中二病かつ！」

「そんなことはどうでもいいとして…」

日下のギャグ(?)を完全無視して、園部は続けた。

そんな園部の対応に、日下はぷうっと頬を風船のように、可愛らしく膨らませて軽く園部を睨むが、何も口出ししない。

おそらくそれは、こんな下らない組織でも、長は長だからだろう。「伊織の方は何とかなると思っていたけど、まさか、風美香さんの方まで何とかなってしまつとは、正直驚きだよ。彼女も、僕たちと同じってことかな」

「お言葉ですが、園部先輩」

そう切り出したのは穂積。

園部は、何だ?、と一言言つと、穂積に視線を向ける。

「どうして、伊織君をこの組織に取り入れたのですか?彼は曲がりなりにも『正式な』生徒会執行部の一員ですから、こちらの情報が向こうに筒抜けになる可能性があるのでは?伊織君には悪いですが、まだ、彼は信用するに値しない」

「さあ?何でだろうね。僕は、彼がこの部屋に入ってきたときに何か、『運命』みたいなものを感じたんだよ。直観だけだね」

園部は会長用の机に両肘をつき、口元を隠すように両手の指をかめると、軽く微笑みこつ言つた。

「それに、イレギュラーな存在ほど欲しくなるものなんだよ。それが使い物になるかならないかは別としてね」

幕を閉じる新学期初日（後書き）

次から、メインストーリーが始まります（予定ですが）。
主要人物はまだ完全に出てませんが…。

ここまで読んで下さった方には、本当に感謝してます！

偽会長は変態（前書き）

偽会長のキャラを掴むための話です

偽会長は変態

人生は、したくてもできない、欲しくても手に入らない、なりたくてもなることができない、などと、思い通りにならないことばかりだ。

もしかしたら、それが『普通』なのかもしれない。

だが、自分の目の前に立ち塞がった壁を、本当に、『普通』と言って片付けてしまっているものなのだろうか。

全てのことを、『それが普通だ』とか『そうでなければ異常だ』などと決めつけてしまうことが、本当にいいことなのだろうか。

それを、もし、良しとするのなら、今、俺が『偽生徒会執行部』などとふざけた組織の一員であることもしかり。

俺の幸せ青春スクールライフが狂い始めたのも、きっと必然なのだ。

……などと、諦められるものかッ！

やっぱ、どう考えても、俺が変な野郎共の一味になったのはおかしい。

「伊織。どうだい？ここから見える世界は？」

「はい。どうやら、女子更衣室が見えますが…」

「だろ？」

「だろ？じゃねエッ！」

今気付いたことだが、どうやら、偽生徒会長こと園部先輩は、『かなりの変態』らしい。

眼鏡をかけて、如何にも秀才そうな彼の中身は、全て、エロで詰まっているのかもしれない。

腹をグツと押したら、口からエロエロッ？、と出てきそうだ。

「何で覗きを？」

「それは、風美香さんが来るまでの暇つぶしだよ」

俺は警察に通報しようとする右手を必死に抑えながら、身を振るよじように、ツツコミを入れる。

「スリリングな暇つぶしだな！！てかまず、覗きなんてするツ！？馬鹿か！」

「覗き？……ハア？伊織、君は何を言ってるんだね。僕は覗きなんてしていないよ」

「じゃあ、その両手に握りしめている、双眼鏡らしき物は何ですか！？」

「『ザ・サードアイ』さ」

「カッコよく言わないで下さい」

俺は嘆息し、右手を額に当てる。

そのどころが『第三の目』なんだ。

この人にはついていける気がしない。

頭良さそうで、自分勝手に、エロで、眼鏡で、偽会長で、エロで、エロ眼鏡で…

なんだこの残念な人物像は。

此処は、クラスの教室があるのとは別の校舎、つまり、理科室などの各教科専用の部屋や、偽生徒会室、文化部の部室などがある、多目的用の校舎の屋上。

何故、俺と園部先輩が此処にいるのかというと、話は少し前に遡さかのぼる。

無事、今日の全授業も終えた俺は、昨日、今日の放課後に偽生徒会室に集合を指定されていたので、偽生徒会室に向かった。

がしかし、着いてみると、俺と園部先輩しか集合していないとい

う、非常に集まりが悪い状況だった。

特にすることも、喋ることも無く、俺と園部先輩は気まずい空気を醸し出しながら、残り三人が来るのを待っていた。

強いて言うなら

『ゲヘヘヘ……伊織、君の人生を、360°変えてやるぜエ……』

『お前はレイ 魔か！？しかも、全く変わってねえよッ！』

という会話をした。

俺が偽生徒会室に来てから十五分くらい経った頃だろうか。

『伊織。この世界の裏を観に行かないか？』という園部先輩からの誘いがあった。

俺は気まずい空気が充満した部屋から出られるのならば、と思い、園部先輩の誘いに乗って、少しワクワクしながら園部先輩の後ろについて行った。

そして、この屋上に辿り着き、今に至る。

園部先輩は、屋上のベンチには座らず、向かいの校舎を、その両手に握りしめた『ザ・サードアイ』を通して見ている。

向かいの校舎の何処を見ているのかというと、二階の一部屋。

その名は、女子更衣室。

その男子禁制ルームはカーテンが空いていて、無防備にも中を丸出しにしている。

しかも、更衣室の中で着替えていたのは、風美香だった。

なんで、着替えてるんだよ……。

……言っておくが、俺は見えてないからな。

べ、別に喜んでなんか、ないんだからねッ！

だいたい、あの悪魔の様な女だぞ……。

見たら、殺されるよりも酷い目に遭う……。

「おー。おー。すんげー。おー。バイン…」

「少し黙って下さい！」

「……………おー。そんなー。えー。まじー。その曲線さー？」

確かに少し黙った。

園部先輩は昨日とは人が変わったかのように、まじまじと犯罪を犯している。

それに加え、鼻から流血。

「伊織ー。僕、思ったことがあるんだよね」

「はい？」

未だに風美香の着替えから目が離せないでいるエロの園部先輩に、俺は背を向け応える。

すると、園部先輩は、身動き一つせずに

「彼女は、類稀たくまれなる乳を持つちよるべ…」

「何を基準に!？」

「はあ……………」

俺は、本日何度目か分からない溜息をつく。

そして、先輩の耳に聞こえるように呟いた。

「あなたは最低ですね。女子はドン引きですよ。俺もドン引きですけど…」

「最低？だから何だ？」

園部先輩がようやく双眼鏡から目を離し、こちらを向く。

おや、珍しい。

「スポーツ万能、成績優秀、しかも性格も良く、おまけにイケて

る面だつたとしても、モテない奴はモテんのだよ！」

「確かに、プラス要素がいくらあつたって、女子にモテないのは幾分キツイ。ですが、プラスどころか、マイナスの域に達している先輩よりはマシでしょう」

先輩は俺を半分開いた目で睨み

「言うじゃないか。雑用の分際で」

そう言うのと、再び先輩は覗きを始めた。

いつか、捕まればいいんだ。こんな変態。

突然、園部先輩の鼻からの流血が爆発的に多くなった。

そして、黄昏たような表情に変わり

「……………エロスティック…」

それを言うならエロティックだろ。もつとエロく聞こえるぞ。

「ああ！クソッ！カーテン閉めやがった…」

先輩は小さく舌打ちすると、こちらに振り返る。

どうやら、覗きはもう出来ないらしい。

「もうすぐ、風美香さんが偽生徒会室に来るだろうから、僕たちも行くか」

「案外、諦めが早いんですね」

「それはどういう意味だい？」

「そのまんま」

偽生徒会室に帰ってきた。

俺と園部先輩が戻ってきたときには、既に全員揃っていた。

俺は自然な動作で、ドアから向かって左手前の席に座る。

左隣には風美香、向かい側には穂積、左斜め前には日下がそれぞれ着席している。

さすがに、今回からはお誕生日席は嫌だ。

「それじゃあ、本日の作戦を発表しよう」

園部先輩は、自分専用の席に腰を落とすとそう言った。皆が注目する。

「風美香さんと伊織は、二人で図書室に行き、敵の下見。日下さんと穂積と僕は二人とは別行動で」

「え!？」

「どうした、伊織。何か不満でもあるのか？」

「いえ…別に」

不満ではなく、不安なんです。

だって、風美香の毒舌ぶりには恐怖を感じるんだもの。

朝なんて、登校中、俺を背後からど突いて

『今日は一際酷い顔ね』

と、朝のおはよう代わりに罵倒してきた。

信じられなかった。

俺はそこで空かさず彼女に怒鳴ってやる。

『グヘヘエエー! だからなんだってのさアッ!』

言った自分にドン引きした。

とまあ、こんな経緯もあって、天月風美香は俺の中でも天敵の様な存在になった。

だから、こんな奴と一緒に行動するなんてことは、論外中の論外。自虐行為だ。

だが、この組織の中では、会長命令は絶対的な権限がある。

逆らうことは許されない。

もしも逆らったりしたら、もうお婿に行けなくなるかもしれない。股間のモノが無くなるかもしれない。

しかも、追い出されたりしたら、俺がこの組織に入っている目的というか、灘崎先輩からの命令が果たせない。

それは非常に情けない。

だから、俺はどんなに嫌でも、怖くても、自分に課せられた任務は遂行する。

それが例え、俺を破滅に導くとしてもだ。

「それじゃあ、行動開始。この部屋には五時半に帰ってくることにいいかな？風美香さん？」

「はい。大丈夫です」

「…なんで、風美香なんだよ？」

俺は周りの人に聞こえるか聞こえないかぐらいの声の大きさを呟く。

「君が頼りないからだよ。だって、君は『雑用』だからね！」

「それは、アンタらの所為だろおお！」

きつと、この人たちとは住む世界が違うんだ。

俺はこの時、そう思った。

偽会長は変態（後書き）

偽会長は、ムツツリとか、そういったレベルの人ではないんですよ

ここに、腐り果てた伊織があつたと仮定しよう（前書き）

いじられキャラと言つか、虐められキャラですね。

ここに、腐り果てた伊織があったと仮定しよう

「へー。この学校の図書室って、結構綺麗なのね。割と広いし」

「確かに。俺も滅多にこんな所来ないから、久しぶりに見た図書室の景色に驚きを隠せないよ」

「同意しないでくれる？気持ち悪い」

「酷エえッ！！」

『毒舌な人日本代表』と言っても過言じゃない最低な同級生、天月風美香と俺は図書室に来ていた。

目的は、『敵の下見』。

これは世界を探しても稀な、図書室に来た目的だろう。

だいたい、図書委員会を配下に置こうという考え自体が稀だ。

いや、本当に稀なのは、最低な負け犬こと『偽生徒会執行部』の連中そのものか。

彼らの脳味噌は世界遺産レベルの代物であろう。

というか、神器。

三種の神器（みくさのかむだから）とは、『鏡、剣、玉』をさすのではなく、実は、『園部、日下、穂積』をさすのではないのだろうか。

風美香はまだ彼らに毒されてはいないから三種の神器に入っていないものの、紛れもなく最低な人間であることは決定している。

まあ、結局何が言いたいのかというと、皆が皆最低、だということだ。

「図書室では静かにして下さい」

図書委員の女子生徒に注意された。

おそらく一年生だろう。

もう、委員会も決定したのか、早いものだ。

「ああ、すみません…」

俺は軽く頭を下げて謝罪の言葉を述べる。

すると、風美香が俺の肘を引っ張り、図書室の隅まで強引に連れて行く。

相変わらずだ。

このガサツさがせつかくの美なフェイスを駄目になっていると俺は思う。

声を極力抑え話す風美香。

「アンタの所為で図書委員会の下っ端に注意されたじゃない」

「下っ端って…。つか、別に俺だけでなく、お前もだろ」

「うっさい。減らず口。お前は伊織か」

「伊織だよ！その伊織の使い方止めろ」

俺の話を完全に無視して、風美香は周りを見渡す。

俺もつられて周りを見る。

やはり、ここは広い。

普通の教室の五倍は優に越えた広さだろう。

本もそれなりにあり、変な言い方、高校の図書室にしては万点以上の品揃えだ。

図書委員会を支配すれば、この部屋を独占できるわけだから、偽生徒会の行動範囲も広がるわけか。

「いないわねー…」

「誰が？」

「委員長よ。委員長」

「いなかったら駄目なのか？」

「馬鹿じゃないの？私たち…じゃなくて、私とアンタがここに来た目的は何？」

どうやら風美香は、俺と一緒にされるのを極端に嫌らしい。

「敵の下見」

「そう。だったら今回の相手の親玉は誰？」

「図書委員長」

「伊織なのに分かつてるじゃない。そうよ。だから委員長が不在だったらここに来た意味が無いの」

確かにそれもそうだ。

強敵は委員長なんだから、ソイツの情報を持って帰らない限り、収獲はゼロなのか。

「それじゃあ、ちよつと暇つぶしするか？そこにちよつと椅子と机があるし、本も、ほら、ここにあるしさ」

「まあ、ちよつとはいいいかな」

風美香は言つと、近くの本棚から何か一冊の本を抜き出すと、それを持つて椅子に座つた。

俺もそれに続いて、本棚から適当に一冊とると、風美香の向かい側の椅子に座る。

チラツと風美香の読んでいる本の表紙を見ると、まさかの論説文だつた。

「ちよつと、『伊織』を用いて音読してみるね」

「なんで!？」

俺の疑問なんて見向きもせず、風美香は相変わらずの謎多きテンションで音読を始める。

「……ここに、腐り果てた伊織があつたと仮定しよう」

「そこに至るまでの経緯を説明してくれ!」

黙れ馬鹿と風美香に言われた。

「もう、何の役にも立たない。犬も食わない。性欲も失せる。そんな汚物がここにあつたと仮定しよう」

「強調するな!いろいろおかしいし!」

黙れ馬鹿と風美香に言われた。

「気持ち悪くて仕方がない。視界に入れなくても、そこにあるだけで吐き気がする。そんな伊織がここにあつたと仮定しよう」
泣いた。

俺は生まれて初めて、美少女に泣かされた。
溢れる涙。

止まらぬ風美香の音読。

たとえ天と地がひっくり返ったとしても、風美香は風美香のまま。
この世に変わらぬものなど無いと言っても、鬼の風美香は永遠に
鬼の風美香なのだ。

「その状況に自分が出くわしたとき、やるべきことは三つ

1、ボランティアの一環として積極的に処理し、地域のために
なる行動をとる

2、無視する

3、立ち去ると見せかけて痛恨の一撃をお見舞いする」

「3は何故フェイント？」

「ほとんどの人はこの選択肢に辿り着くはずだ……」
無視された。

「ここは無難に2を選択することにしよう。気持ち悪いの極みを
構う人間などこの世にいない」

あら、意外。

でもなんでだろう、伊織の評価が底辺を突破した。

「しかしよく考えて欲しい、無視して何事もなかったかのように、
何物も見なかったかのように立ち去ろうとしたとき、ダークマタ
と化した伊織に背後を襲われる可能性があるということを」

「ねえーよ！」

「つまりはバッドエンド。いや、これはデッドエンドか。2の選
択肢の先にハーレムエンドなどありはしない」

「筆者、絶対ギャルゲー好きだろ！」

「いや、エロゲーらしいよ」

ああ、そっちな。

「話を先程セーブした分岐点に戻そう。ストーリーに大きく関わ
る重要な地点に。」

いつの間にセーブしたんだろう。

「2を選ぶ可能性は無くなった。つまり残っている選択肢は1か3の二つ。2を選んだ場合の失敗を考慮して、1の『処理をする』は避けて通った方がよさそうだ。何故なら、伊織を処理しようと近づいた瞬間、伊織に襲われてまたもやデッドエンドだからだ。そうすると、消去法で3が残る。3は1と同様、伊織に接近するほぼ自殺行為に等しい行動のように思われがちだが、痛恨の一撃をお見舞いするため1とは大きく違う行動なのだ。襲いかかってこようとする伊織を置きあがる前にノックアウトすることにより、新たな道が切り開くことができる。そう……。あや ルートという新たな道があるッ！」

「大丈夫かな、この筆者」

「頭が心配ね……」

ようやく風美香の音読が終了したようだ。

見事だった。

内容からなにも見事な伊織虐ネタだった。

「あ……」

俺の左斜め上、つまり、頭上から声が聞こえた。

そこに目を向けると、大量の本を抱えた、なんだか可愛い娘がいた。

身長は160センチあるかないか。

ウェーブがかかった艶のある髪が印象的だ。

図書委員だろうか？

「しい……」

その女の子は人差し指を立てて自分の唇に当て、キュートに注意してくれた。

か、かわいい……。

去り行く彼女の後姿を思わず目で追ってしまった。

「……………エロ伊織。そんなに巨乳が好きか。そんなにブラスケ

が好きか」

「嫌いじゃないですね」

「どうせ、私のスカートの中身も透視眼を使って常に見てるんでしょ。マジ有り得ない！」

「痴漢的な能力つけて、それにキレんな。そんな目を持っていたら、俺はもう出血多量で死んでるわ、馬鹿野郎」

馬鹿野郎は俺の方だった。

そういえば、確かにさっきの女の子は出る物が出ていた。
スタイル良いつていえば良い方だな。

つか、完璧だった。

「誰なんだろうあの可愛い娘……」

俺がそう呟くと、風美香が不機嫌そうな顔をして

「アンタ、あの娘知らないの？三年の火坂先輩じゃない。私より一年も多くの学校に居るのに、あの巨乳美人で有名な火坂さんを知らないなんて、ねえ……。アンタ、まさか友達いないの？」

馬鹿にされた。

失礼な。

数は少ないけど、俺にもちゃんと親友と呼べる友人はいる。
ちなみに同じクラスの中西っていう奴なんだけど。

「いるよ。少なくともお前よりは」

「…………ふーん。そう。そりゃ良かったわね」

上から物を言う態度を改めようとしななんだな。

俺は興味なさげな反応を示す風美香に多少の怒りを覚えながらも、
そのことは気にしないようにする。

気にすればキリがない。

コイツはこういう奴なんだ。

そう割り切れば我慢ができないこともない。

自慢ではないが、俺は人よりも心が広いと思う。

「でさ、どうすんだよ？このまま委員長が来なかったらとんだ無

駄足だし。委員長が来ることに賭けて待つにしても、暇つぶし用に俺がテキストにとった本は『きなこあげパン』っていう意味の分からん文学小説だったし……」

「それだったら、とりあえずこの図書室の見取り図を描いて偽生徒会室に帰りましょう」

俺は疑問に思う。

「どうしてそんなものがあるんだ？」

「一応よ。一応。収穫なしじゃあダメでしょ」

「まあ、そうだけど……」

「とにかく、アンタ、描きなさい。隅々までキチンと」

「はあああ？」

「何か文句ある？」

俺は『ある』と言呟くと、風美香から渡された紙とボールペンに、渋々図書室の見取り図を描き始めた。

なんでこうなるんだろうな。全く。

最初に声を発したのは偽生徒会書記の穂積。

「園部先輩、失礼ながら今俺たちは何をしているのでしょうか？」

「図書室付近の地形を調べてるんだよ」

応えたのは偽生徒会会長こと園部。

「どうしてそんなことを？」

再び園部に質問したのは穂積ではなく、偽生徒会副会長の日下。

彼女は偽生徒会執行部の中で唯一の一年生である。

「図書委員会との決戦に備えるためだよ」

「チャキ、と眼鏡を掛け直す園部。」

ここは図書室前の廊下。

放課後だからか人の通りはさほど多くは無い。

「だけど、実際はこんなことをするよりも、図書委員会に決闘を挑むために、勝負の内容を考えないといけないね。ああ、そういえば、あと偽生徒会のアピールも全校生徒の前でしなければいけないね」

「分かりました！今から考えます！」

園部に小さく敬礼する日下。

まだ幼い風貌を感じる彼女が真剣な顔でそんなことを言うと、思わず笑みが零れてしまう。

園部も穂積もそれに当てはまるようだった。

「あッ！笑いましたねッ！伊織先輩ぐらい馬鹿にしてるでしょ！……いいですよ、すっごく良い案を出して、お二人を絶対に見返してやるんだからッ！」

その時、図書室のドアがガラガラと開いた。

園部、日下、穂積の三人は一斉にそちらを向く。

「あれ、みんな揃ってる」

俺と風美香が図書室から出た時、予想外にも園部先輩、日下、穂積の三人がいた。

「ああ、伊織、風美香さん。最初の下見はどうだった？何かいい情報はあったかい？」

「いえ、伊織の所為で何も得られませんでした」

「そうかい」

園部先輩との話を風美香が完結させてしまった。

「ちなみに僕たちは付近の調査してるんだよ。何処に何があると把握しておきたくてね」

「図書室内部なら、ほら、見取り図描いてきました」

「おお！よくやった！良い仕事したね風美香さん」

誰もが俺の頑張りを肯定しなかった。

そんなに俺役に立ってないですかッ！

ここに、腐り果てた伊織があつたと仮定しよう（後書き）

まだまだ、話が微妙ですが、ここまで読んで下さった方はありがとうございます。

決意表明（前書き）

結構、お下品な内容となっているので、お気をつけください。

決意表明

図書委員会の第一回目の下見をした翌日。

朝から俺はとある人物と駄弁っていた。

「なあ、伊織」

クラスメイト兼、俺の友人の中西に話しかけられる。

俺はどうした？と言返す。

「実は俺、オネエ系なんだけど、どうしたらいい？」

「知るか！」

目の前にいるのは、数少ない俺の友人、中西。

残念ながら、オネエ系だったようだ。

オネエと友達って、嫌過ぎる。

心の底から嫌だ。

「俺：今、マジで友達をやめたくなっている……」

「現在進行形！？今のは二割冗談なのよッ！」

充分本気じゃねえか。

「はあ……これから、全校集会で喋らなくちゃなんないのに、なんなんだこの気持ち」

「それは恋だよお馬鹿さん」

「馬鹿はお前だ」

嘆息する。

気分は最悪。

だって、何度も言うけど、数少ないお友達がオネエなんだぜ？
死にたくなった。

「なあ、伊織」

「なによ……じゃなくて、何？」

オネエが伝染してしまったようだ。

死にたくなった。

「俺を何かの委員長にしてくれないか？」

「無理だ。オカマ馬鹿」

「馬鹿オカマの方が正解に近い」

「何の！？」

なかなか話が進まない上に、その原因の内容が品性を疑う。

「つーか、なんで無理なのよ？」

「そりゃ、委員長つてのは、生徒会とほぼ同じ扱いだし、今更変えられるわけないだろうが。それともなんだ？お前まさか、オカマの癖して三年生の先輩に喧嘩売るつもりなのか？」

「いやいや、別に委員長団は全員が三年つてわけじゃないでしょ？だつてほら、図書委員長は確か俺たちと同じ二年生のはずよ」

「え？そうだっけ？そして気持ち悪い、オカマ」

「え？逆にそれを知らずに副会長を名乗つてんの？そして気持ち悪くて何が悪い？」

「悪かったな、それでも副会長なんだよ。そして、気持ち悪いって言つてんだから悪いよ。気持ち悪いは罪だ」

俺がそう言いきつた直後、中西は突然何かを思いついたような表情をする。

そして俺に軽くキモ過ぎるウィンクをすると、

「良いこと思いついた！」

「今すぐ忘れろ」

「おお！これは我ながら名案だ！」

中西にすら無視される。

死にたくなった。

これで三回死にたくなった。

「ちよつと考えてくるから、行つてきまゝす」

手を振りながら去り行く中西。

「二度と帰つてくるなよー」

俺も右手を大きく振り返ししながら、満面の笑みでそう告げた。

全校集会。

今日の全校集会は、俺の所属する『本物の』生徒会の、決意表明というか、なんというか。

まあ、とりあえず、全校生徒に好印象をもってもらったための『アピール』を行っていた。

演台に立つ灘崎先輩の後姿を見詰め、体育館ステージの端の方に、生徒会全員が並んで立っていた。

俺は会長に最も近い、右端に立っている。

俺の左隣から順番に紹介しよう。

まずは常時ダルそうな顔をしている、すぐ隣の男子の先輩は、りわりなみと瓜破波人先輩。

会計だ。

その隣のカールがかったロングヘアーの、見るからに『女王様』な女子の先輩は、ほりかわありす堀川有澄先輩。

穂積に打ち勝ち、書記の座を独占している人だ。

彼女の書く字は神がかっている。

そして、その更に隣の、大きなゴツイ男子の先輩は、こだまたくま児玉拓真先輩。

クールマツチヨな庶務だ。

今紹介して分かってもらえたと思うが、俺以外は全員三年生の先輩で生徒会は構成されている。

「我々、生徒会役員一同、何事にも全力を尽くしていく所存です
ので、よろしく願います」

灘崎先輩がそう言って最後を締め括る。

体育館内に響き渡る全校生徒の拍手。

さすがは灘崎先輩。

決まったな。

俺がそう思っていると、何やら生徒席の方から誰かがステージに上がってきた。

しかも、一人ではない。

四人だ。

俺は一番最初にステージに上がってきた人の顔を見て驚愕した。

それは園部先輩だった。

その後ろから、『貧乳』の日下、穂積、風美香の順に上がってくる。

ざわめく体育館。

教師たちは何が何だか分かっていないようだ。

「なに？こいつら」

左隣の瓜破先輩が俺に訊いてくる。

俺は飽く迄も、「さあ……？」と知らんぷり。

「ちよっと、そこをどいてくれるか？椿」つばき

そう言ったのは園部先輩。

しかも下の名前で灘崎先輩を呼んだ。

「う、海彦……」うみひこ

灘崎先輩も、園部先輩のことを下の名前で呼んだ。

どういうことだ？

灘崎先輩は園部先輩に肩を軽く押されると、そのままフラリと演台から退く。

「まずは偽副会長の日下さんから、よろしく。最後は僕が締める」
園部先輩がそういうと日下が園部先輩に軽く会釈してから、演台に立つ。

皆の視線が日下に集中する。

マイクに入らない程度に日下は、「ったく。生徒会は何を表明してるんですかねー」と毒突くと、大きく息を吸い、堂々と言うい

放った。

「私はこれから貧乳を脱し、爆乳になる所存ですので、皆さんどうか応援よろしく願います!」

「アンタこそ何表明してんだ!」

俺は思わずツツコミを入れてしまった。

いやここはツツコミの入れどころだろうとは思うが、なんだか口からパンツが出そうなくらい恥ずかしい。

園部先輩はパンツ!と日下の頭を平手打ちをすると、日下を無理矢理その場から退かせる。

「えー。まあ、彼女は貧乳なので仕方ないのです。そんなことはさておき、本題に入りましょう」

なんて残念なフォローなんだ。

そこは「ちよつとした余興です」みたいなこと言っつて、無理にでもフォローしろよ。

俺の右隣に並んだ日下が涙目じゃないか。

頭を両手で摩っている日下に、声のボリュームをある程度落として話しかける。

「お前、何『爆乳宣言』してんだよ」

「ふえ……。本当はゲリラライブ的な感じに、我が偽生徒会執行部のアピールをしようと思ってたんですが……。思わず、爆乳宣言を……」

「さすが最低な負け犬集団。全てにおいて最低且つ残念だな」

俺がそう言つと日下は俺を睨みつけ、

「う、うるさい!先輩は伊織ですか!」

「伊織だよ!その伊織の使い方は流行りか!」

俺は嘆息する。

日下はしゅんとなり、こつ言つた。

「ま…その、あれですよ。ほら、よく言つじゃないですか。『^{ぽっ}膀胱にも筆の誤り』って」

「股間に何が起きたんだ!」

それを言つなら『弘法にも筆の誤り』だ。
尿管が爆発でもしたのか…？

日下の更に右隣に並ぶ穂積と風美香が、日下にダメ出しをする。

「ちよつと、日下さん。しっかりして下さいよ。ここでおっぱいを語つてる場合ですか？まったく、なにやってるんですか……。P・S・貧乳にも需要はありますよ」

『P・S・』の使いどころがすげえ。

「^{るな}瑠奈…。まあ、今回はしょうがないとして、次回は頑張つてよね。必要だつたら私の胸、多少あげるから」
初めて知った。

胸つてプレゼントできるんだ、つてそうじゃなかった。

風美香は日下のことを胸つて呼ぶんだ、つてだからそうじゃなく…。

いい加減、乳房から離れろ、俺。

風美香は日下のことを瑠奈つて下の名前で呼ぶんだ。

これは新発見。

……………やつと言えた。

今度から『谷間の呪い』には気をつけねば。

パンツ！と園部先輩が演台を叩く。

どうやら俺たちが話している間に、かなり話の内容が進んでいるようだ。

もうそろそろ終わりか。

つか、周りの雰囲気を押されてあの人が前に立つて熱弁するのを誰も止めないけど、実際あれは会長の灘崎先輩が何とかするべきじゃないのか…？

何をしているんだ、灘崎先輩。

あんなに良い胸してるのに…、つて、だから、いい加減、お乳か

ら離れろ、俺。

「我ら『偽生徒会執行部』は、そこにいる『生徒会執行部』を超える存在となり、最終的にこの学校の核となります！つまりは『学校征服』を成し遂げて見せますので、皆さんよろしくお願いします！」

「何をよろしくしてんだ！！」

俺は再びツツコミを入れてしまった。

喉の奥からもうパンツの端が出ている。

予想外にも、全校生徒は、おおー、と言うと、灘崎先輩にも劣らない拍手を園部先輩に送った。
なんてこった。

ここの全校生徒はどうかしてるぜっ。

相変わらずおどおどしている教師たちを放っておいて、今回の全校集会は幕を閉じるのだった。

昼休み。

俺はオネエ系の中西と、机の前の部分をくっ付けあって、一緒にコンビニ弁当を食っていた。

今日は我が母が弁当を作ってくれなかった。
何故なら、母は俺にこう言ったからだ。

「えー、弁当作るのめんどくさいな！。弁当作るくらいなら、もう、あなたの母親辞めようかしら……」

弁当が理由で母親を辞められても困るので、俺は仕方なくコンビニ

二弁当を買って食っている。

中西が話しかけてくる。

「でさ、伊織」

「何？」

「朝に男子更衣室のロッカーに頭突っ込んで考えた俺の素晴らしいアイディアなんだけどさ」

その後、男子更衣室のロッカーに頭突っ込みに行ったのか…。
シュール。

「私がさ…」

「キモい」

「俺がさ、委員長になるには新しい委員会を作ればいいと思ったんだ」

「へえー。それで」

今の一言で、俺の口から梅干しの種が誤って射出されてしまい、中西の額に見事に命中してしまったことなんてどうでもいいとして、中西のアイディアは実現可能、不可能関係なしに、素直に面白いと思った。

「それで、その新しい委員会っていうのがだな…」

再び俺の口から梅干しの種が間違って射出されるが、今回は中西の右の鼻の穴に見事にはまった。

中西は気にしない。

「その、委員会っていうのは…」

「委員会っていうのは…？」

「『仲良し委員会』だ」

「却下」

俺は一言そう言うと、海老フライを銜え、そのままムシャムシャと食べる。

平穏なランチタイムが訪れた。

放課後。

俺は偽生徒会室に呼ばれていた。

今日のアピールの反省をするらしい。

全員定位置に座っている。

「それで、日下さん」

園部先輩が日下に言う。

「君はどうして爆乳になりたいんだい？」

そっちか！？

俺は心の中で突っ込みを入れた。

「え…えっとそれは」

「でかけりやいいってもんじゃないんだよ！分かるかい！？日下さん！？」

園部先輩は鼻をムツホムツホさせてそう言った。

「失礼ですが会長。いい加減、反省を始めましょう」

爽やかイケメン最低ボーイの穂積が園部先輩の変態モードに歯止めをかける。

「おっほん。では、始めようか。日下さん、今日の君のミスは痛かった。あの責任はどうやって取るつもりなんだい？」

「爆乳になって取ります」

「そうか。じゃあ、今からの活動予定を言うよ」

ええッ！今ので反省終了！？

しかも爆乳になることで責任を取れるのか！？

さすがにこれは声になっていた。

風美香にうるさい馬鹿と言われ、俺は無理矢理流される。

「伊織、それをとって」

園部先輩がそう言うてきた。

「それ」

「それって？」

「それ」

「だからそれって……」

「それなんだからそれなんだよ」

「一体何の事ですか？」

「あーもう。この世の言葉が全部『伊織』だったら楽なものになー。嫌嫌言ってるけど、伊織は正直なんだなア。ゲヘヘ」とか『伊織からいやらしい汁が垂れてるぜエー』とか『ああ！そ、そこは！伊織はらめえ〜』とか『伊織が壊れちゃうう〜！い、イクー！』とか言葉が短縮できて便利なんだけどなー」

「俺はアソコか！！」

ツツコミの勢いの余り、立ちあがってしまった。

うるさい変態、と風美香に言われ、俺は黙ってその場に座る。

「伊織、だからその伊織をとってくれないか？」

「その伊織の使い方止めて下さい！ややこしいので！」

「あーもう。君の目の前にある紙だよ紙」

「どう考えたって、伊織よりも文字数少ないですけど！！」

「いいから早くその伊織をとって」

仕方なく俺は目の前に置いてあった、ペラペラな五枚の伊織を園部先輩に渡した。

すると園部先輩は紙を受け取ると同時に、ビリビリと破り始める。まるで親の敵かたきかのように紙を破るその姿は、眼鏡をかけた悪魔の様だった。

つか、紙は説明に関係なかったのかよ。

「はい、じゃあ説明するよ。今回は図書室に全員で乗り込む。この前、風美香さんが書いてくれた見取り図があれば地形の方はもうバッチリ。もう伊織以外は打ち合わせが終わってるから、何をすればいいか分かってるね？」

日下、穂積、風美香の三人は、はい、と返事をする。

「俺以外って差別じゃないですか！」

俺は園部先輩に文句を言った。

「軽蔑さ」

園部先輩の返答は、ひどく冷たかった（泣）。

「それじゃあ、皆、出撃だ！」

園部先輩が握り拳を頭上に掲げると、俺以外の全員が、おー、という掛け声とともに偽生徒会室から出て行く。

俺も仕方なく、おー、とやる気なく言っていると部屋から出た。

ようやく図書委員会の二回目の下見が開始されようとしている。と言っても、内容は全く知らないけど。

だって、教えられてないし。

軽蔑されてんだし。

奴らは相当俺のことが憎いらしい。

決意表明（後書き）

自分で読み返してみて、ちょっと内容に引きました（笑）。
いえ、ちよつとではなく、ドン引きですね。

これじゃあ、否定的な意見が来てもおかしくないですね！。

しかも、ネタが入り過ぎて話が進みません。

本当はもっとネタを入れる予定だったんですが、余りにも長くなるので、こんな微妙な切り方をしてます。

ここまで読んで下さった方は本当にありがとうございます！

そして、お気に入り登録して下さってる方、いつもありがとうございます！
ざいます！

78の奇跡（前書き）

伊織の弄られようが爆発します。

78の奇跡

さて、これは俺に対するサプライズなのだろうか。

もしも、この扉を入った先に、可愛い女の子が立っていて、俺への嬉し恥ずかし告白イベントが発生するのならば、軽く小躍りものだ。

その後、ラッキースケベイベントなんて平面世界のみでのアダルトー事件が、次元を超えて発生した場合、軽く出血多量、鼻孔崩壊ものだ。

まあ、そんなもの期待する必要なんてない。

何故ならば、今から俺が入ろうとしているのは『図書室』だからだ。

しかも中で待つのは、風美香、日下、穂積という恐るべきメンバー。

終わった。

俺の家系が父親方のみならず、母親方の家系もハゲばかりだということを知ったときくらい終わった。

そんな優性遺伝子、嫌過ぎる。

ふと、俺はそんなことを考え、自分の髪に思いを馳せた。

頼むから、君たちだけは生き残っておくれ…。

「伊織」

「はい？」

園部先輩から唐突に話しかけられる。

「ちよつと、変顔してみてくれ」

俺は素直に、1946年代の毛沢東の様な顔を試みる。
素晴らしい顔芸だという自負がある。

「おお…」

園部先輩は感嘆の声を上げ、こう言った。

「その顔の方が普段より数倍マシだなあ！」

「酷えッ！！」

何より自分の顔が酷いことに気が付いた。

凄まじい顔だ。

まるで性犯罪者の様な、凶悪でエロい目つき。

終わっている。

園部先輩は俺の肩をポンポンと叩き、

「まあ、これで君の緊張も和らいだことだろう？」

「緊張すらしてねえよ！つか、この右腕の油性マジックペンで書かれたバーコードは何ですか！？」

俺はさっき日下に落書きされた右腕を、園部先輩に見せつける。

「それを書かれた理由は後で分かる。さあ、言ってくるんだ、伊織。打ち合わせ通り、君は穂積の元へと向かうんだ」

背中をグイッ、と押される。

俺は嘆息すると、仕方なく図書室のドアを開け、中へと一歩入った。

何故こんな馬鹿げたことをしなければならぬのだろう。

理由として一つ挙げるとするのならば、灘崎先輩が投げやりなのが悪い。

おかげで巨乳のことが嫌いになりそうではないか。

言われた通り、まずは穂積の元へと近づく。

周りを見渡す。

どうやら穂積たちは図書室内に散らばっているようだ。

日下はここから右斜め前方にある、文法系の本がズラリと並ぶ本

棚を見ている。

意外に様になっているのに驚く。

風美香は部屋の隅っこの方に、『歳時記』を読むふりして立っていた。

読んでいる本がどうであれ、その凜とした姿には思わず見とれてしまう。

長い黒髪は、不思議とこういう時に知的な印象がある。

最後に俺は清純派最低イケメンこと、穂積を見る。

いつもながらイラつくほど美形だ。

この世界から美形を追放したくなった。

「さあ、逝きましょうか」

「あれ、気のせいかな？なんか文字が違う気がするんだが」

俺は穂積にそう言ったが、完璧に無視される。

いつものことだ。

「まあ、俺は、無視されれば無視されるほど強くなっていくから別にいいがな！」

強がる自分に度肝を抜かれた。

数歩歩くと、俺と穂積は貸出兼返却のカウンターの目の前まで来る。

そこにはなんと、この前俺と風美香を優しく注意してくれた、三年生の火坂さんがいた。

我が天使、降臨。

「貸出ですか？」

可愛らしく尋ねてくる火坂さん。

やはり図書委員だったのか。

「はい」

そう言って、穂積は手に丁度収まるサイズのカードを取り出す。

うちの学校は、本の貸出をするために、個人のカードを使う方式を採用していて、図書室にはそれに対応して、ハンドスキャナーとパーソナルコンピュータが設備されている。

穂積は突然こう言う。

「天月伊織、借ります」

「何を血迷ったッ！？貴様！！」

俺はツツコミを入れた。

前代未聞だぞ、図書室で人を借りるなんて。

「え、えつと…」

火坂さんは困り果てた顔をする。
当り前だ。

明らかに図書委員会の貸出許可範囲を超えている。

それに勝手に貸し出されても困る。

「伊織君、右腕を」

「これはそのためだったのか！」

自分の右腕を見て驚愕した。

まるで親父の頭頂部にも似た、見事なバーコード。

俺はふと、過去の出来事を思い出す。

そうだ、あれは俺がまだ幼かった頃。

胡坐を掻いている親父の頭に右手をかざして、「ピッ」と言ってみたことがあった。

すると、親父はこう呟いた。

「370円」

意外に安かった。

まあ、そんな取るに足らないことはどうでもいいとして、とりあえず、俺は火坂さんに右腕を差し出してみる。
すると、火坂さんは満面の笑みで

「ピッ。3700円です」

「金取るのかッ!!」

まさか三千七百円で買い取られるとは思ってもみなかった。いくら親父の十倍の値段とはいえ、四桁は非常に安価だ。なんてことだ。

俺は中古と化した、不朽の名作エロゲーと同等なのか。

灘崎先輩といい、火坂さんといい、巨乳のことがマジで嫌いに

「てへへ。嘘です」

なれなかった。

「ドッキューンッ!」

あはーん。

照れたように謝る火坂さんが異常に可愛くて、俺は変な声を出してしまった。

即座に緩みに緩んだ自分の口元を締める。

さすがにこれ以上は人として何かを失いそうだったので、気を紛らわす為、穂積を見た。

すると、穂積は、あはは、と乾いた笑いを俺に送り、火坂さんに会釈する。

そして俺の腕を引っ張りながら、図書室から廊下へと出た。

廊下に出ると、園部先輩が腕を組んで立っていた。眼鏡をチャキ、と鳴らす。

園部先輩は俺を見るなり、

「はい、1キモス」

「何だその単位!？」

「気色悪さを数値化する時に用いる単位だよ」

「なら、あなたは何キモスなんですか？」

「78キモス」

「もはや、キモ過ぎるとしか言いようがない」

俺は初めて、園部先輩を尊敬の眼差しで見詰めた。

そう。

何故なら彼は、俺より78倍キモいからだ。

「さて、ここから面白くなってくるよ。図書委員会の人材調査にはこれぐらいしなればね」

園部先輩は図書室のドアを少し開け、中を覗き見ている。

やはり覗き見るのには慣れているのか、動きに無駄が無い。

「伊織。君の失礼な実況がただ漏れになっているんだけど、しめいろう絞殺されたいのかい？」

「すみませんでした。以降、聞こえないように実況しておきます」

「全然反省してないよね？」

ボケとツツコミが逆転した。

珍しい出来事もあったものだ。

俺はそんなことを思いながら、園部先輩と同じようにドアの隙間から中を覗き見る。

その瞬間、俺の視界が眩い光でいっぱいになり、目が開けられなくなった。

必死に瞼を開けようとするが、その眩しさ故、数ミリたりとも動かない。

明々としたその温和な閃光は、俺の身体を優しく包み込む。それはまるで天使の抱擁のようだった。

俺は天使の甘い誘いに導かれ、光の世界へ旅立つ…。
…なんてことは、全然なかったんだけど。

視線の先には日下が居る。

日下は挙動不審だ。

先程から貸出カウンター付近をうろついては、あっちを行ったり来たり。

さすがに火坂さんも不審に思っているようだ。

日下はカウンターに接するように置いてあったゴミ箱の中身を、食い入るように見詰めると、火坂さんに向けてこう言った。

「あのお。天月伊織って何処にありますか？」
間違いなくゴミ箱には無えよッ！

俺の隣で穂積がボソボソとこう呟く。

「…なっ、なにい！そんな馬鹿な！ゴミ箱に無いとすると…天月伊織は一体何処に…？まさか、推理小説の棚にあったりするののか？」
残念、ここにいます。

穂積の言葉に園部先輩が反応する。

「推理小説の棚にはあったりしないよ。天月伊織は18禁コーナーにあるのさ。馬鹿ホズミン」
アンタの方がよっぽど馬鹿だ。

俺は再び日下に視線を戻す。

すると、火坂さんが日下の無茶ぶりに、超がつくほど焦りながら応対している最中だった。

「えっ、えーと、天月伊織はもう亡き者となりました」
生きてますよッ！？

まったく、紛らわしい言い方やめて欲しいなあ。」

あははは。

可愛いから許す。

「ま、まさか……。既に他の誰かに借りられたのですか？」

「あつ、はい、そういうことです」

聞いた瞬間、日下は両手で頭を押さえて、

「うわあああああッ！穂積先輩だあー！先越されたあああああッ！」

「ただ天月伊織を借りたかったんだ、あの貧乳。」

「乳がない癖に調子乗ってんじゃねえぞッ！」

俺には品がなかった。

「突然どうしたんだい？伊織」

「いえ、何でも……」

俺は、こほん、と一回咳払いをする。

俺は日下に注目を直した時、驚愕した。

正確に言うと、日下の背後から現れた風美香に驚愕した。

「すみません。天月伊織って何処に捨てられていますか？」

既に尋ね方がおかしいわ。

俺はゴミか。

すると火坂さんが予想外な行動に出る。

まさにそれは今世紀最大の謎。

宇宙最強に意味不明の戯言。

「今から出す問題に答えられれば、どの『ゴミ箱』に捨てられてあるのか教えてあげますよ」

風美香は、フツ、と一笑すると、「いいでしょう」と臨戦態勢を示す。

何ということだ。

このままでは、火坂さんが悪魔に喰われちゃう。

しかし、俺は動くことができない。

何故なら、先程から穂積に左のつま先を、必要以上に踏まれているからだ。

正直言つと

痛い。

「では問題です。金子兜太の俳句、『人体冷えて東北白い花盛り』この俳句の中にある、白い花とは何の花のことでしょう?」

風美香は顎に手を当て目を瞑り、じっと考える。

そして、

「…伊織じゃない?」

何、咲いちやってんだよ。

火坂さんはそれに対し、飽く迄も冷静に、

「春を告げる花です」

「うーん…やっぱり、伊織しか思いつかないわ」

何、春告げちゃってんだよ。

脳の言語機能の78%が伊織で占められている風美香が分かるわけがないと、俺はこのときまでは思っていた。

俺は風美香を侮っていた。

もちろん、俺自身、先程の問題の答えは知っている。

白い花、それはリンゴや梨など、東北の春を代表する果物の花のことだ。

さすがにこれでも、俺は生徒会で唯一の二年生。

いや、実際、選挙があつたのは一年生の頃。

学力は人並み以上あるという自負がある。

ならば、これぐらい分かなければならないだろう。

話が少し逸れてしまった。

まあ、俺はこの時までには風美香の学力が如何なるものか知らなかったのだ。

そう、風美香は俺の予想とは裏腹に、正解した。

「えーと、なら、リンゴ？」

「ぴんぽーん！正解！」

「おっ、やつぱりね。最初に、あの伊織とかいう変態的ワードが出てきた自分にビックリよ」

どうも、変態です。

その時だった。

「うるさい。図書室がやけに騒がしいじゃないか」

図書室を変態的に除く俺たちの背後から、少しトーンの低い声が聞こえた。

やけにドスが効いているが、これは女子の声だ。

三人がほぼ同時に振り返る。

「学校の風紀を乱す者。このアタシがぶち殺す」

そして、俺は全身に電流が奔ったかのような感覚に陥った。

こ、コイツは確か……。

「風紀委員長……」

俺は無意識の内にそう言っていた。

この状況はマズい。

現在の風紀委員長、板垣恋いたがきれんはこの学校創立の歴史上で最強と謳われる程の兵。つわもの

灘崎先輩に負けない、男勝りなその態度。

風美香に負けない、その完全無欠な美貌。

火坂さんには劣るが、それでも素晴らしい豊満な胸……ってそれは関係なかった。

とにかく、板垣先輩は最強なのだ。

唐突に板垣先輩に話しかけられる。

「こんな所でどうしたんだ？副会長」

「え、いや、それは…」

板垣先輩は、前髪で隠れてしまった左目とは反対の右目でこちらを見てきた。

肩に掛かるか掛からないかという長さの髪が軽く揺れる。

灘崎先輩以上に吊り目な彼女が見詰めてくると、睨まれてる気しかしない。

「やあ、板垣」

そう言ったのは園部先輩。

「園部、お前はアタシのブラックリストに載っているということ
を忘れたのか」

「忘れた」

園部先輩はとんでもない人だった。

「そこをどけ、今アタシは風紀委員として活動しているんだ」

言うところ、板垣先輩は左腕に付けた腕章を見せてくる。

「すまないね。それはできないんだ。何故なら僕たちは『偽生徒
会執行部』として活動しているんだから」

言うところ、園部先輩は制服の袖を捲り上げ、肩に油性ペンで書かれ
た『にせせいとかいしっこうぶう』を見せつける。

嫌だよそんな腕章！

何ダサさを自慢してるんですか！

腕章とも言えない物を見て、板垣先輩はこう言った。

「下らない。偽者なんて」

それに対し、園部先輩はこう言った。

「偽モノですが、何か問題でも？」

この時の園部先輩の一言を、俺は一生忘れない。
そんな気がした。

板垣先輩が片手を上げる。

すると、階段の方から大量の男子生徒と女子生徒が上がってきた。全員、腕に風紀委員会の腕章をつけている。

板垣先輩はふうー、と息を吐くと、

「風紀委員全員に告ぐ。偽生徒会執行部に所属する連中を取り抑えろ」

そう冷たく言い放った。

……………え？

78の奇跡（後書き）

無駄に長いです。

本当なら風紀委員の下りの続きも書く予定だったのですが、ここの切らせていただきました。

なんか、伊織って胸好きですね…。

此処まで読んで下さった方、ありがとうございます！

お気に入り登録して下さっている方、いつもお世話になってます！

素晴らしきKSS 1（前書き）

図書委員会との対決に向けての第一歩です。
長かったので、1と2に分けました。
と言っても、九割ほど無駄です。

素晴らしきKSS 1

俺は必死に駆ける。

嫌でも駆ける。

親父はハゲる。

いや、親父は既にハゲている。

現在進行形。

ハゲ、アイ、エヌ、ジーだ。

自滅ハゲ、万歳。

ああ。

世界はなんて非情なのだろう。

なんて残酷なんだ。

一体、何様なのさ。

ズボンが下がりそうでも走らねばならぬ、そんな変態としか言えない世界なんて消えてしまえ。

神よ、我に力を与えたまえ。

せめて、社会の恣的な部分は閉めさせておくれ。

その時、俺の目の前に風紀委員の一人が飛びだしてきた。

その男子生徒は俺に背を向けると、こっ叫んだ。

「天月伊織！喰らえ！」

すると男子生徒は空中で素晴らしい軌道を描きつつ、俺へとヒッ
ブドロップを囓ましてくる。

な……、なんだ、この、華麗な尻さばきはッ！

貴様は、尻白孔貴か。

……誰なんだ、尻白^{けつしろ}。
名前が奇抜過ぎる。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおー！」

俺は絶叫気味に声を出すと、尻白のヒップドロップを身を捻って
回避することに成功する。

尻を突き出し、後方へとく字で飛び行く尻白を横目で見送った。
が、しかし、安心するには早すぎたのだ。

まだ後ろには、偽生徒会執行部のメンバーがいるのだから。

日下は知るよしもなかった。まさか目の前に、尻白の華奢^{きゃしゃ}な尻打^{しりだ}
撃^{げき}が飛んでくることなど。

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああッー！」

案の定、日下の号叫が聞こえる。

さすがは、尻白。

尊敬に値するKSS（華麗な尻さばきの略）だ。

尻白は日下の胸を潰すように地面に倒れ込む。

無論、日下は尻白の尻の下敷きとなった。

近くを駆け抜けようとしていた園部先輩が急いで助けようと、日
下へと手を差し伸べる。

「そ、園部先輩……。私、爆乳になるまで死んでも死にきれません
！」

先輩達の背後、俺の視線の先から追手の風紀委員共が近づいてく
る。

尻白は日下の貧相な胸を尻で踏みつぶしつつこう言った。

「俺の尻で垂れ乳になりな」

なんて奴だ、尻白この野郎。

良い尻してくる癖に、正確が風美香並みに悪いではないか。
最低だな。

貴様は尻と乳を粗末に扱う、そんなクズケツ君だったのか。

失望した。

怒りを覚えた。

そして何より、日下の胸の感触はどんなだ、尻白よ。

「嫌！絶対に嫌！垂れ乳なんて死んだも同然！」

泣き叫ぶ日下に園部先輩はこう言った。

「いや、むしろ垂れ乳の方が良いとも言える」

彼はそういう類^{たぐい}の変態なのだ。

俺も日下を救出するために、尻白を蹴り飛ばすと、日下を引つ張り起こす。

そのまま日下の手を引き俺は走った。

啞然とする尻白にこうエールを送ってやる。

「次会う時はもっとビッグになってこい！尻白よ！」

「鈴木だよ！」

ツツコミを入れられた。

偽生徒会室になんとか逃込むことに成功した。

全員、無事に生還しているようだ。

「伊織のばかあッ！」

俺は突然背後から蹴りを入れられる。

蹴ってきたのは偽会計こと風美香。

「い、いきなりどうしたんだ？」

「どうして、瑠奈助けて、私は助けられないのよ！」

「え？はあ？…ってそういえば、お前、さっき何処に居たんだ？」

「アンタの右隣にずっといたわよ！突然、伊織が走る方向を変えたから、風紀委員の標的が私に変わったじゃないの！どうしてくれるのよ！この馬鹿！」

「分かった。分かった。次は助ける」

俺が適当にそう返すと、風美香は予想外にも、

「……ほんと？」

と、弱弱しく訊き返してきた。

その時、俺の心臓が飛び跳ねるような感覚に襲われる。

「え、あ、う、うん」

訳も分からず速くなる鼓動。

なんか…調子狂うな。

「絶対、助けなさいよ。助けなかったら、人として殺してやるから」

「殺されないように頑張るよ」

「ふ、フンッ！」

風美香は何故か急いでそっぽを向いた。

俺はそれを疑問に思いつつ、穂積へと視線を移す。

「どうかされました？」

穂積はその甘いマスクを和ませ、首を傾げつつそう言った。

俺はぶっきらぼうに、愛想悪く、

「…いや」

俺と風美香を交互に見比べ穂積はそっと微笑む。
なんかムカつく…。

その時、俺の視界の端に妙な男を捉えた。
見た目は中年。

歳に似合わず若者受けしそんな黒縁眼鏡。

偽生徒会室の隅にどんよりとしたオーラを発しながら立っている。俺は恐る恐る園部先輩に尋ねた。

「あのー…園部先輩」

「なんだい？」

「あの見るからに不幸なお方は誰でしょうか？」

「木の精」

「きこ んですか!？」

「あー、嘘嘘。本当は偽生徒会執行部の顧問、林先生だ」

「こんな下らない集まりにも顧問なんているのか！」

穂積に殴られた。

だが、甘い。

この程度では、我が永遠のライバルこと尻白には敵^{かな}うまい。

奴の尻さばきは天下一品、完全無欠だ。

ケツだけにな。

…まあ、こんな奇想天外な親父ギャグいわく、下ネタも出てきたところで俺は気付いた。

そういえば、今日は生徒会の仕事を絶対に手伝えって灘崎先輩に言われてたじゃん。

俺がそのことを皆に伝えようとした時、それを遮られた。

俺の言葉を見事なタイミングで遮ったのは林先生。

先生は何かの御呪い^{おまじな}かのようにこう呟いた。

「嫁よー……来い」

ここに独身アラフォー男、参上。

偽生徒会室を出た直後。

「待っていたぜ。天月伊織！」

「き、貴様は、尻白孔貴！」

「鈴木宏だよ！名前の覚え間違いも甚だしいよ！」

「ごめん。俺とお前って、同学年だけど同じクラスになったこと無いし」

俺は開き直りもいい加減にせねばならないレベルの言いわけをしつつ逃げる。

まさか、待ち伏せをされているとは思ってもみなかった。

さすが尻に生きる男。

やることが外道だ。

とにかく俺は三階の生徒会室を目指して四階の廊下を走り続けた。ケツに追われながら。

「ドリフトオオオッ！」

階段を全段飛び降り、一気に右折する。

勢い余ってこけそうになるところを右手を地に突き堪えきった。

まだ五十メートルも走っていないというのに、俺は空気を吸えない程に息切れをしている。

「ハア……はぁ……クソッ！」

運動不足だとか、運動神経がないとか、髪がないとか、別にそういった自身の身体の不備ではない。

激しいのだ。

尻白との追いかけっこが。

「待てッ！ゴルラアアッシュ！」

「板垣先輩が飼ってる唯の犬の癖にしつこい！」

俺は後方に向けて、割と誤解を招きかねない台詞を吐く。

それにしても尻白孔貴、さすがだ。
足が速い。

俺も結構足の速さに自信があったというのに、今にも追いつかれそうだ。

ふと、背後を振り返り、尻白を見る。

完璧な足の接地、ローリング。

離地距離、空中距離、着地距離、長いストライド。

ピークにまで達する運動量。

それを維持し推進力へと変える。

窮め付けに、綿棒さえ通さない程に強く閉まった、外肛門平滑筋きわ横紋筋だか平滑筋だかは知らないが、とりあえずその堅固な筋肉にフォーカスロック！

何をとっても実に素晴らしい。

素晴らし過ぎる。

俺の尻に食いつくように走るその姿勢は下品過ぎる。

そして、何より俺の脳内がケツ一色なのに驚愕した。

「あ、あぶねえ。危つく脳内が尻に侵食されるところだった」

恐るべし、尻白三兄弟長男、孔貴。

半端じゃない。

これぞ尻の神秘なのか。

生徒会室の扉まで残り二メートルとなった時、尻白は『あの必殺技』を繰り出してきた。

「天月伊織！今度こそ喰らえエエ！」

尻白は宙を舞う。

クルクルと何度か空中で回転すると俺へと狙いを定めてくる。

この技は確か、尻白家に伝わる伝説の奥義……！

空中を華麗に舞い踊る、尻白と目があった。

く、来るッッ

！

「アンダーヘッドヒップドロップ!!」

なな、なんと残念な技名。

俺は体勢を極限まで低くして、尻白のそれを回避する。
勝った。

その時の俺はそう思った。

しかし、人生そう上手くいかないものだ。

とはいえ、別に俺に被害があつたわけではない。

被害があつたのは、生徒会室からジャストタイミングで出てきた、
庶務の児玉拓真先輩。

あの無口がカッコいい、クールマッチョな巨人が被害にあつた。
尻白のアンダ ヘッドヒップドロップは、児玉先輩の股間に炸裂さくれつしたのだ。

「あ…あ…」

俺は喉から絞り出すような声しか出ない。

児玉先輩は軽く尻白を退けると、俺を上から見下ろし、

「遅い。皆、お前のことを心配しているぞ」

俺はそんなことよりも、先輩の股間の安否が心配で仕方ない。

「は、はい。すみません」

先輩の股間を凝視しつつ、そう応えた。

大丈夫だろうか。股間。

「入れ」

「こか…じゃなくて、はい」

児玉先輩は生徒会室へと先に入って行く。

俺は何故かその背中に敬礼をしてしまった。

「ようやく来たか、伊織」

生徒会室に入った途端、会長の灘崎先輩がその声をかけてきた。

「え？」

「どうかしたか？」

「いえ、突然、灘崎先輩に伊織なんて下の名前で呼ばれて驚いただけです」

先輩が何かを言う前に、俺はこう付け足す。

「まさか、俺に気があるのかと…」

「ない」

「一刀両断だ！」

俺は深く傷ついた。

明日への希望をなくした。

痛い。

しかし、こんな痛み、児玉先輩の股間の痛みに比べればなんてことは無い。

今、児玉先輩は、下腹部の痛みにはポーカーフェイスで必死に耐えているのだ。

悶絶ものの、あの痛みにだ。

本当は気絶寸前なのかもしれない。

何かのスイッチが入って、コサックダンスを披露し出す寸前なのかもしれない。

そうさ。

俺がこんな所で傷ついていてどうする。

偽生徒会執行部なんて罵倒の嵐ではないか。

「さっきからどうした？一人でブツブツと」

「い、いえ、なんでもありません」

灘崎先輩は一つ溜息をつく、続ける。

「私が君のことを下の名前で呼ぶように変えたのは、君と同じクラスに同じ名字の女子生徒がいるからだ。君に気があるなんてことは決してない」

ないそうだ。

「ああ、それもそうですよね、わらわら」

その通りだ、と会長席に踏ん反り返る灘崎先輩。

真つ黒な椅子に座ると、灘崎先輩の銀髪はかなり映える。

そんなことを思いつつ、俺は空いている席に腰をかけた。

どうやら、生徒会でも偽生徒会でも俺の定位置は変わらないようだ。

こちらでは格が高いのに、それはどうなのだろうか。

少しの不満を感じるが、生徒会唯一の二年坊主。

ここは仕方ないと割り切ろう。

ふと、視線を左隣に向けると、隣に座っていたの瓜破波人先輩と目が会った。

ほとんど表情が隠れてしまうほどの長い茶髪。

その隙間からギロリと覗く疲れたような目。

なんなんだ、そのなりは。

正直に言わせてもらうと、この先輩は馬鹿っぽい。

何やら馬鹿っぽい。

「伊織。君、今失礼なこと考えたでしょ？」

「い、いえ」

鋭い人だ。

「この人絶対に鼻の穴でリコーダー吹ける、とか思ったでしょ？」
そんなコミカルな発想は無かった。

俺が反応に困っていると、瓜破先輩は、

「いいんだ。いいんだ。二本までなら同時に吹けるからね」

「吹けるんだー！……てか、一本も吹かなくて良いです、えいじら絵面がシニールなので」

「えーじゃあ、どこで吹けって言つのさー？」

「口で吹け！」

「うえー、面白くない。……そうだ！肛門で吹けば

」

「モザイク物です！」

常軌を逸している。

水戸黄門もビックリ。

ちなみに、この伊織、なまじな尻では承知すまい。

見ただけで腹が立つ親父のそれ以下だったら尚更だ。

鈴木宏、いや、尻白孔貴に勝るか、同等なそれでなければなら
ない。

もしも、ここで半端なそれを俺に見せつけてみる。
もいでやる。

「ねえ、いお君」

いお君（？）そう言う声が聞こえる。

声のした真正面を向くと、そこには女王様オーラを纏う物凄い先
輩がいた。

堀川有澄先輩。

全体にカールを掛けたロングヘアーがとても似合っていて、何や
らギラギラと輝くゴージャスなカチューシャがキュート。

パチパチと瞬きをする度に風が起きそうなほどに長い睫毛。
制服の胸元が微妙に肌蹴っていてエロい。

おそらくリップクリームを塗っているのだろう。

先輩の唇はやけに艶がある。

「いお君って、まさか俺のことですか？」

「他に誰がいるというのかしら？」

「堀川先輩の後ろに立っている下半身が半透明な男性」

「うふふ。冗談がお下手くそね」

貶された。

凄まじい貶し方だ。

何か、この人には風美香と近い物を感じるのには気のせいだろうか？

「先輩、仕事はどうしたんですか？」

「それは、あなたにだけは言われたくないわー。…まあ、理由を言っと、まだ、森先生が来てないから」

「森先生……？ああ、生徒会の顧問でしたね」

「そうそう。あの先生が、それぞれの部活に関する書類を持ってくるらしいわ。…はあ…まったく、なんで私達が部費を使うことに對する承諾の判子を押したり、書類の整理なんてしないといけないのかしら…？生徒会室は駄弁るためにあるんじゃないの？」

間違つてもそんなフリーダムな人間のために造られた部屋ではなかったはず。

俺は、何故生徒会なんてものに堀川先輩が入ったのかが物凄く気になった。

まあ、もちろん訊くことはできないのだけど。

こんな自分の世界に浸っている先輩に負けた穂積を、ちよつとだけ哀れに思う。

「ねえ、ねえ、いお君。プリン食べる？」

「いえ。いくら授業中ではないといえ、さすがに生徒会の活動中はどうかと…」

堀川先輩は目を細めながら俺を見て、

「真面目ねー。別に、大丈夫よ。ちよつとくらい。……ほら、こうやってシェイクすれば携帯飲料みたいに飲めるし」

「いや、そこにドリンク効果は求めてませんから…」

俺は嘆息する。

変な人だ。

「じゃあ、固体のまま、こんにやく リーみたいに飲む？」

素晴らしきKSS 1（後書き）

さて、とんでもなく下らない内容でしたが、少しでも楽しんでいただけたのなら幸いです。

此処まで読んで下さった方、ありがとうございます！

お気に入り登録されている方、いつもお世話になってます！

素晴らしいSSS 2 (前書き)

SSS関係ない…。

生徒会の仕事終了し、俺達、生徒会役員は皆でトランプをしていた。

やっているのはババ抜き。

あのシンプルなルールが奥深い、超フェイマスな遊びだ。

相手の目を見て、どれがババで、どれがそうでないのか見極める。時に、巧みな言葉で相手を翻弄し、騙す。

これぞまさに心理戦。

極度な緊張感の漂うこの部屋に、俺の親父が長時間居座っていると仮定しよう。

おそらくストレスで、次から次へと毛髪が死滅していくことだろう。

気付いた時には、坊主めくりに絵柄として参戦だ。

「さて、どうなる…?」

皆が皆、瓜破先輩と兎玉先輩のラスト一騎討ちに注目している。ちなみに俺は三番抜け。

最初にこの心理戦を攻略し、脱したのは、会長の灘崎先輩。

さすがは完璧人間。

二番目に上がったのは、堀川先輩。

なんだか悔しかったが、まあ、勝負強い人なのだろう。

「兎玉…君の真顔はこんな時に役立つんだね…」

瓜破先輩の言葉を無視するかのように、兎玉先輩は何も喋らない。物凄い完全無視だ。

正面から語りかけてくる相手に動じないなんて…。

全力で無視しているのだろうか？

ちなみに、おそらく、この状況を見るに、児玉先輩がババを持っている。

しかし、お得意のポーカーフェイスに、二枚中どちらがババかが全く見当がつかない。

「よ、よーし……こつちだあああ！」

瓜破先輩が、児玉先輩の手札からカードを勢いよく抜く。

それは、俺のターン、ドロー、とか言ってしまういそうなほど、カードゲーム違いな迫力であった。

俺は何気にシールドを展開している。

児玉先輩と瓜破先輩が同時に自分の手札を見る。

「やったあああゝ！」

瓜破先輩が、正直黙って欲しいくらい大声でそう叫ぶ。

どうやら、今回のビリは児玉先輩のようだ。

「ちよつと、うるさいんだが」

灘崎先輩が瓜破先輩にそう言ったが、言われた本人はそれに口答えをする。

「嫌だ！この口が裂けようと、僕は絶対に黙らない！」

黙れ！

断固として黙れよ！

心の中でそうツツコミつつ、俺はあははと笑顔でその場を流す。

さすがに揚げ足をとるようなツツコミばかり先輩にするのは気が引ける。

「それじゃあ、たく君。罰ゲームカードを引きなさい」

堀川先輩が罰ゲームカードを扇のように広げ、さも当たり前に見玉先輩に差し出した。

たく君。

また可愛いニックネームを付けられたんもんだな、マッチョ先輩。

「ほら早く！」

児玉先輩は一瞬表情を曇らせたが、観念したのか一枚カードを引いた。

「一発ボケを披露……」

一言そう呟いた児玉先輩の声はいつものように平坦であったが、その中に負の感情が込められているのを何となく感じとった。

なんだか可哀相だ。

まあ、同情はしないけど。

だって、見たいし。

児玉先輩の一発ボケ。

ていうか、あの人芸とかするの？

つか、どうして一発芸ならぬ一発ボケ…？

「さあ、たく君。今こそあなたの一発ボケを披露するのよ」

「あはは！児玉の一発ボケ！すつごく見たい！」

「不本意ながら、私も興味がある。すまない。児玉」

俺以外の三年生の先輩方は、児玉先輩の一発ボケとやらの興味津津の御様子。

かくいう俺も、バリバリに興味があったので、この場に居る人たちは全員児玉先輩に注目する。

児玉先輩は何かを決心したのか、カードを机に置き、立ちあがった。

そして右手を天井に掲げ、そのまま振り下ろす。

ちょうど右の手のひらが自身の股間に当たったの同時に、彼はこう言った。

「ない」

児玉先輩は着席する。

「……それはどんなボケですかッ!？」

俺は児玉先輩と入れ替わるように立ち上がる。

「こんな公衆の面前で普通下ネタ出しますか!？あなたは園部先輩ですか!？」

「過去の園部のネタから引用させてもらった」

「あの人そんなギャグしたのかよ！」

園部海彦。

全く、未恐ろしい変態だ。

その時、児玉先輩が珍しく驚愕の表情を見せた。

視線は自らの股間。

「本当に……ない」

どうやら先輩の男の勲章は、尻白のアンダ ヘッドヒップドロップとやらに持って行かれたようだった。

会長の灘崎先輩は顔を赤くしつつこう言った。

メタモルフォーゼ
「メ、変身……」

いや、そこでドイツ語を使われても。

「そういえば、伊織」

「はい？」

生徒会室から出て鍵を閉めている時、灘崎先輩に話しかけられた。他の三人はもう既に帰ってしまつて、ここには俺と灘崎先輩しかない。

あの三人は心の底から凄い奴だと思う。

会長と副会長を置いて帰るなんて……。

と、言いつつも、生徒会の戸締りは当番制なので仕方がない。

「偽生徒会の動きはどうだ？」

「まあ、なんかアホなことしてます」

「とにかく、気を抜かず監視し続けること。まだ、奴らは私達生

徒会と全面的に戦う行動に出ていない。しかし、何と言っても、指揮官が海彦…じゃなくて、園部だから要注意だ」

「あのー、灘崎先輩。どうして園部先輩のことを下の名前で呼ぶんですか？園部先輩も灘崎先輩のことを下の名前で呼んでましたし…」

「にゃんツ!？」

灘崎先輩は唐突に猫になった。

萌え。

「どうしてですか？教えて下さい」

俺は詰問する。

「そ…それは……」

顔を赤くした灘崎先輩がチラチラとこちらを横目で見てきた。

こ、これは、一体なんなんだ!？」

いわゆる乙女モードってやつなのか？

いやいや、困るって。

乙女モード困るって。

「俺を萌え殺すつもりかにゃ。この、変人たん」

結局のところ、変人はまさにこの俺だった。

完全乙女モードの灘崎先輩は両の頬を可愛らしく両手で押さえ、自分の世界に入っている。

俺の声は聞こえていないようだが、質問には答える。

「…私と海彦は、幼馴染なんだ。家も隣で」

「えっ、そうなんですか。てっきりお二人は付き合っているのかと思ってました」

「っ、付き合う？彼氏彼女？む、無理無理むり！そんなの、そんなのって…」

灘崎先輩は頭から煙をボンツと出して、へろろと地面に座り込む。

「大丈夫ですか？」

「……………」
「灘崎先輩？」

「……………」
「おい」

「……………」
駄目だ。

三点リーダー四つ分という反応。
どうやら気絶してしまったようだ。

この時俺は気付いた。

灘崎先輩、園部先輩のことを死ぬほど好きじゃん。

「す、すまない。伊織。私としたことが気絶してしまうとは……。
これは一生の恥だ」

「あはは。そんなに落ち込まなくてもいいじゃないですか」
うつー、と唸る灘崎先輩。

あの後、意識を失った灘崎先輩を背負って、此処まで運んできた。
保健室の先生には事情を説明するのにも、愛する彼のことを考え
ていたら恥ずかしくなって気絶しました、なんて言えるはずもなく、
突然倒れました、と当たり障りのない真実だけを伝えておいた。

おかげで灘崎先輩はしばらくの間此処で安静にしていなければなら
なくなっただが。

それも仕方がないことだ。

早く帰りたい気持ちは分かるけれど、勝手に倒れた方が悪い。
俺にも多少手を煩わせている訳だし。

ちなみに、保健室に運んでいる途中に軽く見た灘崎先輩の寝顔は、
いつもの凛々しく美しい女性とは掛離れた可憐な少女のようだった。
色々迷惑だったが、いつもと違う彼女の可愛らしい一面を見れた

ことだけは良ししよう。

「それじゃあ、俺はもう帰りますね」

「あ、そうだ。偽生徒会の定期報告忘れないように」

「はい。忘れてませんよ」

「生徒会のメンバー全員、それにはかなり興味があるのだから、皆お前の定期報告を今か今かと待っているんだぞ」

「先輩達は呑気ですねー……」

「そんなにスパイは疲れるのか？」

「ええ、まあ……」

「とりあえず、君には頑張ってもらわなければならないんだ。我が校の誇りのためにもな。期待してるぞ」

「困りますよ」

最後の一言を冗談っぽく言うと、ベッドに寝ている灘崎先輩に背を向け、俺は保健室の扉まで歩きはじめる。

引戸式の扉を開け放つと、俺はふと振り返り、灘崎先輩に向かってこう言った。

「突然ですけど、良いんじゃないですか？好きな人のことを思っ
て気絶するのって。普通に可愛いですし」

灘崎先輩は再び気絶した。

やってもうた、と今になって俺は後悔する。

昇降口から出た。

前方、十数メートル先に校舎の壁を利用して一人でテニスをしている男子生徒がいる。

見た感じ、同学年だろう。

見るからに体育会系のゴリマッチョ男子だ。

その男子生徒の背後には、野球道具一式、サッカーボールにバスケットボール等々、様々のスポーツで使われる用具が置かれていた。なんなんだ。

この訳の分からない運動馬鹿は。

「ねえ、その君」

俺はその運動馬鹿野郎の背中に声をかけていた。

そいつはラケットを持っていない左手でパシッ、と壁から跳ね返ってくるテニスボールを掴み、こちらを振り返る。

「ん？どうした？って副会長じゃん」

俺って有名。

「やあ」

軽く片手を上げて俺は挨拶をする。

出来る限り爽やかに。

しかし、キザに挨拶してみて気付いたことがある。

俺がやると非常にキモい

。

相手は俺のやったそれを見るなり、

「おお。さすがは変態の噂が絶えない副会長。見るからに変態だぜ」

「それ誰から聞いたアツ!？」

「お前と同じ名字の女子。ええっと、確か、名前は……天月……なんだっけなー？」

風美香。

あの野郎…。

「間違っても俺は変態じゃない」

「信じられねえよ」

「いや、信じろよ」

コイツとこんなことを話していても拉致があかなそうだったので、俺は強制的に話題を変える。

「それにしても何で、こんなにいろんなスポーツの道具があるんだ？」

「そりや、スポーツするからに決まってるだろうが」

「えっ？これ、全部？」

「ああ。全部」

「まさかそんなゴツイ体してて帰宅部だったりする？明らかに部活じゃねえよな、これ」

「まあな。だって好きなスポーツあり過ぎて選べないし」
「凄い奴だ。」

「感心してしまった。」

そして俺自身がコイツに関心があるということに気が付いた。

「お前面白いな。運動一筋で裏表なさそうな奴なんて、なんか仲良くなれそう」

「もしかして、副会長、友達いないのか？」

「生憎、ほんの数日前、大親友がオネエ系だったことが発覚してしまつてね。猛烈に絶交したくなつたんだ」

「なんだそりや」

呆れた顔をするゴリマツチヨ。

そんな彼に俺は右手を差し出しこう言った。

「俺は二年九組の天月伊織」

するとゴリマツチヨは、にへー、と笑うと俺の右手を強く握り、

「よろしく副会長。俺は本田定則。ほんたださだのり二年一組だ」

夕焼け空の下、俺と本田は固い握手を交わした。

この時の俺は気付けなかった。

バットやラケットの下に埋もれるようにして、確かにそこに存在していた、夏目漱石の『吾輩は猫である』を。

素晴らしきKSS 2（後書き）

軽くニヤリとしていただければ、それだけでも嬉しい限りです。
此処まで読んで下さった方、ありがとうございます！

お気に入り登録されている方、いつもお世話になってます！

そして、図書委員会との対決までの道のりが長くてすみません…。

ウルトラボーイ伊織（前書き）

さて、ちよいと長いですが、お付き合いいただければ嬉しいです。
今回からちよっとラブ入ってきます。

ウルトラボーイ伊織

偽生徒会室、朝の光景。

「下らないことをひたすら言わせあうゲームを皆でしょう」

「嫌です」

「まあ、まあ、伊織、そんなことを言わずに楽しくやっちゃおう。ほら、例えば、『シーチキン』の『シー』と『キ』を抜いた言葉を言ってみなよ」

「チン」

「はい、ゲーム終了〜」

……………。

本田と知り合った翌日。

今現在、俺は二年九組の教室で数学の授業を受けている。

席は新学期開始当初と同じ、廊下側の列の先頭。

既に席替えは終わっていたので、周りの面子は、最初と大きく様変わりしていた。
メンツ

俺はノートの隅に、親父の髪が全て抜け落ち、坊主めくりに絵柄として参戦するまでにかかる日数を求める計算式を書きつつ、奴め…案外しぶといな、などと極悪で空前絶後の台詞を心の中で吐くのだった。

先生の素晴らしい講義をBGMに、ふと左隣に視線を移すと風美香が凜とした顔で黒板を見ている。

風美香は俺の視線に気づいたのかこちらを向く。

そして、シャーペンを握るのと反対の左手を上げる。

更に親指と人差し指を立て、俺へと向けた。

「ばーん」

そう小声で言うのと同時に、風美香は左手で銃を撃つ振りをする。俺が、ぽかん、としていると、何やら紙切れを投げてきた。俺はそれをキャッチすると、書かれている文字を読む。

『はい、死んだ〜』

己は何処のガキンチョだ。

普通にムカついたので、相手にもやり返してやろうという発想が浮かんだ。

俺は、『はい、死んだ〜』の下にこう書いて、風美香へと投げつける。

『反射ッ!』

風美香は一瞬、女の子がしてはいけない顔をし、何やら紙に殴るように書いた後、俺へと再度投げつけてきた。

『爆死（ハ―ハ）／』

理不尽だろッ!

どうやら、先程の『ばーん』はガード不可って奴らしい。情けない効果音だというのに、着弾の衝撃が未恐ろしいぞ。どんなに防御に徹しても無駄なのか。

俺は仕方なく、爆死という不穏な未来を強引に捻じ曲げることを試みる。

『爆死（ハ―ハ）／と見せかけて、背後に飛翔して回避（――）！！』

風美香にそれを投げつけると、二秒で返ってきた。

『轢殺（れきやつ）（ハ―ハ）』

ひき殺されたぜ。

もはや殺され方が意味不明だった。

よく見るとその右横に、『電車に（笑）』と書かれている。
いや、そんな愉快に修飾しないでほしい。

しかも、俺って駅のホームで飛翔したのッ！？

どんなダイバーだ。

ダイブしていないけど。

想像してみようか。

駅のホームで唐突に射出された弾丸をベクトル変換で反射したかと思えば、それが予想外にも起爆し、全力で『シュワッチ！』と高度9フィート程度まで飛翔。回避した結果、何を思ったのか線路に見事着地し、直後、駅に到着した電車に『ジュワ！』と轢殺されるウルトラボーイを。

それは相当の馬鹿野郎か、奇跡のクルクルパーだろう。
死に様が無残過ぎて何も言えない。

俺は『実は不死身設定』という名の中二病的現実逃避を思いついた。

つまるところ、起死回生の一手を打つというのが、脳裏に過ったのだけどそれは止めておこう。

さすがにこれ以上やっても、最低で鬼の風美香には敵うまい。

ふと左斜め後ろに目をやる。

すると風美香の真後ろで中西がキモ過ぎるウィンクを囁ましてきた。

誰か、アイツを轢殺して下さい。

放課後、俺は穂積を連れて美術室へと来ていた。

美術室のど真ん中で、机の頭同士をくっ付け、その周りを三十人程度の美術部員が円形に囲むという、傍から見れば何の儀式だと思ってしまうような状況を形成している。

俺はその円の中心である二つの机の内、片方の机を占領する。

俺の斜め左後ろには穂積が立っている。

そして、対向には美術部の長が座っていた。

どうしてこんなことになっているのか。

その話は時間を少し遡って昼休みにまで戻る。

昼休み。

俺達、偽生徒会執行部は全員、昼食を持参して偽生徒会室に来て
いる。

「美術部を配下に置く」

部屋の隅々にまで届き渡る声で、園部先輩はそう言い放った。

「またなんつーことを考えやがりましたね」

俺はとりあえずそう返しておいた。

風美香が園部先輩に

「どうして美術部を？」

と、訊くと日下が反応する。

「それは私の方から説明させていただきマッスル」

俺はその筋肉的な語尾に軽く苛立ちを覚えた。

もしもその筋肉が、がいこうもんかつやくきん外肛門括約筋とかだったら、俺は無邪気に喜

んでいただろう。

しかし、どうも目下の言う筋肉は、ボディビルダーが鍛えている凛々しい上半身の筋肉的な意味合いの物だったので、どうにもこうにも全くもって喜べないというのが現状だった。

敢えて大きく舌を打つ。

すると穂積は、フフ、と爽やかに微笑んだ。

穂積は無言であるが、その顔は「がっかりしてめそめそして、どうしたんだい？」と言わんばかりの勇ましい気が100%溢れ出る面持ちだった。

「美術部を配下に置く理由。それは、『果たし状』を作る為です」

「果たし状？」

艶のある黒髪を揺らし、風美香は尋ねる。

「はい。今度、図書委員会に送りつける果たし状です」

「そんなもの、私たちで作ればいいじゃない」

俺も風美香と同感だ。

「風美香先輩。ここでカッコの悪い果たし状を送れば、馬鹿にされること間違いなしですよ。格好の良い果たし状を書ける人、このメンバーにいるんですか？」

「伊織がいるわよ」

そりゃ無茶ぶりだな！

園部先輩が話に割り込んでくる。

「まあ、とりあえず、美術部を配下に置くというよりは、手を組むといったところだね。僕達の目的は学校の征服。味方が多くいるに越したことは無いよ。」

それで、今日、皆で昼食を取りながら話しあってもらうのは、誰が美術部と交渉するかということさ」

「交渉人を決めればいいのですね。それだったら、米倉 子が適任かと」

と、ボケるのは穂積。

誰もツツコミを入れやしない。

とはいえ、別に部屋の空気が凍りついたわけではない。

人のボケを無視するのは、このメンバーでは日常茶飯事なのだ。

「じゃあ、結局誰を交渉人にするんだよ？っていうか、何人行かせるつもりですか？園部先輩」

俺は喋ると同時に、口から誤って梅干しの種を射出する。

「二人かな」

園部先輩はにっこりと笑い、そう答えた。

ということが昼休みにあつて、交渉人の二人は話し合いでは決着がつかず、結局ジャンケンで決まったのだ。

しかも、掛け声が『ロツク、ペーパー、シザーズ、ゴウ！』というアメリカ式だった。

でも、本当はジャンケンの領域をぶっ飛んだ、『RPS101』という、グー、チョキ、パーの三種類ならぬ、ダイナマイトやらなんやらが参戦する、手技が百一種類のジャンケンをしたかったというのが俺の本音である。

全員、英語は得意なのか、発音が本場のネイティブアメリカン並みに上手かった。

俺も負けじと「Rock! Paper!」と必死に叫んでみたが、不思議と英国訛りである俺は、日本人にして華麗なるコックニー発音でジャンケンに挑むのだった。

正直、訳が分からなかった。

米国語で喋らなかつたのが悪いのか、俺は見事一回戦で敗北し、その後二回戦で負けた穂積と共に此処に来ているのだ。

ちなみに俺は間違つてRPS101で使われている、小指と人差し指を立てる大技『Devil』を発動させてしまい、失格となった。

そして更に補足すると、穂積は二回戦目で何を血迷ったのか、両手で自らの乳首を覆い『H i n n y u!』と全力且つネイティブな発音で宣言し、結果、失格するという奇怪な行動をとってみせた。正直、意味が分からなかった。

「それで、あなた達の要望は？」

そう言ったのは俺と穂積と同学年の女子生徒、美術部の部長さんだ。

俺は口を開く。

「単刀直入に言います。僕達、偽生徒会執行部と手を組みませんか？」

美術部長は、副会長さん今は偽なんですネ、とクスクス笑った。そんな少し可愛らしい仕草を見せる彼女に意識を奪われそうになるのを振り払い、俺は続ける。

「手を組むということは、『本物』ではなく『偽』の側につくということです。もしも、我々と同盟を結んで下さるのなら、『美術部にしかできない仕事』を」

「良いですよ。その取引、承諾しましょう」

「え？」

俺の言葉を最後まで聞かずに、呆気なく承諾してしまった彼女に俺は驚く。

「いや、その、まだ全部言ってますし…それに報酬のことも…」

「私たちが協力できることは、力を出し惜しみなくお貸しします。それに報酬はいりません」

「でも…」

「これは私個人の思いですが、あなた達のように『無謀に挑戦する志高き者達』は嫌いじゃないんです」

微笑みながら話す部長に、穂積は真剣な顔で、

「その判断、後悔はしませんか？」

すると部長はにっこり笑って、
「しませんよ」

俺と穂積は軽く一度顔を合わせてから、美術部長に微笑み返すのだった。

「それでは、これで美術部と偽生徒会執行部は同盟を結びました。詳しくは書類をご覧になって下さい。穂積」

穂積は俺に名前を呼ばれると、ジャケットの胸ポケットから少し大きめの封筒を取り出し、部長に手渡した。

偽生徒会室。

部屋を見渡すと、偽会長席に園部先輩と、部屋の隅に化け物みたいに突っ立っている林先生の二人がいた。

風美香と日下はこの場にいない。

「なんか簡単に交渉成立しました」

「そうかい。それは良かった」

俺の報告に園部先輩は笑む。

穂積が更に報告を付け足す。

「果たし状は明後日には出来るそうです」

「ということは、図書委員会との決戦は来週末になりそうだね」

今日は水曜日。

つまり、明後日の金曜日に果たし状を受け取って、その日に図書委員会に決闘：いや、決戦を申し込みに行くのだろう。

おそらく戦いに向けて、一週間程度の準備期間を与えて、金曜日に戦う。

そんな流れのはずだ。

……ん？

そういえば、俺達はどやって図書委員会と戦うのだろう？

「園部先輩」

「なんだい？伊織」

「図書委員会と何をして戦うんですか？」

「まあ、それは金曜日までの秘密。ちなみに、伊織、穂積、それに風美香さんの二年生三人組には頑張ってもらう予定だよ」

伊織君と風美香さんと俺ですか、と呟く穂積。

「少しだけ内容を教えておくと、図書委員会との対決らしく『本の戦い』だよ」

本の戦い…？

結局、本の戦いの意味が分からないまま、今日は偽生徒会の活動が終了となった。

帰るには少々時間が早い気がしたので、散歩がてらにグラウンドに向かってみたところ、女子の陸上部の練習風景が目についた。

少し遠くからその光景を眺めていたら、あることに気が付いたのだ。

風美香と日下が体操服姿で陸上の練習をしている。

偽生徒会室にいないと思えば、こんな所にいたのか。

「え？アイツら陸上部だったっけ？」

俺が独り言を呟くと、近くを通りかかった陸上部のマネージャーらしき女子生徒が、

「いえ。風美香ちゃんと瑠奈ちゃんは、今、いろんな部活から勧誘されているんですよ。うちの陸上部も勧誘している部活の一つで、

二人は体験入部みたいなことをしているんです」

「へえー。アイツら、運動できるんだな。特に、あの小柄な日下がバリバリ出来るとは…。意外意外」

どうやら今はリレーをしているみたいだ。

同時に走っている人を見ると三人いる。

つまり三つチームがあるのか。

バトンを握り締め、先頭を走っているのは日下。

綺麗な金色の髪を風に靡かせ、その小さな身体をフルに活用し、トップを独走している。

周りのサッカー部やら野球部、それに陸上部の男子共から「あの子つちやい娘、かわいいー」という声が聞こえた。

「誰がちつちやいだアツ！」

日下は相当の地獄耳なのか、目測でおよそ二十五メートル離れた男子生徒の小言を、全力疾走であるにも関わらず完璧に聞きとれるようだ。

こちら側に半円を描くコーナーを曲がり切り、日下は一直線のコースを駆ける。

俺は日下の走り行く背を見送った。

その先に待っているのは風美香。

運動しているからか、いつも自由に下ろされている長い黒髪をポニーテールで結んでいる。

風美香は日下がある程度近づいてくると、疾走を開始した。

最初からかなりの速さだったので、日下が追いつけるか不安だったが、日下はちゃんとテイクオーバーゾーン内でバトンを渡し、風美香を失速させることなく流れるように前へと送り出す。

「ほう」

俺は思わず感心してしまった。

ふと、風美香の先を見ると誰もいない。

つまりアンカー。

トラック一周の二百メートルを走る大役を担っているのか。

「あの娘って、天月風美香さん？」

俺の背後から声が聞こえた。

「ああ…って、本田！？」

俺に声をかけてきたのは本田だ。

「うつす、副会長。そんなことよりも、ちゃんと風美香さんの走り見とかないと、もう終わっちゃうぜ」

「えっ？」

俺が慌ててトラックへと目をやると、風美香はもう既に百メートルを走り切ろうとしていた。

プロのプリンターかと思うような素晴らしいフォーム。

走った軌跡を描くように風に流れる黒髪が美しい。

さすがは美人。

どんな所を見ても、ビジュアルは最高だ。

しかし最高なのは見た目だけではない。

「速い…」

誰が見てもあれは速い。

周りの男子共から、「あの美人な娘、ムチャクチャ速いなー」という声上がる。

風美香が最後のコーナーを曲がって来る。

こちらに走ってくる風美香の背に、俺はとんでもないものを見た。

「うつふおおー！」と周りの男子共が盛り上がる。

風美香の後方、十数メートル先から物凄いスピードで追いかけてくる者がいたのだ。

それは、予想外の火坂さん。

「火坂さん、陸上部だったのか！？しかも速ッ！！特に乳房の下運動がっ！」

風美香もかなり速いというのに、火坂さんはそれに食らいつくどころか、どんどん距離を縮めてくる。

そのバインバインな胸を激しく上下させながら。

火坂さあああんッ！

乳があ！

その豊満なお乳様があああああああああッ！！

「落ちつけ、エロ副会長」

「お、おう」

本田に肩を掴まれ俺は正気に戻る。

どうやら俺はいろいろと衝撃的で放心状態だったようだ。
危うく、『谷間の呪い』にやられてしまう所だった。

そして、俺はこの時改めて思うのだった。

。 おっぱいってデングジャラス

風美香がトラックの一直線の部分に差し掛かる。

その時、近くにいた俺と目があつた。

それは一瞬の出来事だったのだろう。

しかし俺にはそれが十数秒のことのように感じた。

風美香は俺の方をチラッと見ると、軽く微笑んだ。

ように見えたのは俺の錯覚か？

直後、風美香の後を追って、俺の視線の先を火坂さんが爆走して行く。

やはり胸が暴れていた

っていい加

減、ぱいぱいから離れろ、俺。

ゴール手前五メートル程度のところで、火坂さんと風美香が並んだ。

「す、すげえ……」

もちろんそれは火坂さんの走りのことであり、別におっぱ……つてさすがこれにはしつこいか。

「うおおおおおおおおおおおおお……！」という歓声と共に、二人はほぼ同時にゴールテープを切った。

二人を追うようにもう一人もゴールする。

「ど、どっちだ？」

観戦していた人々は、皆が皆、息を吞んで、結果発表を待つ。

沈黙が流れた。

その間にゴールテープを持っていた二人のマネージャーが話し合いを開始する。

おそらく二年生だろう。

顔に見覚えがある

少し時間が立ち、話し合いが終わったのか、二人は頷き合う。

そして片方の女子が周囲に向けてこう言い放った。

「僅差で風美香ちゃんの勝ちです！」

どうやら風美香がギリギリ逃げ切ったようだ。

辺りから「ぬおおおおおおお！！」と大歓声が巻き起こる。

本田が俺の肩をポン、と叩きつつ言う。

「すげえな、風美香さん」

「あ、ああ」

俺はトラックの内側で、地を向き息を咳く風美香の元へと向かい声をかけた。

「風美香、大丈夫か？」

「はあ……はあ……だ、大丈夫よ、別に、い、伊織なんか心配されなくても……」

そんなことを言いつつも、風美香は凄く辛そうに見える。

汗も掻き、顔も心なしが俺が声を掛けてから赤くなってきたし、誰から見ても大丈夫には見えないだろう。

俺は自分のエナメルバッグからタオルを取り出し、風美香の頭に掛けてやった。

すると風美香はバツ！と高速でタオルを投げ返し、

「いらないわよ！」

と怒鳴ってくる。

「いいから、汗拭け、汗」

風美香はタオルを受け取ろうとしないので、仕方なく俺が風美香の額の汗を拭う。

「いらないって言ってるんでしょうがっ！」

「ぐはッ！」

俺の腹に激痛が走った。

最初は何が起きたのか分からなかったが、後から風美香に腹を殴られたのだと分かる。

「痛ッ……」

身体をくの字に曲げて風美香を睨みつけると、風美香はフンツ、とそっぽを向いてしまった。

「だったら、伊織先輩。私にそのタオル下さーい！」

という声と共に、右手に持っていたタオルが奪われる。

奪った張本人は日下。

日下は満面の笑みでクルクルとその場で回り、俺へとピースを決めてきた。

「まあ、いいけど」

「やったー！」

ボフツ、と日下はタオルへと顔を埋め、上目遣いでこちらを見てくる。

「ふえんぱいのタオル、いー匂いがしまふ」

言葉がタオルの所為で不明瞭であったが、どうもお褒めの言葉の

ようだったので、

「そりゃ良かった」

と応えておいた。

タオルを顔から肩へと掛け直し、二へと笑う日下。

「ちよつとお茶飲んできますっ」

彼女は敬礼すると、テテテテ、と何処かへ走って行った。

俺はその背を見送り、再び風美香へと視線を戻した。

「それにしても、風美香さん速いねー。負けちゃったよ」

近くにいた火坂さんが風美香に話しかける。

「いえいえ。三十メートルは差があつたのに、完全に追いつかれました。さすがは、短距離走のエース」

今、俺はとんでもないことを聞いてしまったのではなからうか。

風美香が人を褒めた…？

信じられない。

有り得なツシング。

もしかしたら、世界が崩壊しマッスル？

正直、訳が分からなかった。

その時、俺は背後から声をかけられる。

「おーい、副会長。お前もリレーやる？」

振り向くと、本田が少し遠くでバトンを振っていた。

「いや、俺はちよつと」

「なーんだよ。今、人数が合わないで困ってるんだから、副会長もやれよー」

「そもそも、帰宅部のお前が走らなければいいだろうが」

「俺は走りてーんだよ！」

どれだけ体育好きな奴なんだ、本田は。

……仕方ないか。

俺は嘆息すると、なるべくフレンドリーにこう返した。

「分かったよ。やればいいんだろ、やれば」

エナメルバッグをその場に置き、制服のジャケットを脱いでワイシャツの袖をまくり、俺は本田の元へと向かう。

するとそこには、男子陸上部の部長がいた。

三年生の先輩だ。

「いやー助かるよ、副会長君。人数は多い方が、リレーは盛り上がるからね」

「ちよつとだけお邪魔します」

俺は軽く会釈した。

「うおおおおおおおおおおおおお！！」と先程の女子にも負けず劣らずの大歓声が上がる。

風美香は瞬きをせずに見ていた。

伊織がトップでゴールテープを切る姿を。

思わず風美香の喉の奥から声にならない声が出た。

トップでゴールしたのは自分も同じだったのに、風美香は驚きを隠せなかった。

何故なら、伊織は風美香と違い、ビリから一位へと一気に駆け上がって来たからだ。

絶望的だったあの状況から、奇跡の大逆転。

近くにいた女子が、「かつこいいい…」と感嘆の声を上げていた。

チラっ、と風美香が周囲の女子を見渡すと、伊織のことを見詰めている人が数人いる。

女子陸上部の娘達もその中にいた。

彼女らの目が完全に伊織に惚れた、うつとりとした目をしているのを風美香は見逃さない。

「なによ……」

風美香は苛立ちを覚える。

それは女子たちに対してなのか、それとも伊織に対してなのか。今の彼女には知るよしもなかった。

帰り道。

俺は風美香と一緒に歩いていてた。

日下は明日タオルを返すと一言告げると、すぐに何処かに行ってしまう、特に誰とも帰る予定のなかった俺と風美香は二人きりで帰ることになってしまったのだ。

まあ、二人別々に帰ればいい話なのだが、珍しく風美香の方からお誘いがあつたので、この状況に至る。

横目で風美香を見ると、彼女は妙にそわそわとしていた。

「なあ、風美香。俺思ってたんだけど……」

「思ってたまま、死ね！」

「言わせてえ……」

すると、突然、風美香は何も言わず、俺を見てきた。

ジッと見詰められて、俺はドキッ、としてしまい、自分が何を言いたかったのか分からなくなり、とりあえずその場を誤魔化す為に「お前のポニーテール姿、かわいいな」

と、言った本人でも、大ドン引き間違いなしの台詞を吐きだすのだった。

やつちまつたぜ、と今更後悔する。

「ば、ば、ば、ば、馬鹿あああああああ！な、何言ってるのよ……」

本気でビンタされた。

メチャクチャ痛かったが、俺は両手を合わせ、頭を下げ、完全に謝る体勢に入る。

「ごめん！ごめん！そんなつもりじゃなかったんだ！責任取るんで許して下さい！」

風美香は俺の首に掛けられていたタオルを奪い取った。

そのタオルは目下に渡したのとは別の、もう一つのタオルだ。一体何をする気なのだろう？

「お、おい。それ、俺が使ったやつだけだ」

「う、うるさい変態！エロ！エロ眼鏡」

「エロ眼鏡は園部先輩だ！」

風美香は理不尽にも、再び平手打ちを噛ましてきた。

俺はまたそれを喰らい、軽くよろめく。

「轢殺される！」

と、えらいことを言う風美香。

そして何故か彼女は、俺から奪ったタオルに自分の顔面を埋めた。うおお…、と変態みたいな声を出す俺。

目下みたいにタオルを顔につけた風美香は言う。

「くしゃい」

「当然だ」

夕日が俺達を照らす。

住宅の影がアスファルトに掛かっている。

爽やかに風が吹き抜ける中、俺は臭いと言いつつ顔をタオルから離そうとしない風美香を見詰めた。

彼女の頬は赤く染まり、何故か両目をうるうる目と涙目にしている。

そんな風美香を本気で『可愛い』と思ってしまっ自分此処にいた。

ウルトラボーイ伊織（後書き）

最低系ラブ（？）コメディと称して今までやってきましたが、ここにきてようやくラブらしきものが入ってきました。

次回は、安道がずっと温めていた、衝撃（？）のネタ達が解禁で
きるかな、と思っています。

ここまで読んで下さった方、ありがとうございます！

お気に入り登録されている方、いつもお世話になっています！

偽生徒会執行部 早朝の光景（前書き）

すみません！>（――）<

安道がずっと温めていたネタの解禁は、この回ではできませんでした（汗）。

代わりに少しだけ書くはずだった『早朝の光景』を詳しく書かせていただきましたので、そちらの方を楽しんでいただければ光栄です。

では、どうぞ。

偽生徒会執行部 早朝の光景

辺り一面、見渡す限りの草原。
頭上には世界を優しく包み込む青空。

そこに浮かぶのは綿菓子にも似た、白く柔らかな雲。

一筋の涼風が草原を駆け抜けて、どこまでも爽快に突き進んで行く。

肌に触れる涼気が心地良い。

目を瞑り、風の音に耳を澄ます。

サー…サー…、と芝生が晴天を喜ぶかのように歌っている。
宙を散歩する小鳥達は、踊るように飛び回っては、楽しそうに囀る。

ザワザワと木々は揺れ、歓声を上げる。

俺は鼻から新鮮な空気を思い切り吸い込み、閉じていた目をゆっくりと開く。

息を吐くのと同時に感じるのは自然の優雅さ。そして壮大さ。
ああ、なんて自然は素晴らしいのだろう。なんて雄大なんだ。

そして、唐突に俺は疑問を持った。

此処は一体何処なのだろう？

この、安寧秩序あんねいちつじょが保たれた世界は一体…？

しかし、いくら考えてみても答えは見つからず、すぐにそんなことはどうでもよくなってくる。

今、平穏ならばそれで良い。

こんな曖昧模糊あいまいもじたる状況でも構わない。

近くに力強く聳え立つ一本の巨木。

俺はその木がつくる涼陰に入り、緑に生い茂る芝生にそつと腰を下ろした。

穏やかな時間が流れて行く。

こうして動かずじっとしていると、自分が自然に溶け込んでいく。そんな錯覚がした。

此処はきつと楽園なんだ。

不意に俺はその様なことを考える。

「伊織」

突然、俺を呼ぶ声が聞こえた。

声のした方を見ると、そこには風美香がいた。笑顔で手を振りながら、こちらへと走ってきている最中だ。何故か純白のワンピースに身を包んでいる。

俺は立ちあがることなく、ただ風美香を見詰めていた。

いや、立ちあがることなく、ではなく、立ちあがるが出来ず、の方が正しいか。

こちらに向かってくる風美香に見惚れて、立つことを忘れていたのだ。

風美香は美しい黒髪を風に任せ、太陽にも負けない程眩しい笑顔を振りまきながら、軽快に地面を蹴る。

彼女が数メートル先まで駆けてきた時に、漸く立ちあがることを思い出した俺は、焦りつつ急いで立ち上がるとする。しかし、それは出来なかった。

何故なら、風美香は走ってきた勢いに任せ、俺へと飛び込むように抱きついてきたからだ。

「うお！」

情けない声を出しつつ、地面に尻もちを突く俺。

正直、非情に格好が悪い光景であったが、風美香はそれをさして気にしていないようだ。

気にするどころか、俺の腹のあたりに顔を埋め、腰に手を回しギョツとホールドするのに没頭していた。

まあ、要するに、俺は腰を風美香に抱きしめられているわけだが、もう何が何だか分からない。

名残惜しい気もするが、とりあえず風美香を引き剥がすを試みる。

「風美香、どうしたんだよ？」

そう声をかけ視線を彼女の肩に移すと、ワンピースを着ている所為で肌の露出が妙に多いことに気が付いた。一瞬、肩へと伸ばしかけていた手を引っ込めるが、意を決した俺はガシリとその肩を掴み、少し強引に風美香の身体を引き剥がす。

しかし、風美香は抗い、俺の腰から胴体へと抱きつく場所を変えてきた。

「いや！」

「なんでだよ……」

俺がそう言うのと風美香はムスツ、と拗ねるような顔をし、更にきつく抱きついてくる。

脇の下から背中へと手を回されているため、風美香との身体の密着感が半端ではなく、彼女の女性を主張する柔らかな部分が俺の胸板に当たり、嫌でもその感触を意識せざるを得ない。

「伊織……そんなに私に抱きつかれるの、嫌……？」

少し下から今にも泣き出しそうな声で、風美香はそう尋ねてきた。男が弱い上目遣いという奴なのだろう。コイツは確信犯なのか、そうでないのか分からないが、こんなにも可愛らしく尋ねられては断れる訳がなく……。

「べ、別に嫌じゃない……」

と、答えるのだった。

すると、風美香はえへへ、と照れたように笑う。その満面の笑みはとても幸せそうで、見ているこっちまでもが嬉しい気持ちになってくる。

無性に可愛い。可愛過ぎる。なんなんだこの風美香は。

可愛いゲージがマックスを通り越して、むしろコイツは誰だ状態じゃないか。

ツン気とはバイならしたのだろうか？

風美香が顔面同士十数センチほどまでに顔を近づけてきたかと思うと、頬を紅潮させ、俺に向けてこう言った。

「伊織、ちゅきー」

「んだそりゃあああああああああああああああああああ
！」

ドテェッ！と豪快にベッドから転げ落ちる俺。

気がつけば自室のフローリングに左の頬をピタリとくっつけ、地面に突っ伏していた。

「痛い……」

ジリリリリリ、と設定された時間が来たことを知らせる目覚まし時計のベルが、部屋を蹂躪している。

「夢、かよ……」

いろんな意味で酷い夢を見た。傑作と言われればそうかもしれないが、駄作と言われればそうとも言えるような内容の夢。

無限に広がる草原に、白いワンピースの風美香。

今更ながら、合成洗剤のコマーシャルか、と思うような構図だ。

きつと、風美香が「たった一杯で驚きの白さ！」的なことを豪語し、洗剤・漂白・除菌・防臭・柔軟成分のなんたらを図解で簡単に説明した拳句、アタックなどと商品名をドーンと出してくるのだ。そして窮め付けに、「白さ、ちゅきー」と、何処かのとんだ馬鹿野郎の夢の中にも出てきそうなロリータ台詞が、トドメで挿入されていることだろう。

とりあえず、この国の終わりだ。

「アホか」

俺は目覚まし時計のベルを止めつつ一言呟いた。

風美香がベッドに座っている。

そのベッドは普段彼女が使っているものではなく、見知らぬ物だった。しかもシングルベッドではなく何故かダブルベッド。

辺りを見回すと、この部屋も見覚えのない場所。何やら居づらい。風美香は状況を把握するために必死に思考するが、何一つとして思い当たる節は無かった。

まずどうして此処にいるのかが分からない。此処に至るまでの経緯が思い出せない。

困惑する彼女の元に一人の来訪者が現れる。その人物は部屋のドアをガチャリと開け、風美香と対面した。

「伊織……？」

「待たせてごめんな」

「いや、待つてない」

風美香の言葉を見無視するかのように、伊織は彼女の元へと近づいてくる。その姿は何故かバスローブだ。

風美香はふと自分の格好に視線を落とすと、何故かこちらもバスローブという出で立ちだった。

伊織は風美香の左隣に腰を下ろす。

「ねえ、此処って何処？」

「は？冗談はやめろよ風美香。最初に『ラ』が付いて、真ん中に『ブ』が付いて、最後に『ホ』が付く、その名を呼んではいけない禁断のビルディングじゃないか」

「言っちゃってるわよ！このエロちゃんびんが！……ていうか、え

っ、なんで？……そんな所で伊織と二人きりつて、それ……」

「決まってるだろ」

突然、風美香は伊織に押し倒され、ベッドに背を預ける体勢となった。

「ちょっ！待って！ストップ！」

風美香は停止を望むがそうもいかない。

「無理だ。そんなの今の俺にはもう出来ない……！やめられない……！とまらない……！」

「私はかつ えびせんか」

と、風美香は伊織に襲われている状態でも冷静にツツコミを入れた。

しかし、伊織は反応せず、風美香へと覆いかぶさる。

「ちょ、ちょ！い、い、い、伊織！駄目だつて！そんなことしちゃ、あ、あつ、ああ！」

「うん？ここかな？」

「あつ、あん！嫌！そこ弱いと、こ、ああ！駄目！ちょ……あつ、あーら、らめええええええ！」

「はっ……！」

風美香はバツ、と高速で上半身を起こした。視界に入ってきたのは、いつもの見慣れた自分の部屋。

ピピピピッ、ピピピピッ、とデジタル時計のアラームが鳴っている。

風美香はバクバクと有り得ない程早くなる鼓動を、両手で左胸を抑え堪えようとする。が、しかし、鼓動は一向に止む気配がない。

「なによ……もう……伊織のばか……」

風美香は深呼吸する。

「……人の夢にまで出てきて、エロいことしてくるなんて……信じられない」

ある程度、心臓が落ち着いてきたところで、風美香は止め忘れて

いた時計のアラームをボタン一つで止め、ベッドから降りた。

足元の小さく可愛らしい楕円形のミニテーブルの上には、昨日伊織から借りたタオルが置いてある。

よく俺の使ったタオルなんて借りようと思うなあ、なんてことを彼から言われたが、風美香本人としても、どうして借りてしまったのか分らない。

強いて言うなら、後輩の日下が伊織からタオルを借りていたのが、何故か気に食わなかったのが原因だろう。

元々、あれは自分のために伊織が差し出してくれた物なのに、それを日下は横から奪い取って行った。

風美香自身、いらぬ、と断言してしまった所為でもあるのだが、あの日下の行動には軽く苛立ちを覚えたのだ。

あの時、ありがとう、と言って素直に受け取っておけばよかったと、風美香は今更ながらに思うのだった。

それが出来ない自分。特に伊織相手には、どうしてもトゲのある言葉しか送れない。

今回だってそうだ。本当は伊織の気遣いがありがたいと思っていたし、何より自分を心配してくれて嬉しかった。しかし、素直になれず、伊織の何気ない優しさを台無しにしてしまったのだ。

そんな自分が悔しい。最近、風美香は頑なにそう思うようになっていた。

「なんで、私、伊織のことばっか考えてるんだろう……」

風美香はテーブルの上のタオルを手に取り、見詰めた。

そして、そのまま顔をそれに埋め、空気を吸う。

「ん……」

もう既に、昨日嗅いだ伊織の臭いは薄れていた。

アタツ で洗濯したからだ。

風美香は不意に切なくなる。何故なのかは本人にも分からない。

「って、これじゃあ、変態ね」

そつと風美香は微笑んだ。

「ハンツバア〜グツ！」

寢覚めの第一声。

清純派最低イケメンこと穂積は飛翔した。高度9フィートまではさすがにいけないものの、それでも四秒程度は宙を浮遊した。

足から見事にベッドへ着地し、肩膝立ちでポーズを決める。

「朝から良い夢を見たなあ！」

穂積は体勢を変えずに夢の内容を思い出す。

「それにしてもビックリだあ。まさかあそこで、くさかひめ日下姫のチクビームがかつあいゆうしゃいあり渴愛勇者伊織に炸裂するとは……。その一方、闇の神域で激闘を繰り広げる、せんおうそのべ僭王園部と神域の主、だいこくてんによなださき大黒天女灘崎。あの戦いは凄まじかった。

何と言っても、僭王園部の一撃必殺剣技『魔風大車輪斬り』を大黒天女灘崎が、肩手の真剣白刃取りで受け止めるところが圧倒的だった。スツ、と静かに刃が止められる光景はまさに『能』の世界じゃないか！素晴らしい！

…その頃、暗黒の城で助けを待つふみかひめ風美香姫は城からの脱走を試みるが、部屋の番人であった料理人穂積に捕らえられ、風美香姫の策は破綻。暴れる風美香姫を宥めるために料理人穂積は、渾身のハンバーグを料理し、彼女に差し出す。すると風美香姫は暴れるのを止め、「ハンバーグ、ちゅきー」と、何処かのミラクルボーイか、ただのクルクルパーの思いつきそうな台詞を可愛らしく言っで見せるのだった…」

もはや最高のエンターテイメントと化した夢を語り終えて、穂積

はこう思った。

もしかしたら、この俺こそがミラクルボーイなのかもしれない、と。

「きゃああああああっ！」

日下は絶叫しつつ、ベッドの上で上半身をブンツ、と起こし、勢い余って前方に倒れ込みそうになる。

しかし、その勢いを利用して頭跳ね起きを布団上で繰り広げ、ベッドから地面へとアクロバティックに着地した。実に小柄な彼女らしい。

「ハア……ハア……」

日下は荒い息のまま、ペシャン、と地面に内股で座り込んだ。

左胸を小さな両の手のひらで抑え、頬を紅潮させている。彼女のチャームポイントである金色に輝く美しい髪は乱れ、火照った頬に、額に、纏わり付くようにへばり付き、普段色気のない日下が妙に艶やかに見える。

その姿は恋する乙女と形容するのに相応しい。
が……。

「爆乳のお化け怖いよ〜」

と、恋も何もあったもんじゃない内容で色づぼくなっていたようだ。

「私にも奴らに対抗できる、大技が一つでもあればいいのになあ……」

日下は知るよしもなかった。
自分の中に眠る『乳房放射^{チクビーム}』という今世紀最大にして最強の禁術があるということ。

「おはよう、椿」

「お、おはよう。海彦」

二人はそれぞれの家の二階のベランダで早朝の挨拶を交わす。家が隣接しているからこそ出来ることだ。灘崎と園部は既にそれぞれの制服を着ている。

「今日は良い天気だね」

「あ、うん」

相変わらず灘崎は園部を前にすると上がってしまう癖がある。これでは園部への内に秘める想いを伝えることなんて出来るはずもない。

暫し二人の間に沈黙が流れるが、すぐに園部がそれを破った。

「久しぶりに、一緒に登校するかい？」

「え！？あ、それは、その…」

「嫌ならいいんだけど」

「い、嫌なわけがあるか！」

突然顔を真っ赤にし、怒鳴るように言ってきた灘崎に園部は若干戸惑うが、すぐに笑顔を返す。

「じゃっ、四十分後ぐらいに家の前で待ち合わせ」

園部は灘崎にそう告げると肩手を上げ、その場を立ち去ろうとする。が、その背に灘崎が声をかけた。

「海彦！」

「なんだい？」

「偽生徒会執行部のこと……なんだが……」

自分から話題を振ってきて困惑する灘崎に園部は苦笑する。そして、非情に形容し難い微妙な表情を彼女に見せるのだった。

「それがどうかしたのかい？」

言いたくても言いだせない。迷いに迷った末に灘崎は意を決し、脳内の文字を言葉へと変える。

「どうして、そんな馬鹿なことをしているんだ……？ お前、本当は生徒会長選挙で得票数がトツ……」

「馬鹿なこととは失礼な」

何か重要なことを言わんとしていた灘崎を、園部は半ば強引に黙らせた。それは態となのか、偶然なのか。

園部の顔は先程までの抜けたような情けない表情ではなく、キリッ、と鋭い目つきをした冷酷な顔をしている。その顔を見て灘崎はたじろぐ。そんな顔をする園部を見たのは本当に久しぶりだったからだ。

「僕達は『本気』で偽者をやっているんだよ。椿。君達、生徒会執行部をぶっ倒す為にね」

灘崎は何も言えなかった。何故か返す言葉が見つからなかった。

「それじゃあ。後で」

園部のそっけない言葉でその場での会話は終了する。彼は今度こそベランダを去って行った。

「……はあ」

灘崎は一つ溜息を付くと、ベランダの手摺に前のめりに凭れ掛かり、空を見上げた。

そして『過去』を思い出す。まだ自分と園部が中学生だった頃の記憶を。

「海彦……。本当にどうしたんだ……。いつも『弱気』だった私が生徒会長になりたいと思ったのは、『あの頃』のお前が居たから

なのに……」

灘崎は悲しそうに、そつと瞼を伏せた。

午前七時五十二分。

俺は自転車のペダルを軽やかにこいでは、爽快に風を切って真っ黒なアスファルトの上を突き進む。

今日は朝からアタツ　　だのアリ　　ルだの、何処ぞの合成洗剤的で、変態風味が香ばしい夢を見てしまい、なんとなく学校まで徒歩で行くのが躊躇われた。

別に朝食の途中、我が母に「今日、小夜ちゃんは今伊織の自転車の荷台に乗って、伊織とキャツキャウフフしながら登校したいんだってー」なんてこの世のパラダイスみたいなことを言われたのを真に受けたのではない。決してそうではない。

かと言って、今日が親父の誕生日で、本人から「ズラをプレゼントしろ」などと、ハゲスパイスが^{ほとぼし}進む命令を下されたのが原因という訳でもない。後から、何気にハゲを肯定した発言であったことに気が付いたが、それとこれとは無縁である。

要するに、単なる気まぐれだ。理由もなければ意味もない。もちろん親父に髪は無い。そして家系がハゲばかりの俺の髪には明日が無い。笑っている場合ではない。

なんてことを考えながら、俺は朝の空気を全身に浴びつつ、通学路を進んでいた。

うちの高校は私立校なのだが、幸いにも割と校則が緩く、校区内

でも自転車通学を許可されている。

それはこちらとしては望んでいたことでもあるし、自由な校風は素晴らしいと思う。

しかし校則が緩いことにより、不幸にも園部先輩をはじめとした何かと終わった連中が繁殖してしまうのが欠点だ。

最近では、同学年、つまりは二年生に、同性愛に目覚める馬鹿野郎が急増しているという噂まで聞く。

全く…。

今度、この俺が『生徒会副会長』として変態共を成敗せねばならないな。

俺はフツ、と笑みを漏らし、道を右折する。自分でやっていて正直鳥肌が立った。

何かの気配を感じて視線を右へと向ければ、すぐ間隣で風美香が並走している。

「気持ち悪い。お前は伊織か」

「伊織だ」

ペダルのごくスピードを上げるが、風美香もそれに合わせて加速してくる。

「薄情者か」

「薄情者だ」

「変態か」

「変態だ」

今、何か凄いことを肯定してしまった気がするが、俺は気にせず更に自転車のスピードを上げる。

しかし、風美香はしつこく付いてきた。

お前何なんだよ？と俺が突き放すように尋ねると、風美香は一瞬悲しそうな顔をしてムスツとする。

そして俺を睨みつけながら、

「いじわる…」

言っと、風美香が突然俺の自転車へとフライングタックルを噛ま

してきやがった。

前輪と後輪が猛烈なスピードで入れ替わりでクネクネし、俺の意志とは関係なく自転車は蛇行運転を開始する。正直、転倒しなかったのが奇跡に近い。

「お、お前！なんてことするんだ！危ねえ！」

俺は怒鳴り声を上げつつ、右後ろ後方へと顔を向ける。が、しかし、そこには風美香の姿は無かった。

何処に行ったのかと、ハンドルでバランスを取りつつ辺りを見回すが、やはり風美香の姿は無い。

代わりに背中に感じる仄かな温もり。いつの間にか背後から腹に回されていた華奢な両腕。

そう、風美香は自転車の荷台に飛び乗っていたのだ。後輪の片側に両足を投げ出し、身を捻り、俺の背中にしがみ付いている。

「お、おい！」

「伊織が悪いのよ！乗せてくれたっていいじゃない！ケチ！」

「最初から素直にそう言っていれば、少しは考えてやったのに、気持ち悪い発言から始めたお前の方が悪い！」

「うっさい！減らず口！」

「お前も充分減らず口だろうが！」

俺達は一台の自転車の上で身を寄せ合い、いがみ合っていた。

一日の初めが『コイツ一色』なんて最悪だ……。無駄なストレスが溜まる。

こんなことを考えている間にも、互いの罵声が飛び交っている。

風美香が怒涛の勢いで罵ってきた。それに腹を立てた俺は言い返してやる。

「夢のお前の方が何千倍も良かった！」

「ゆ、夢？」

風美香の勢いが唐突に弱まる。チラツ、と左後ろに目をやると、俺の肩の辺りに顔を埋めている彼女が視界に入った。心なしか、その頬は赤い。

というか、何でそんな大胆なことしてるんだいベイバー！？なんてこったい！

風美香と必要以上に密着している状況に、俺の身体は火照っている。顔なんて脳が沸騰しそうなくらい熱い。

首筋に風美香の呼気を感じる…。

「伊織…」

ちゅきー、と来るのかな、と思った自分に泣きたくなった。今なら号泣しながら中西に絶交を申し込める自信がある。

俺は自転車のスピードをやや落として、風美香の言葉の続きを待つ。

少しの間を開けて、彼女はそつと口を開き、今にも消え入りそうなほど弱い、彼女らしからぬ声でこう言うのだった。

「…伊織って…えっちい夢とか見ないの…？」

「ブッホオツ！！！！…？」

予想外の質問に俺は思わず噴き出す。驚きを隠せなかったのだ。手元が狂って、自転車が少し蛇行したので、焦ってハンドルをきってバランスを取る。

風美香は言って後悔したのか、俺の背に額を押し当て、その華奢で色白な両腕にギュツと力を加えた。余計に強く抱きつかれる形となり、俺は恥ずかしさと共に困惑する。

「……今の忘れて…」

「と、言われてもな…」

「忘れてって言うてんだから、忘れなさいよ！」

「無理だろ！」

「だったら死になさい！」

「生きてやるっ！」

唐突に訪れた沈黙。妙な空気がお互いを包み込んでいる。どうしたんだろうな、まったくコイツは…。

ここは仕方なく俺が折れることにした。

「分かった。忘れる。だからお前も忘れる」

その台詞は、俺の精一杯の優しさ。

「……うん」

小さく頷く風美香に、俺は軽く苦笑した。

「そういえば、明日って図書委員会に宣戦布告しに行くんじゃないかったっけ？」

「ああ、そう言えばそうね。アンタ、そのことについて何か知ってる？」

「ん……。本の戦いだってさ」

「本の戦いつて何？」

「さあ？俺にもよく分からない。ただ、図書委員会との勝負は本の戦いで、俺と風美香、それに穂積の二年生三人組には頑張ってもらうって言うってた」

「ふーん」

風美香は俺の胴体へと巻き付けている腕の位置を変えつつ、すこし無愛想にそう言った。おそらく、まだ先程のことを引き摺っているのだろう。

再び訪れる嫌な静寂。

……やばい、話題がない。

このままでは風美香の『えっちい夢発言』がエロエロ？つとぶり返してしまっ……！

俺は自転車をこぎながら必死に考え、突然思い至ったことを口にする。

「そういえば、風美香。今日はなんでポニーテールなんだ？」

「そんなこと、どうだっていいじゃない」

風美香はプイツ、とそっぽを向いてしまった。

何か悪いことを言ってしまったのだろうか……？

ん？ポニーテールで思い出したけど、確か昨日、俺は風美香にポニーテール姿が可愛いなあ……的な何かとんでもないことを言っ

まった記憶が……。とりあえず、気にしない方がよさそうだ。

「……気付くの遅いわよ……」

「なんて言った？よく聞こえなかったんだけど」

「あ、伊織」

「ん？」

「後で学校に付いたらタオル返すね」

「え？ああ、そういえば貸してたんだっただ。日下からも返してもらわないと」

俺がそう言い終えるのと同時に、風美香の腕に力が入った……気がした。

「どうかしたか？」

「別にー」

「そっか」

クスツ、と風美香は笑う。つられて俺も笑った。

もう何度目か分からない無言の時間がやってくるが、今までのように妙な気まずさや不快感は無い。

あるのは心地よさのみ。

傍から見れば、『自転車に二人乗りする学生カップル』に見えるだろうが、それはそれでいい。

性格はともかく、こんな美人を彼女に見られるのは悪くないし。

まあ、それこそ純粹に『偽』なのだろうが。いや、偽ですらないか。

黒髪美人を乗せた自転車は、ゆっくりと学校に向けて進んで行く。俺は背中の中のと柔らかい感触を意識しつつ、ペダルをこぎ続ける。

軽く空を仰ぎ、俺はふと思うのだった。

こういうのも案外悪くない、と

。

これはとある早朝の出来事。

『雑用』と『偽会計』の二人で過ごした、かけがえのない時間の一部。

後にその大切さに気付く、下らなくも大事なたった二人だけの時間。

もうこの時から、俺の中で『天月風美香』という存在が徐々に大きくなっているのを、自分でも薄々感付いていた。

偽生徒会執行部 早朝の光景（後書き）

はい。そんな感じで再び『VS図書委員会』の章完結まで長引いて行きます（汗）。

次回こそはこの小説を書く前から、ずっと考えていたネタを入れたいと思います。

ここまで読んで下さった方、ありがとうございます！

お気に入り登録をして下さったり、評価をして下さったり、嬉しいコメントをして下さる方、いつもお世話になっています！

宣戦布告　く図書委員会く（前書き）

本当にすみません…。

コメデイよりもストーリー重視でやった結果、またもや温めておいたネタ放出の機会が先延ばしになりました。

しかも今まで後回しにしてきた学校の設定が、突然ババーン、と出てきて、「ええ！そんな学校だったの！？」となってしまうのでしように、どうかお許しください。

今回はかなり長文ですが、様々な伏線を出しましたので、そちらの方を楽しんでいただければ光栄です。

では、どうぞ。

宣戦布告　く図書委員会

本日、俺の通う高校、『私立しりつおぼろぎりがくえん隴霧学園高等学校』にて、宣戦布告が行われる。

宣戦布告する側は『偽生徒会執行部』。される側は『図書委員会』。

元々、うちの学校は自由な校風で生徒達の自立心を育てるのが売りだが、ここまで無茶苦茶な行動が許されるのは不明だ。しかし、おそらくそんな行動も許されてしまう気がしてならない。何故なら、うちの学校は『学生ビンゴブック制度』と『成績優秀者特典制度』という訳の分からない制度を取っているとんでもない学校だからだ。

学生ビンゴブックとは、その名の通りビンゴのことだ。高校生活を送って行く中で、各所に用意された試練や試験の達成条件を満たすことで一マスずつクリアして行き、縦五マス、横五マスの二十五マスの内、縦横斜めの何れかを全てクリアすればビンゴとなり、学校から様々な景品が贈られるというシステムだ。もちろん、ビンゴ『ブック』なので、一ページ二十五マスのそれが、百ページ程度ある。これは代々、冊子として生徒たちが常に持ち歩いていたのだが、時代の波に乗って、今ではスマートフォンにデータとして持ち歩いている生徒が多い。その所為もあって、生徒のほとんどがスマートフォンを所持しているのだ。かく言う俺もその一人。ちなみに、近頃では、スマートフォンにデータ化している生徒のみ対象で一カ月に一度、学生ビンゴブックの内容追加の更新が行われている。

もう一方の『成績優秀者特典制度』とは、テストの成績上位者や通知表の総合成績優秀者に特別に恩典を贈る制度のことだ。貰えるものは二つあるうちのどちらかということになっている。その二つは『奨学金』と『学園追放権』。前者は普通に理解できるのだが、

後者は思わず耳を疑ってしまう。

『学園追放権』。それは私立隴霧学園高等学校の中で『黒い権利』と呼ばれ恐れられている権利の一つ。秀才な者だけに許される暗黒の権利。

その名の通り、これを所持する者は、容赦なく隴霧学園高等学校の生徒を退学にさせることが出来る。ただし条件があつて、一人に対し一度までしか権利の行使が出来ず、権利は使い捨てだ。更に詳しく説明すると、相手から学園追放権を行使された場合は、こちらも学園追放権を行使することで対抗でき、相手が一回行使してきたら同じく一回で対抗でき、二回行使してきた場合はこちらも二回で対抗する。つまり、権利を行使できる回数が相手以上ならば退学を免れることが出来る。まったくとんでもない権利だ。校長の気がしない。

まあ、こんな実力社会で、教育委員会の問題にでも上がつてきそうな程、依怙^{えこひいき}覇^はのし過ぎな学校ならば、少々問題のある行動をとつても問題視されず、余程のことがなければ停学を喰らつたり、退学を言い渡されたりしないというのが有り得るというわけ。

それ故、園部先輩も『偽生徒会執行部』なんて正気の沙汰とは思えないトウルトウルパーな組織を創設したのだろ。いくら、『垂れ乳^{ちりち}って、乙だのお』とか言うカテゴリーの変態（78キモス）だとしても、何の考えもなしに組織を作ったとは到底思えない。

放課後。

偽生徒会室に園部先輩、日下、穂積、風美香、それに俺の偽生徒会執行部フルメンバーが揃っていた。

あつ、独身アラフォー男こと林先生が、付け合わせのミックスベ

ジタブルの如く、今日も部屋の隅こつに突っ立っているのも忘れてはいけない。

先生はいつも通り「嫁よ…」と呟く。さて、ここからがスローモーションだ。林先生の口元が徐々に窄んでいき、上下の唇同士が触れ合うか触れ合わないかの瀬戸際のところで一気に開口。そして激しい水飛沫…いや、唾飛沫を散らし、両の目を開眼。両の鼻の奥にある楽園を開園。そして先生は見ているこつちが、ドン引きならぬ『ボン引き』必須の顔面を携え『come on!』、と巻き舌且つネイティブな発音でまだ見ぬ嫁の来訪を懇願した。まさかのコックニー発音。

８７キモス。

園部先輩を軽く超えた。

奴のキモさは究極か。

「偽生徒会執行部の諸君」

園部先輩の声は偽生徒会室に響き渡る。

「今日はいよいよ、偽生徒会執行部が初めて直面する『宣戦布告』の日だ。心の準備は出来ているかい？」

先輩はメガネをチャキ、と鳴らし俺達メンバーの顔を一度見回す。

「バツチリですっ」

「できてます」

「準備万端です」

「まあ、それなりに」

日下、穂積、風美香、俺の順に先輩の問いかけに応じる。俺以外のメンバーは、どうもやる気がバリバリあるようだ。俺の方とは言う、と、正直あまり気が進まない。

園部先輩は満足そうに、ニヒ、と笑うと話を続ける。

「これより、図書室へと出撃する。その前に何か質問ある人は？」

「はい」

今日はポニーテールではない風美香が挙手した。

「なんだい？風美香さん」

「宣戦布告に関してのことなのですが。相手が承諾しないということはあり得るのでしょうか？」

「有り得るよ」

マジかい。俺は心の中でツツコミを入れた。

「だから、断られたら今までのこの気合の入れようも、美術部の努力も、全てがゴミクズのカス並みに無駄になるんだよ」

「え…、それって」

風美香は困惑する。無理もない。日下も穂積も、もちろん俺も驚いているし。

「でも、大丈夫」

園部先輩は自分の胸を一度ポン、と叩き、相変わらずの誇らしげな笑顔でこう言った。

「この僕を誰だと思っているんだい？」

窓から差し込む陽光を背に自信満々に仁王立ちする園部先輩は、なんだか凄く頼りになる人のように見えた。この人なら信じてても大丈夫。任せても大丈夫。そんな気がしてならない。

気が付けば俺達は笑っていた。それは別に園部先輩を滑稽に思っただ笑いではない。その通りだ、と彼を肯定し『尊敬』する笑いだ。

妙な緊張感から徐々に和んで行く空気の中、俺はふとあることを疑問に思う。そして、それをここぞとばかりに質問した。

「園部先輩。話は結構変わるんですが、『偽生徒会執行部』の誕生秘話とかってあるんですか？さすがに、ただ選挙で落選したからこの組織を作ったってわけではないですよね？」

「ん？誕生秘話？例えば、『戦争で両親を亡くした子供が、親を殺した世界を恨み、憎んで生き続け、数年後成長したその子が、自分を中心とする組織を作り、世界に復讐を開始する』みたいなやつ？」

「そんなファンタスティックな物語は要求してませんが…」

「誕生秘話……。誕生秘話……。ああ、そういえば」

あ、あるんですか！と大袈裟な反応を見せるのは日下。皆の視線

が園部先輩に集中する。

「実は……」

実は…？

「実は……」

実は…？

口には出していないが皆が心の中で、園部先輩の言葉を復唱しているのが手に取るように分かる。

顔が必至だ。

「実は……」

……。

園部先輩はもったいつけるように間を開け、目を閉じる。

そして、意を決したのか、両目をカッ、と開き…。

「なんもねえーよッ！バアーカ！」

「……だと思ったよッ！……」

俺、風美香、穂積、日下のツツコミが見事に揃った。

エロ眼鏡のボケー一人に、俺たち四人のツツコミ。

こんな珍しい構図もあるんだなあ、と俺は感心せずにはいられない。

そして、俺は顔には出さずこう思っただった。

やつぱり『偽生徒会執行部』の誕生には何か裏がある、と。

園部先輩は一つ咳払いをすると、偽会長専用の机の引き出しから何かを取り出す。よく見るとそれは、『黒い腕章』の様だ。輪の形に端と端を縫い合わせた布の上下は白色の縁取りがされていて、同じく白色で『偽生徒会執行部』と中心に格好良く書かれている。更に目を凝らすと、『偽生徒会執行部』と書かれている上に、ルビの様な感じで『NSS』と記されているのもこの位置から見取れた。

「これは、僕達の腕章だ。美術部と手芸部特製のね」

言っと、園部先輩は腕章を一人ずつ手渡しで丁寧に配る。先輩から受け取って、いざじっくり腕章を見てみると、思わず、プロかこの野郎、とツツコミを入れたくなる衝動に駆られてしまっほど腕章の出来が素晴らしかった。

凄過ぎるぞ、美術部&手芸部。グッジョブ。

「美術部と手芸部には一体どんな逸材が……？これ物凄く良い出来じゃないですか。しかも、どうして突然、腕章なんて物を？」

先輩に尋ねた。

「結構前から椿が、『執行部と全委員会には活動中、腕章を付ける義務をかすようにする』って言ってたから、僕達もそれに乗っ取ろうと思ってね。伊織、君はそのうち『生徒会執行部』の方の腕章も貰うんじゃないの？ザマアア見ろッ！」

「何がっ!？」

俺が起立し、ボン引きの顔で心の底からの驚愕を表現している最中、日下が席を立ちあがり、俺をビシッと指しつつ、

「なっかまハッズレーっ」

「歌うな！」

日下に次いで、次は穂積が立ちあがり、日下と同じく俺を指差し、

「なっかまハッじゅれえ〜えーっ」

「そこで囃むな！」

「オツカマはっずれえ〜 トウツトウルうー」

「意味不明だが、とりあえずオカマに謝れ！」

最後に風美香がスツ、と暗黒オーラを纏いつつ立ち上がり、俺へとゆっくりと人差し指の先端を向け、

「……この自称『キャロット小僧^{ヘタ}』がッ！」

「あーそうそう、このね、髪^{ヘタ}をね、ピツと取ってね、ピーラーで、こっ、シューっとするんだキャロよ。あーそうそう、農薬には気を付けるキャロね。しっかり洗い流すんだぞお。ウオッシュ、ウオ

ツシュ！そして、最後に一言、ニンジンはカロテン豊富だからいっぱい食べるキャラねえ、よろぴくキャラ、……って何を言わすッ！？」

よろぴくキャラとか馬鹿にしてるのか？

思わず、ノリツツコミをしてしまったではないか。

髪をピツと取ってピーラーでシュー…。

一歩間違えれば絶命ものだ。

園部先輩がこちらを睨みつけてくる。

「ちよつと、ニンジン小僧、静かにしてくれるかな？」

「誰がニンジン小僧だ」

「そんな奴、伊織以外の誰なのさ？」

「何気に五・七・五！」

うるさいエロニンジンと風美香に言われ、俺は仕方なく黙り込む。するとこの部屋が途端に静かになる。

正直、エロニンジンと言われ、それが自身のことだと即分かって反応してしまった、自分に泣きたくなつたのだが、さすがに泣きはない。だって男の子だもの。泣いてたまるものか。

園部先輩が真剣な面持ちで口を開く。

「さて、もう時間も時間だし、そろそろ行こうか。図書室へ」

はい、と全員の声が一致した。

「最後に一言、僕から伝えておくべきことがある。それは偽生徒会執行部の一員として高校生活を送る際に必要なこと。まあ、『鉄則』とでも言っておこうか」

鉄則…？

それは一体何なのだろう？

俺は先輩の言葉に耳を傾ける。

「その鉄則というのは、『相手の弱みを見つけ、そこを突け。なければ作り、そこを突け』さ」

うわ…最低な鉄則だ…。聞いた第一印象はそうだった。しかし、

そう思ったのと同時に、実に園部先輩らしい鉄則だな、とも思った。気が付けば、俺は自然と笑顔になっていた。日下も穂積も風美香も、そして園部先輩自身も笑顔になっている。なんか……良い雰囲気だな。

園部先輩が部屋の扉の前へと移動した。俺達もそれに続く。

そして、先輩は俺達四人に背を向け、こちらを一度も振り向かずこう言った。

「さて、出撃だ」

「……はい……」

扉がバツ、と勢いよく開かれ、部屋に差し込む眩しい光。

それはこの先に待ちうける明るい未来を象徴する光なのか、それとも絶望へと誘う見て呉れだけの光なのか。

それは誰にも分からない。

だが、俺の……いや、『俺達』の胸の中にあるのは希望と自信のみ。他の無駄な感情は一抹とてありはしない。

俺達は敵の根城、『図書室』へと向けて、一歩一歩としつかりと確実に歩みを進め、偽生徒会室を颯爽と去り行くのだった。

その姿はまさに、威風堂々と称するのに相応しい。

ガァーッ、と豪快な音を立てて開かれる図書室の扉。

そして俺達、偽生徒会執行部は突撃を仕掛けるかのように図書室になだれ込み、啞然とする図書委員共の視線を浴びつつ仁王立ちする。

並びの順番は、今の俺から見て、一番右端から穂積、日下、園部先輩、風美香、俺の順。

「偽生徒会執行部だ！」

園部先輩がでかでかとそう宣言すると、俺達はそれぞれの腕に付けた黒い腕章を図書委員会の生徒達に見せつける。

辺りを見回すと、本を読んだり勉強をしたりする一般の生徒は、どうやらいないようだった。

ということは、おそらく此処にいる奴ら全員が図書委員。そこにはもちろん火坂さんも含まれているが、今回は仕方ないと割り切り、心を鬼にしなければ。

部屋のあるこちらから様々な声が聞こえてくる。

「な…なんなんだ、こいつら…」

「偽生徒会って、確か此間、生徒会の全校集会をメチャクチャにしたやつじゃない？」

「爆乳宣言のカワイ子ちゃんがいる！」

「あれ？副会長までいるぞ」

「園部がまた暴走してるわよ。ったくアイツ、頭良いのか悪いのか…」

「イケメン君だぁー」

「あの黒髪の娘、誰？かなり可愛いじゃん」

ザワザワと騒ぎ始める図書委員会の生徒達。それに対し、静まれ、と命令するかの様に強い口調で園部先輩が、

「図書委員長に用がある！」

と図書室に響き渡る声で言った。

すると、群衆のざわめきは幾分か止み、代わりに一人の男の声が部屋の隅から返ってくる。

「はいはい。図書委員長なら俺ですけど、何の用すかー？」

同学年で図書委員長なんて、どんな生真面目な奴かと思っていたが、どうやらそうでもなかったようだ。声を聞くに予想外にも荒々しく、がさつな雰囲気だ。

その自称図書委員長の男は、本棚の間を抜けて、ひよいとこちらに顔を出して来る。

彼の顔を見た瞬間、俺は驚愕した。

「おつ、こんな所に副会長じゃん。おつす！」

我が高校の図書委員長は、あの謎のスポーツ馬鹿、本田定則だったのだ。

「だ、騙したな!!」

自然と俺は叫んでしまった。内容が内容だけに、本田は、は？、と言った感じでポカンとしている。

正直アホかと思った。

「騙すって何を？」

「お前、どう考えても体育会系じゃん！ゴリじゃん！マッチョじゃん！足してゴリマッチョじゃん！何をどうやったら、文化系な図書委員会なんてできるんだよ！本来、ゴリマッチョと本は相容れぬ存在のはず…。何故だ！？どうしてだ！？しかも、委員長は立候補だろ！お前立候補したのか!？」

「ん？副会長、俺が図書委員長ってこと知らなかったのか？生徒会執行部なのに？しかも副会長なのに？」

何故か、本田と中西がデジャブツた。しかし、そんなことを気にしている場合でない。

そんなことを気にしてやってられるか。下らない。パニックで、もう何が何だか分かんねえ。何故か先程から、『アンダーヘッドヒップドロップ』という単語が脳内に羅列されている。俺はケツか。

ああ、もうどうだっていい。中西がゴリマッチョで、本田がオネエ系でも大して変わらない。

グルグル意味不明な言葉ばかりが脳内に渦巻く中、俺は開き直る。
「生徒会選挙の方で手一杯だったんだよ！委員長選挙なんて気にかけてられなかったんだ！」

「見グルシー。そして訳分からん」

「黙れ！お前が図書委員長になつてることの方が訳分からんわ！」
「だって、俺、本好きだし。だから図書委員長になったんだよ」
う、嘘だろ…。

今俺の中で、体育会系だのゴリマッチョだの文化系だのの根底が、
ことごとく破壊された。

俺が放心状態でいる中、園部先輩が会話を進める。

「図書委員長」

「なんすか？偽会長」

「これを読みたまえ」

言つと園部先輩は制服の胸ポケットから、『果たし状』を取り出し、それを本田へと渡した。

果たし状は全体的に黒を基調とされていて、表に白色で『The Letter of Challenge』とデザイン化されたアルファベットが書かれている。

「これは？」

「果たし状だよ。何でこんなことをするのは、分かっているだろうっ？」

「え？ああ、まあ。…学校征服の一環っすよね？此間、全校集会の時に宣言してましたし」

「その通りだ」

本田は大きな両手で、二つ折りの果たし状を開き、書かれていることを声を出して読み上げる。

「『我々、偽生徒会執行部は図書委員会が我らの傘下に入ること
を求む。』」

「ここで君がこれを承諾してくれば、話は早いんだけどね」

「まあ、こちらとしてはそうもいかないっすよ」

園部先輩は予想通りと言わんばかりに笑った。

「『もし、これを図書委員会が承諾しない場合は、我々は図書委員会に決闘を挑むこととなる。』って、決闘自体を無視することはできないんすか？」

「してもいいけど、したらどうなるかは分かっているよね？」

本田は、それもそうっすね、と軽く微笑み、再び内容を読み始めるかと思ったが、予想外にも本田は果たし状をパタリと閉じ、

「んじゃあ、仕方ないから決闘受けます。どうせ和解なんてできないでしょうし」

と園部先輩に告げた。

「おつ、そうか。内容は全部読まなくて良いのかい？」

「読みましたよ、決闘の詳細全部」

速い！今の一瞬の目配せで全部読んだのか！？なんてスピードの速読なんだ。

「副会長たち二年生があんな大変な役を担うんすか？」

「まあね」

え？そんなヤバい役なのか…？

俺の背筋に嫌な汗が流れる。チラツ、と風美香を見ると、彼女も動揺していた。穂積もかと思いい、彼の横顔を観察するが、奴だけはいつも通りの笑顔のままだ。おそらくあれはポーカーフェイスなのだろう。

俺は本田と園部先輩の会話に口をはさむ。

「な、なあ本田…、今からでも決闘を断ることは出来るぞ？別にアホらしいと思えば無視したって…」

「いや、決闘はする。だって面白そうじゃん」

俺は嘆息した。この場にいる図書委員たちの顔を見ると、この妙な空気に困惑している様子だ。まだ、この状況についてこれていない人もいると見た。

本田は、まあそれに、と付けだし、

「俺はまっすぐ自分の言葉は曲げねえしな」

「それはお前の忍道か！雷遁飛ばすぞコラ！」

今なら左手から、バチチチチッ、と何か電撃的な物が出そうな気がしたが、もちろん何も出ない。

まだ文句を言っただろうかと思っただが、園部先輩に横目で睨みつけられたのでそれはやめた。

「じゃあ、図書委員長。いいんだね。決闘を受け入れると言うことで」

「はい。全力で勝負させてもらいますよ」

園部先輩は、フツ、と一笑する。そして、仕切り直しに一度咳払いをすると、真剣な眼差しで図書委員達を見回し、最後に先輩はこう宣告するのだった。

「偽生徒会執行部は図書委員会に対し、ここに宣戦布告する！」

後にこの宣戦布告が、学園全体を巻き込む大きな『戦争』へと繋がって行くことを、この時はまだ誰も知らなかった。

これこそ、本質的な偽生徒会執行部の始まりの時だったのかもしれない。

『戦争』の種をまいたこの瞬間こそ、きっとそうだったのだろう。と言っても、『戦争』が起きるのはこれからまだ先のことではあるのだが。

図書委員会に対し宣戦布告を終えた後、園部先輩から今度の決闘

の詳細を書かれた紙を貰い、俺、風美香、穂積の三人は学校の校門付近でそれを食い入るように読んでいた。

『タイトル』 偽生徒会執行部 vs 図書委員会 〈本の戦い〉

『日時』 4月20日 15:30～21:00

『場所』 図書室

『決闘の流れ・概要』

偽生徒会執行部と図書委員会で『リレー小説』の執筆対決を行う。戦いに敗北した方の組織は勝利した組織の要求を必ず受け入れること。

引き分けだった場合は特別試合を行い決着をつける。特別試合の内容は偽生徒会長と図書委員長のみが知ることとし、偽生徒会長と図書委員長が味方に特別試合の内容を教えることを固く禁じる。

今試合は動画研究部や放送部などの提供の元行い、校内にリアルタイムで決闘の様子が放送される。

『戦いの詳細・ルール』

偽生徒会執行部の代表者三人（天月伊織、天月風美香、穂積佑馬）と図書委員会から選出される代表者三人の計六人でリレー形式の小説の執筆対決を行う。試合は全三回戦で、回戦ごとに違った小説のテーマ・設定が代表者たちに出題される。

試合の審査を行うのは十人。予め偽生徒会執行部と図書委員会でそれぞれ五人ずつ、全校生徒の中から選抜しておく（教師でも可）。審査員は一人最高10点をつけることが可能。つまり、組織代表者一人の最高点は100点である。（審査員は代表者が一回執筆

し終えることに評価点をつける。)

当日、最初にどちらの組織が先攻・後攻になるかを決め、偽生徒会執行部と図書委員会の代表者が交互に執筆できるサイクルを決定する。(代表者のオーダーは各組織自由に決めて良い。)

その後、小説のテーマ・設定の発表と同時に第一執筆者から順に小説を即興で書いて行く。第六執筆者まで書き終えたら再び第一執筆者に戻り、リレー小説を続ける。

それぞれの組織にはそれぞれ目指すエンディングが指定されていて、お互いに文章で相手のエンディングへの展開を妨害しつつ指定のエンディングを目指すことが今試合の目的である。(指定のエンディングを迎えた場合は、ボーナス100点が加算される。)ただし勝利の基準は飽く迄も『三人の代表者の点数の合計が相手よりも多いこと』であるので、審査員の高い評価を得るストーリー展開・執筆技術であることが重要である。(ストーリーの内容や文章を蔑ろにすると、減点の対象となる場合がある)

執筆の持ち時間は一人二十分で、二千字以内の文章に必ず収めなければならない。(執筆する際は、パーソナルコンピューター研究部提供のパーソナルコンピューターを用いる。)

もし、両組織の得点が同じだった場合は、特別試合を行い勝敗を決める。

尚、今試合では、学園から授与された『特権』^{フリップレッジ}や『物品』^{アイテム}の使用を許可する。

『審査基準』

今試合の審査員は次の審査基準で評価を下すこと。

- ・ストーリーの出来・展開
- ・文章の出来・工夫
- ・執筆速度
- ・誤字脱字の有無

『提供・協力』

動画研究部、放送部、カメラ同好会、パーソナルコンピューター研究部、工学部、新聞部、美術部、ライトノベル研究部、請負団、広報委員会、仲良し委員会

「おい…なんか凄いことなってるぞ」

「うん…」

「そうですね…」

俺たち三人は顔を見合わせ、はあ…、と嘆息した。

「しかも、これだと、此間俺たちが図書室の下見した意味なくね？」

そう俺が言っていると、穂積が反対の意見を唱えた。

「いえ、意味はあると思いますよ」

「どうして？」

「たぶん下見で取得した情報は、特別試合の方に生かされているのでしょ」

「じゃあ、決闘で引き分けにならなかったら意味ないじゃん」

「まあ、その通りですね」

俺はがつくりと頂垂れた。穂積を見ると、彼は眉毛をハの字にして、ソーツ、と外国人みたいに肩を竦める。一方、風美香はというと、それなりに膨らみのある胸の下で両腕を組み、ムスツ、としている。

…それにしても盲点だった。蓋を開けてみれば勝負の内容がこんなに大変だったのだと、誰が予想できただろうか。

「そういえば、どうして瑠奈は参戦しないのかしら？あの娘、偽生徒会執行部では一応最年少なんだから、こういう役は瑠奈とアンタ達二人の三人がするべきよ」

「そりや、理不尽だろ。お前はやって当然だ。」

日下が参戦しないのは、たぶんアイツがこの試合を考えた張本人だからだろうな。日下自身そう言ってたし。

園部先輩は変なところでフェアにしようとする人だから、あの人の命令で最初から決闘の内容を知っていた日下は下ろされたんだと思う」

俺が喋り終わると、今度は穂積が口を開く。

「だとしても、突然、高速執筆しろ、なんて言われましてもね…」

「まあ、無茶振りにも程があるわよね」

仕方ないよ、と俺は呟くことしかできない。でも、本当にどうしようもなく、仕方がないんだ。今更決闘の取り消しを求めることはできないし、偽生徒会執行部を辞めることもできない。特に俺には、生徒会執行部からのスパイとして偽生徒会執行部に所属し、奴らの行動を見張るという義務がある。

俺たち三人は再び溜息をついた。

どんよりとした空気の中、穂積が唐突に明るい声を発する。

「よし！頑張るぞぉ！」

そして穂積は疾走する。

熱血アンポンタンかと思った。

「ちょ、ちよっと！穂積君！？どうしたの！？」

風美香は突然のことで驚きつつも、走り行く穂積の背に声を投げかける。すると穂積はこちらを振り返り、大きく右手を左右に振りながら、

「今すぐ家に帰って、執筆の練習してきまーす！それじゃ！」

と大声で叫ぶと、再びこちらに背を向けて走りだす。

彼は熱血アンポンタンZであった。

俺は、とりあえず頑張れよー、と人事のように返しておく。

「ほ、穂積君って、ミラクルね」

「ああ」

俺達は二人して、プツ、と噴きだすと大笑いした。穂積には大変

失礼だとは思ったが、あれは結構面白かったのだ。実にアイツらしくて最高だった。

一頻り笑いあった後、俺は言う。

「帰ろっか」

「うん。そうね」

俺と風美香は校門を出ると、途中までお互い共通である家路を並んで歩む。

俺の右隣に風美香。今日は昨日と違って歩きで登校したため、自転車に乗って爽快に下校とはいかない。

「ねえ、伊織」

「何だ？」

「一人で執筆の練習って萎えると思わない？」

「さあ？萎えると言えば萎えるし、萎えないと言えば萎えないな」

「なによそれ」

俺は、さあ？、ともう一度返す。すると、ウザいと返ってきた。それに対し、分かっているよ、と即座に返してやる。こんなやり取りにも随分慣れたものだ。まだ、コイツと出会って一カ月も経っていないというのに。

「そういえば、風美香って、プリビレッジ アイテム特権とか物品って持ってる？」

「プリビレッジ…？学生ビンゴブックとか成績優秀者特典として学校から貰えるやつのこと？」

持ってるわけないでしょ。転校してきたばかりなのに。ビンゴブックは結構難しいのよ。テストは今のところ一度もないし」

「それもそっか」

伊織は？、と可愛らしく首を傾げこちらを見詰めてくる風美香。俺は焦って彼女から目を逸らし、

「ま…まあ持ってるかな」

と答える。

「例えば何持ってるの？」

「それは秘密」

「なによそれ」

「それはそれ」

「ウザい」

「分かってるって」

風美香は、あはは、と可憐に笑った。つられて俺も笑う。

コイツと話していると、なんか楽しいな……。

って何を思っているんだ、俺！

騙されるな。コイツは鬼の風美香。今はトゲを引っ込めてるだけだ。

頭をブンブンと振り、俺は自分の妙な考えを消し去った。

「どうしたのよ？」

「いや、何でもない」

ポーカーフェイスで誤魔化すと、風美香は、ふーん、と疑いの眼差しを俺へと向け、話題を変えてきた。

「まっ、そんなことはどうでもいいんだけど……。ねえ、アンタ、一人で執筆の練習するの？」

「そうだな。それ以外ないだろ。つか、さっきから一人が萎えるだなんだ言ってるけど、もしかしてお前、『俺と一緒に』に練習したいのか？」

「冗談交じりにそう言ってみたが、風美香はそれを本気にしたのか、
「ば、馬鹿！そんなことあるわけないじゃない！い、伊織と一緒に練習したいとか、全然そんなことないわよ！」

風美香のその反応に俺は妙に楽しくなり、今度は調子に乗って
「じゃあ、一人で頑張れ。俺も頑張るから」

と少し虐める感じで言ってみた。

さすがにこれは怒られるかな。

俺は風美香から蹴りが来ることを覚悟して、身構える。…が、予想外にも風美香は俺が来ているブレザーの裾をぎゅっ、と弱弱しく

掴んで、両の目を涙目にして、何故か必死の形相だった。

「ごめん……。さっきの全部嘘……。私、執筆なんてしたこと無いから……。心細いの……。だから、伊織……。一緒に練習してよ……」

消え入りそうな風美香の声。

その瞬間、俺の鼓動が速くなった。バクバクと苦しい。猛烈な勢いで顔に血が昇って行く。

な、なんなんだよ……。

風美香の華奢な腕に力が入っているのが服を通して分かる。

「わ、分かった。……明日からか？」

俺がそう言った瞬間、風美香の顔が、は？何言ってるの？、という顔になった。

「今日からよ」

「は！？今からか！？」

「そりやそうよ。穂積君も頑張るみたいじゃない。私達が頑張らないでどうするの？」

俺より数歩先を歩き始めた風美香に駆け足で近付き、自分でも驚くぐらいの大声を出す。

「場所がないだろ！」

怒鳴りつけられた本人は、へ？、とした表情を浮かべる。

そして、さも当たり前かのようにこう言っのだった。

「アンタの家があるじゃない」

今度は俺が、へ？、となる番だ。

今コイツは何と言った？

俺の家？

何の冗談だ？

風美香はジョークの国からやってきたのだろうか？

ハッハッハ。笑えない冗談だ。

「う、嘘だろ……？」

「本気よ」

俺は一瞬目眩を起こした。

風美香が俺の家に来ると…？

いや、こんな美人がうちみたいいなハゲの根城にやって来ることに
関しては悪くない。むしろ喜ばしいことだ。

大歓迎。やつほーい。大ジャ〜ンプッ。

しかし……しかしだ。

仮に自分を親だとして、息子が家に帰って来ると同時に、なん
だか素晴らしい美人を連れてきた状況を想像してみるんだ。

……あからさまにそれって彼女じゃん！紛れもクソもない彼女じ
ゃん！親視点から見れば、なんか色々誤解するじゃん！もしもこの
家に誰も居なかったら、えっちいことする気だったな、って親は絶
対思っちゃうじゃん！

「さっ、早く行こ」

俺は風美香に腕を引かれ、引きずられるように自分の家に向かっ
て歩き出すのだった。

「ふ、風美香！？や、やめろ！帰りたくない！帰りたくないよお
！いやあああああ〜ッ！」

こんなにも家に帰りたくなかったことなんて、生まれてこの方一
度もない。

これは何のフラグだ馬鹿野郎。

宣戦布告　く図書委員会く（後書き）

はい。まあ、そんな感じですよ。

次回こそは温めておいた例のネタ（ラブコメの王道）をするはずですので、次回も読んでいただければ嬉しいです。

此処まで読んで下さった方、ありがとうございます！

お気に入り登録されている方、いつもお世話になっています！

風美香が家にやってきた！？（前書き）

題名の通りです。

そして、今回、ようやく今まで予告しまくっていたネタが解禁されました。

あつ、ここまで伸ばしまくってましたが、別に自信のあるネタなわけではないんです…（汗）。

下品だ！とか、何でそこで！？とか、ツツコミ所満載な回ですが、楽しんでいただければ幸いです。

風美香が家にやってきた!?

「どうぞ、どうぞ！風美香ちゃん！」

「お邪魔します」

実の息子そっちのけで我が母は風美香を家の中へと招き入れていた。

俺は軽く溜息をつき、二人の後を追ってリビングへと続く廊下を歩く。

「なんだかなー……」

風美香を連れて帰って来た時の親の反応がメチャクチャ怖くて、ビビりまくりながら家のインターホンを必死に押した自分が馬鹿らしく思えてきた。

結果から簡潔に言っていると、母さんは風美香をすんなりと受け入れたのだ。

俺がおこなったことと言えば、インターホンを通して母さんに「こっちはクラスメイトの天月風美香。ちよつと事情があつて

」と、途中まで風美香を紹介しただけだった。それだけで母さんは高速で玄関の扉を開け放ち、ハイテンションで家の中へと招待したのだ。

「名字、うちと同じなんだあ」

「あつ、はい。実は私も転校初日にそれで驚いてー……」

風美香と母さんはもう既に打ち解けてしまっている。あの状況を見るに、どうやら風美香は結構話し上手聞き上手なのかもしれない。母さんが凄く楽しそうだ。

二人は先にリビングへと入って行く。俺もそれに続いて入った。すると、こちらに背を向けフローリングに座り、テレビをじっと観ている自滅ハゲを俺は目視した。今日もお早いお帰りのようで。

「ちよつと、あなた！伊織が女の子家に連れて来たわよ！しかも

可愛いのよ!」

「おつ、それは珍しい。というか、今まで一度もなかったな」

親父はそう言っと、風美香の方に振り返り、右手を軽く上げ、

「どうも、伊織の父です。ゆっくりしてってね。可愛い女の子は大歓迎さ」

と挨拶をした。

初めまして天月風美香です、と風美香はそれに返す。すると親父は愛想良く彼女に微笑んだ。

：面白い。愛想は人一倍良いが、挨拶に面白さがまだまだ足りないぞ、ハゲ親父。

最近、奴は妙に大人しくなった。時期は大体、俺が高校生になっ
てから。

あんな親父でも、実は昔、なかなかユーモアに溢れたジョークマンだった。爆笑一発芸というのを幾つか持っていて、ほんの数年前までは、ほぼ毎日のように俺に見せてくれていたのだ。

中でも俺のお気に入りネタは『高速ケツバースト』。それは、三文字で最初の文字が『ア』で最後が『ル』、そして真ん中の文字が『ナ』的な部分(要するに尻の穴)にピンポン球を入れ、空気砲の要領で一気に穴からピンポン球を『シュパァッ!』と爽快に放射する禁術である。もちろん空気というのは『オナラ』のことだ。

穴に球が装填されてから『ブルウォー!』という起爆音と共に、異臭を纏いつつピンポン球が射出される、そのシュールな光景が俺は大好きだった。その後、卓球台の上を、カッソッ、カン、カン、カッソと乱舞するピンポン球の音なんて最高だ。

一度、放射するのを誤って、親父は自ら穴の奥へとピンポン球を吸引してしまったことがあった。その時の親父が発した『あびゃ〜』という喘ぎ声は今では伝説となっている。そんな夢の様な光景に俺は大笑いし、窒息死しかけたのは良い思い出だ。

そつえば、あの頃の俺は純粋なガキだった。

将来なりたいもの第一位は、バルン星人。第二位はゼツンな

らぬ、ゼツ　ン星人。そして第三位は、ガツ　星人。その三つ全てが叶わなかった場合は妥協して、お笑い星人、というように、もはや人間の領域を逸脱していた。

何が悲しくてお笑い星人になどならねばならんのだ。

まずお笑い星人とは何なんだ。

しかも昔の俺はどんだけ異星人になりたかったのだろうか。

何よりガツ　星人はハゲではないか。

自滅する気が、過去の俺。

昔と比較し考えてみれば、今の俺は親父と同じように、昔を完璧に忘れた悲しい人間なのかもしれない。今、将来になりたいもの第一位は、なんらかの公務員。ちよつと夢を見るなら、東　ハイスケールの名物教師（口癖はあびゃー）。軽くふざけてみるなら、ポケンのバ　ヤード。もしくは、仮　ライダーのショッ　ー。

……なんて夢がないんだ。ショッ　ーとか馬鹿にしてるのか？

「風美香、先に上がったといってくれ。階段上つてすぐ右の部屋が空き部屋になってるから、そこに入つてて」

「あ、うん。伊織は今から何するの？」

「パソコン一台取つて来る」

「もう一台は？」

「俺の部屋のやつがある」

うん、分かった、と風美香は頷くと、リビングを出て階段を上がつて行つた。

その背中を見送ると、俺は踵きびすを返し親父と母さんに向き直る。

「先に言つとくけど、彼女じゃないからな」

ふーん、と面白くなさそうな顔をする二人。俺は嘆息した。

少し間を開けて隣り合わせた二台のノートパソコンを同時に起動

し、その間に積み重ねた様々なジャンルの本を置く。その本はいわゆる、執筆するのに参考とする本だ。

俺は制服のブレザーを手早く脱ぐと、それを椅子の背凭れに掛け、その椅子に深く座り込んだ。

俺の左隣に風美香。机しかないこの寂しい部屋に俺達は妙な間を開け並んで座っている。

「アンタの家、結構広いのね。空き部屋まであるし」

「まあ、それなりに」

風美香は本の山から何冊か適当に手に取ると不満そうな顔をし、それらを元に戻した。どうした？と訊くと彼女は答える。

「エロ本がないのよ」

「あるかつ！」

その時、部屋の扉が、コンコン、とノックされた。

「何？」

俺が扉に向けてそう投げかけると、

「差し入れてーす」

と我が母の声が返ってきた。すると、こちらの返答を聞かず、ガチャリとドアノブを捻り、堂々が入ってきた。

「仲良くしてる？」

「特にしてねえよ」

その両手にはミニテーブルが握られていて、その上に幾つかのスナック菓子やオレンジジュースが置かれていた。

「あつ、ありがとうございます」

風美香が丁寧にお礼を言った。少し新鮮だ。

母さんはにつこりと微笑むと、ミニテーブルを俺達の邪魔にならない場所に置き、

「邪魔者は退散しちゃうぞ」

と、キャピキャピした声で部屋を出て行った。あれにはドン引きせざるを得ない。

「伊織のお母さんって、可愛いわね」

「何処が!？」

風美香は、全部、と真顔で答えると、再び本の山をあさり、一冊の本を取り出す。

それはタイピングなどについて書かれた、パソコンの基礎の本だ。

「まずは速くタイピングできるようにならないとね」

「それもそうだな」

俺は左の袖を捲り上げ、腕時計で時間を確認する。

時計の針は午後四時三十七分を指していた。

「んじゃあ、最初はタイピングから始めるか」

風美香は、うん、と返事をする、と、右手首にはめていたヘアゴムを使い、自由に解放されていた自らの黒髪を一括りにする。長めのポニーテールの完成だ。

俺達は本に付属していたディスクのプログラムをインストールし、早速タイピングの練習に取りかかるのだった。

五時三十六分。

「だー。疲れた」

俺は画面から目を離し、両腕を天井に向けて大きく伸びをする。

首を捻ると、バキボキと音が鳴った。

チラッ、と横目で風美香を見ると、彼女も伸びをしている。んー、と妙に可愛らしい声を上げ、両の手を頭上に伸ばすその姿は彼女の胸が強調され、俺をどきまぎさせる。

「伊織、どうしたの？」

「いや、な、なんでもない……ってそんなことよりも、せっかくお菓子もあるんだし、食べない？」

「そうね。ちよっと休憩しよっか」

言つと風美香は立ち上がり、ミニテーブルへと近づく。

あ、そういえば、座るものがない。

「風美香、ちょっと待ってて」

俺は一言そう告げると、一旦廊下に出て、向かい側の俺の部屋へと入り、置かれていたフロアクッションを二つ手に取り、再び元の部屋へと戻る。すると、風美香がコップにオレンジジュースを注いでいるところだった。驚いたことに俺の分も注いでくれている。俺のために何かをしてくれるなんて珍しい。

「おっ、ジュース、サンキュ。はい、これ」

俺は右手に持っているクッションを差し出す。すると風美香はそれを受け取り、

「ありがとう」

と、これまた珍しくお礼を言うのだった。

俺は風美香とテーブルを挟んで向かい合うように座り、早速ジュースを一口飲む。直後、口内に滲むように広がる濃いオレンジジュースの風味。少し苦みがあるが、それがオレンジ本来の甘みと混合し、結果、相乗効果によってより甘さが際立っている。

さつきから、かっぱえびんを片手に持つてじつと見詰めている風美香。一体何がしたいのか分からないが、おそらくかっぱえびんに何か思い入れがあるのだろう。

「なんか、今日、お前素直だな」

「いつもと変わんないわよ。タイピングのし過ぎで頭狂っちゃったんじゃない？」

風美香は、パクつ、と小さな口でかっぱえびんを頬張りつつそう言った。

「素直だけど、可愛げが皆無だ」

風美香の顔が一瞬悲しそうに歪んだ、ように見えたのは気のせいだろうか…？

俺はそんなことを疑問に思いながら、手当たり次第にスナック菓子を中心に運んではバリバリと食べる。

「……そりやそうよ。私は火坂先輩みたいにはなれないんだから……」

「ならなくていいんじゃない？お前はそのままでもいいよ。そうじやなきゃ、なんか……こう……、しっくりこないし。俺個人の意見ではあるけど、お前にはずつと変わらないでいて欲しいんだけど」

なんてクサイ台詞を言っってしまったんだ、と今になって後悔するが、気にしないふりをしてジュースを飲み乾す。パン、とテーブルにコップを置き、風美香の様子を窺う。

「い、伊織の意見なんて知らないわよ」

風美香は唐突に頬を紅潮させ、両手でオレンジジュースの大きめのペットボトルを持ち、空になった俺のコップにまたジュースを注いでくれた。もしかして照れているのか？

「おお、ありが」

その瞬間、風美香の両手からオレンジジュースの入ったペットボトルが離れ、俺の方へと中身をぶちまけながら飛んできた。

「うわっ……！」

至近距離での出来事だったので対応できず、俺は無様にも頭から全部オレンジジュースまみれになってしまった。

つめてえー。

「ご、ごめんなさい！わざとじゃないの！」

風美香は焦りつつ急いでこちらに廻ってきて、倒れているペットボトルを立てた。そして、スカートのポケットから薄い桃色のハンカチを取り出し、俺の顔を拭おうと手を伸ばしてくる。しかし、俺はそれを片手で制し、

「風美香のハンカチを汚すわけにはいかない。って、そんな顔すんな、大丈夫だから」

「……ごめん。ホント、ごめんなさい」

「いいって。たかがジュース被っただけだろ？」

と言いつつも、正直、俺は焦っていた。制服にジュース系統はちよつとよろしくない。まあ、ブレザーをタイピングの練習を始める

直前に脱いでおいたのが唯一の救いか。

俺は右ポケットから中年男性が使いそうなチェック柄のハンカチを取り出し、顔面を軽く拭いた後、フローリングの上のオレンジジュースで出来た水溜りにハンカチを落とした。近くにティッシュがないので、仕方なく左ポケットからポケットティッシュを取り出し、よろしく、と風美香に渡した。

「伊織、怒ってる…？」

「ちよっと」

俺がそう言っていると、風美香は俯き、しゅんとなる。

「はは、冗談冗談。全然怒ってないよ。でも、この状況のままはずがにマズイから、ちよっと風呂入って来る」

俺がゆっくりと立ち上がると、風美香もそれに合わせてゆっくりと俺を見上げてくる。ペシャンと内股で座り、不安そうな顔をしつつ、両手でポケットティッシュを胸の前で握りしめるようにして持つその姿は、なんだか非常に女の子らしい。

「母さんに、着替えを用意してくれるように言っといてくれるか？俺、今から風呂に直行するから」

「…うん」

その返事を聞くと、俺は風呂場へと小走りで向かった。

「ふうー」

シャワーを止めると、俺は一息ついた。

まさかオレンジジュースの所為で風呂に入らなければならなくなるとは…。でも、まあ、ちよっと早めの風呂だと思えばなんてことはないんだけど。

顔面にへばりつく髪を全て掻き上げ、オールバックにする。別に格好をつけているわけではない。こっちの髪型の方が楽なのだ。

俺は風呂の半透明の扉を開けて、脱衣所に出る。
もこもこと立ちこめる水滴の煙。
目の前に風美香が居た。

は？

一度両腕で両眼を擦り、もう一度前を見る。
すると、そこにはやはり風美香が居た。

「あ…れ？」

「あ…う、わあ…」

俺達は何も言わず、ただ見詰め合っていた。無論、俺は全裸だ。

『下着をください（full ver.）』

歌：天月伊織

作詞：天月伊織

作曲：村井邦彦

編曲：穂積佑馬

今、私の願い事が叶うならば
下着がほしい

この全裸に雪のように

白い下着つけて下さい

このフルンに布切れ纏い

飛んでゆきたいよ

悲しみのない自由な天国へ

半裸さらけ出し

逝きたい

今、富とか名誉ならばいらないけど
下着がほしい

『おお、伊織は全裸（short ver.）』

歌：天月風美香

作詞：天月風美香

作曲：チエコ・スロバキア民謡

編曲：穂積佑馬

おお、伊織は全裸

脱衣所に風が吹く

おお、伊織は全裸

よく茂ったモノだ

ホィ

リビング。ここには母さんと親父も居る。

「ふにゅ〜……」

そして風美香も居る。しかし、ソファアの上で顔を真つ赤にして伸びてしまっていた。

「おい、風美香ー、大丈夫かー？」

身を屈め、つんつん、と彼女の頬をつついてみるが、んー、と嫌がるだけで無反応。

もう一発つつく。すると、んー、と嫌がる風美香。その反応が無

性に面白くなつて、もう一度頬を突いてやろうと手を伸ばした瞬間、背後から母さんが近づいてきた。

「ちよつと失敗だったかしら？」

「かなり失敗だったぞ」

母さんは右の手のひらで顎を支え、左の手のひらで右の肘を支え、困ったポーズを決め込んでいる。

「いや、ね。本人が服持つて行きますって自分から言ってきたく

れてね。任せようかなーって思ったのよ。伊織の下着に過敏に反応してたのが心配だったけど、まあ、そこはなんとかなると思ったのよ。でも、予想外にも伊織がお風呂から上がって来る時間が早くて、服を持ってきてくれた風美香ちゃんとジャストタイミングで出くわしちゃったのねっ、キャハっ

「キャピるな」

その意味の分からないキャピリはなんとかならないものだろうか。俺は母さんを睨みつける。すると、母さんは、あはは、と笑い、逃げるようにトタトタとキッチンまで退散した。去り行くケツをぶっ叩いてやろうかと思った。

俺は最後に母さんの背に鋭い視線を送ると再び風美香の方へと向き直る。そして両膝をフロアリングに突く。

「キスするなよー」

自滅ハゲの声。

「しねえよ、ハゲ親父」

「しろよおー」

「しねえよ、ハゲ」

「親父は付けよっ！！ハゲでいいから、親父は付けよっ！？いや、まずはハゲ付けるのやめねっ！？」

俺は親父を完全に無視した。そういえば、突然思い出したけど、昨日親父の誕生日だったな。まあ、何もあげてないけど。と言うより忘れてた。今度、新学期初日に貰ったカッラでもやるか。本人もズラが欲しいって言ってたし……ってそんなことはどうでもいい、とりあえず、風美香を起こさねば。

「おーい、風美香ー、起きろー」

彼女の肩を揺する。
すると。

「……いお………はっ！！」

風美香の両の瞼がバツ、と開かれ、その透き通った美しい二つの黒い瞳が俺を捉えた。

二人の間五十センチに流れる沈黙。

ぱちぱち、と風美香は瞬きをする。そして徐々に脳が覚醒してきたのか、首から額にかけてどんどん真っ赤になり、

「きゃっ！！」

と、俺を見事にぶん殴った。風美香の右フックは俺の左頬にジャストミートし、俺は情けなくも右方向へと吹き飛ばされる。カーペツトの上を激しく転がり、いくらか視界の上と下が逆転ところで仰向けで停止する。

「がああああああああっ！！痛ええええええええっ！！」

口の中に血の味が広がる。左頬の内側が切れたのだろう。相当に痛い。激痛だ。

そういえば、新学期初日に俺は風美香にぶっ飛ばされた経験があるんだった。すっかり忘れていた。

「え…あ…。ご、ごめんなさい！」

風美香はソファから飛び降りると、急いで俺に接近してくる。そしてどう思えるのかと思えば、予想外にも俺の頭を自らの膝の上に置き、擁ようしてきた。

「お、おい…」

「ごめん…。また、やつちゃった…」

風美香の声は酷く暗く沈んでいた。

彼女が左耳に掛けていた黒髪が垂れ、俺の鼻の上に掛かる。

良い臭いがする、と思うのは危険だろうか。

「おや、おや、お二人さん？」

俺と風美香は声のした方向を同時に見た。すると、そこには満面の笑みでキッチンからこちらを見ている我が母の姿があった。俺達を挟んで母さんと反対側に居る親父も、母さんと同じようにこちらを見て、

「おや、おや、お二人さん？」

と、言ってきた。なんなんだ、この冷やかし夫婦は。俺がそう思

った瞬間、風美香が立ちあがった。つまり、俺の後頭部は支えをなくし無惨にもカーペットにゴンツ、と鈍い音をたて直撃する。

「痛えッ！」

上半身を起こした後頭部を擦りつつ、俺は風美香を見上げた。

「いえ、あつ、その…。もう、時間も時間ですので、ご迷惑にならないうちに帰ります」

パニックになりながら言う風美香に対し、母さんは、

「えー、まだ六時半よ。いいのよー、此処に居てもー。なんなら泊ってもいいのにー」

「いえ、さすがにそれは…」

たくさんの恒星が瞬く夜空の下、俺と風美香は並んで歩く。右も左も住宅。道の脇には点々と等間隔に街灯が立っている。

あれから母さんや親父に何度も引き留められたが、結局、風美香は帰宅することになった。俺はその付き添いとして、今こうして暗い夜道を共に歩いているのだ。

家を出てから、此処に来るまでそれなりに歩いたが、俺と風美香は一度も喋っていない。ずっと無言だった。それ故、風呂に入ったばかりで火照った俺の身体はとうに冷めきり、寒さを感じ始めている。

さすがにこれ以上の沈黙はマズいと思った俺は、勇気を振り絞って風美香に話しかけた。

「えつと…その…見たか…？」

何をとは言わなかった。というより言えなかった。誰が「君、俺のプランプランを見たかい？」、などと言えるものか。それを言えた奴は相当のポンコツだ。頭が逝っている。クレイジー加減が半端でない。

風美香の様子を恐る恐る窺う。すると彼女は今日何度見たか分からない真っ赤な顔で、コクン、と頷いた。正直な肯定。

「あ、別に何も言わないでいい。いや、言わないでくれ…」

「…言えないわよ」

「そりやそうか」

俺と風美香との間に風が吹き抜ける。

「ごめんね…」

「あ、謝るな！俺が惨めになる！間違っても『粗』なんて言葉は使つなよ！」

「えっ、その、そっちじゃなくて…いや、そっちでもあるんだけど…あつ、別に『粗』ってわけじゃ…」

「ん…？」

「えっと、その…ジュースかけたり、み、見たり、殴ったり、今日は伊織に迷惑かけてばかりだったから…」

ああ、そっちか。

「気にすんな。いつものことだ」

「なによ、それ？」

風美香はムスツ、とした表情で俺を見てくる。

「おっ、良い表情になった。お前は落ち込んでいる表情よりもそっちの表情の方がずっと良い」

「えっ…？」

驚いた顔をする風美香。本当にコイツは表情がコロコロ変わるな。少し微笑んでみるが、風美香は相変わらず啞然としている。そんなに驚くことか…？

「って、そんなことよりも、結局お前の家ってどのあたり？」

「あつ…。あれだった」

風美香が指差したのは既に前を通り過ぎていた家だった。パツと見ただけで分かる結構な広さの家で、ちよつとした豪邸だ。さっきは何気なく通り過ぎてしまったが、よく見ると、表札に『天月』と大きく書かれてあった。しかも意外と俺の家から近い。

「通り過ぎてんじゃん…。お前、頭大丈夫か？」

「大丈夫よ！アンタなんかに頭を心配されたくないわよ！」

言つと風美香は家に向かつて駆けだした。そして、家の柵の中へと入ると、そのまま何も言わずに自宅へと姿を消した。

唐突に一人になり、妙に道が広く感じる。……別に寂しいわけじゃないんだけど。

「んだよ。アイツ。お礼くらい言えつての」

俺は悪態をつくつと、足元に転がっていた石ころを蹴り飛ばし、自分の家に向けて来た道を帰り始めた。

「寒い…」

両腕を組み、猫背になって、前へ前へと突き進む。家への道が長く感じるのは何故だろうか。

空を見上げる。灰色の雲の隙間に月が鎮座し、数えきれない星々が夜の街を見下ろしていた。

なんか…今日は疲れたな…。

その時、ズボンの尻ポケットに突っ込んでおいた携帯が鳴る。朧霧学園高等学校で過ごすにあたって必需品ともなりつつあるスマートフォンだ。

「メールか」

俺はスマートフォンを取り出し、メールを確認する。

「おっ」

メールを送ってきたのは風美香だった。本当に珍しいこともあったものだ。もうこれは珍しいを通り越して不思議だ。まさか、偽生徒会執行部全員でメアド交換してから、一度もメールを送って来なかった風美香が送ってくるとはね。

題名は無題。

「アイツ、何かあったのか？」

親指で画面をタッチし、メールの内容を確認する。
そこにはこう書かれていた。

明日、昼の12時にアンタの家の前で待ち合わせ
昼ご飯は食べないこと

それと、今日はありがとね

「…そういうことは、直接言えよ」
俺は歩きながら返信のメールを打つ。
それはそっけのないたった二言。

了解。

どういたしまして。

メールを送信すると、またズボンの尻ポケットにスマートフォン
を突っ込む。

そして、腕を組み直し、前を向いて歩きだした。
足が軽く感じる。さっきまで妙に長く感じていた家への道も、今
では不思議と長く感じない。

「これから一週間、大変になりそうだな」

気付けば俺は微笑んでいた。

風美香が家にやってきた！？（後書き）

まだ、今回は風美香が家にやってきて、すぐに帰っただけですね。つまり、そのうち……。

今章が終了したら、偽モノの『スピノフ作品』という名の問題作を新連載として投稿するかもしれません。まだ予定なのでするかどうかは分かりませんが…。

ここまで読んで下さった方、ありがとうございます！

お気に入り登録をして下さっている方、いつもお世話になっていきます！

(SS) 会話、雑用と偽会計 (前書き)

偽モノ初のショートストーリーです。

よくあるネタですが、伊織と風美香のツッコミ所満載のクレイジートークというか、漫才をお楽しみください。

(SS) 会話、雑用と偽会計

今回は2011年最後の投稿（かもしれない）を記念してのSです。ストーリーとはほぼ無関係の内容となっておりしますので、その辺りをご了承ください。それと、敢えて会話九割以上、地の文一割未満（しかも三人称）で書きました。

風美香の一言。それは唐突だった。

『伊織。アンタの座右の銘は何？』

「ん？座右の銘？…「しんがいはちゆうちよく」慷慨忠直だけど」

『こうがいちゆうちよく？……は？下ネタ？』

「どこの世界に座右の銘を下ネタにする馬鹿がいる」

『伊織ならやりかねない。私に全裸を見せつけてきたアンタならね』

「あれはお前が悪いだろ！」

『うつさい！破廉恥の塊！アンタのヌーヴォなんてもう見たくないわ！』

「ヌードだろ！？」

風美香は伊織の頬を豪快に平手打ちした。激痛に呻く伊織。風美香は両腕を胸の下で組み、ぷいつ、とそっぽを向いた。

「り、理不尽だ…」

『伊織なんて車のタイヤに頭轢かれて死んじゃえばいいのよ』

「むごい！死に方むごい！」

『あつ。でも伊織が死んだら、パシリがいなくなるから困るかな。やつぱり、パシリは必要よね』

「最低だよお前。つか、何様のつもりですか？」

『外様』

「大名か！」

『なんでやねん！』

「ボケてねえ！」

伊織は嘆息すると、風美香に向けて言う。

「つーか、お前さ。結局、最初の座右の銘の質問は何だったの？」

『何でもないわ』

「何でもないのか」

『私はそんなことよりも、自分の家に人を招く時にどうしたら良いのかというのを話したいのよ』

「話が鋭角に曲がった！そりゃまた唐突だな。まあ良いけどさ…

…。なんでだ？」

『最近、アンタの家に行ったじゃない？』

「ああ」

『あつ、執筆の練習のために行った時のことね』

「他に招いた覚えがないんだが…」

『伊織のお父さんもお母さんも凄く良い人で、私のことを喜んで招き入れてくれたけど、自分の家に人を招く時にはどうすれば良いのかって突然疑問に思ったのよ。人の家に行くのと招くのでは全く違う立場でしょ？』

「まあ、それもそうだな」

『練習してみるのはどうかしら？』

「一人でしとけ」

『……………』

風美香は伊織を睨みつけている。

「何だその目は？」

『……………シミュレーション』

「イメトレで充分だ」

『……………』

「……………」

『……………ファミ ンウォーズが出るぞー。こいつはどえらいシー

ミュージーション。のめりこめ！のめりこめ！」

「かーちゃんたちにはないしょだぞー、って言わすな！そんなにシミュージーションしたいか！？そんなに俺を巻き込みたいか？」

『うん！』

「無邪気に頷くな！」

『駄目、かな……？』

「可愛く言っても無駄だ！悪意が隠し切れてねえ！」

『……………』

「なんかさ、お前が妙なことを提案してきたら嫌な予感しかしないんだよ。特に何かが起こると思わないけど、全力で拒絶したくなっちゃう……って、ああ泣くな泣くな、分かった分かった、もう分かった、やればいいんだろやれば。だから泣くなって」

『それじゃあ、伊織が私の家に来る設定でやるわよ』

「切り替え早いな、お前……。しかも嘘泣きかよ」

TAKE 1

「お邪魔しまーす」

『いらっしやいマンボー』

「お邪魔しましたー」

『ま、待ちなさい！』

「んだよ？」

『どうして帰るのよ……？』

「そんなルンバを基本としたラテン系が強烈なおうちに誰がお邪魔したい！？」

『……もう、うるさいわね。仕方ないからやり直してあげる』

「……ハア……」

T A K E 2

「お邪魔しまーす」
『いらっしやいマッスル。ダンベルあるよ?』
「いないよ」

T A K E 3

「お邪魔しまーす」
『うらめしや〜ッ!』
「うるせーよ」

T A K E 4

「お邪魔しまーす」
『あつ、いらっしやい。いなり』
「いなり誰!？」

T A K E 5

「お邪魔しまーす」
『ようこそ、地獄へ…へッへッへッ…』

「そろそろ真面目にやれ!!」

風美香に背を向け、玄関（イメージ）を伊織が出ようとする。その背中に風美香は声をかけた。

『そのドアは開かない』

「な、何：！？」

『ふっふっふ。聞いて驚きなさい。私の家は外から入ることができても、中からは出られないのよ』

「逆だろ普通！なんのトラップだ!？」

『そして、この靴箱を開けてみると、実は奥の隠し部屋への秘密の扉になっているの!』

「忍者屋敷か！」

「つーか、今更だけど」

『何?』

「毎回毎回、お前が出迎えてくれんの？家族出てきたりしないのか？」

『あー、それもそうね。じゃあ、私が一人で家族全員をするから』
「が、頑張るな……」

T A K E 6

「お邪魔しまーす」

『あら、いらっしやい、伊織君。風美香の母です』

「どうも」

風美香は声を低くし、眉を中央に寄せる。役作りの用だ。

『おお、君が伊織君かい。よろしく、私は風美香の父だ』

「初めまして」

『へロー。ボーイ』『あつ、伊織来たのね』

「ちよつと待ったア！」

『何よ？』

「最後から二番目に出てきた外国人誰だ！？」

『お兄ちゃん』

「お前、兄貴いたのかよ！」

『いちや悪いの？』

「悪くはねえけど…。お前の兄貴、そんなアレ過ぎるテンションなの？」

『いや。全然違うわよ』

「違うんかい」

「いつにも益して、今日はよくボケるな。お前」

『失礼ね。別にボケてるつもりは無いけど』

「いや、もうどうでもいいわ…。てか、何で俺達漫才してんだろ
う」

『してないわよ。そんなことより続き続き』

「まだやんのか？」

『当り前じゃない。じゃあ、次は玄関から場所を変えてリビング
ね。お菓子を食べながら駄弁っている設定で』

「……はいはい」

リビング（イメージ）にて。

『で、アンタ結局、火坂先輩のことどう思ってたんのよ？』

「突然過ぎるし、訳が分からないし、そんな質問に答えられるか」
『答えなさい』

「嫌だ。お前には関係ないだろ」

『か、関係……ない……けど……』

「だったら、訊くな」

『ど……どうせ、好きなんでしょ!?!』

「はあ?」

『火坂先輩は何でもできるし、可愛いし、巨乳だし……だからア
ンタは火坂先輩のこと好きなんでしょ!?! 特におっぱいが好きな
でしょ!?! おっぱいが!?!』

「お、おい。いきなりどうした?…まあ、おっぱいは結構好きで
はあるが……って何を言ってるんだ俺」

『そんなに好きなら、当たってくじけてきなさい! 伊織の馬鹿!』
「いや、それただの悪口!そこは当たって碎けるね!」

『あつ、伊織。あそこに火坂さんがつ!』

「な、何イ!?!」

『バツ力が見る〜』

「うるせーよ」

『まあ、とりあえず、当たってたばるに越した事は無いわね』

「あるわ!どんなネガティブ人間だお前は」

『全然ネガティブじゃないわよ。私は前向きよ』

「ほお……。どの辺が前向きだと仰る?」

『失敗しても全部伊織の所為だと思つて、気持ちやすぐに切り替
えられるところが凄く前向きだと思う』

「上向きだ!もはや現実を見てすらいない!一体何処を見ている
お前は!?!」

『失礼しちゃうわね。伊織の分際で。私はこーんなにも心が広い
つていうのに。器も充分広いつていうのに』

「何処が!?!」

『怪我している人には特に優しいのよ。なんてたつて、傷口に塩

を塗ってあげてるんだから』

「歪んでるわ！トドメ刺してるじゃねえか！広い狭いの問題じゃねえ！」

「あつ、時々、間違つて傷口にホウ酸を大量にかけちゃったりするけどね』

「殺す気か！？」

「経口摂取しなければ大丈夫』

「でも危ねえわ！ゴホッ！げほ！」

今までほとんど無呼吸でツツコミを入れていた伊織は、ゼーゼ、と息を咳く。

「大丈夫？』

「あ、あんまり……」

「風邪をひいてるなら最初からそう言いなさいよ！間違つても私に移さないでよね！』

「お前の目は節穴か！ごほっ！」

「ちよつと待ってなさい。薬とつて来るから』

「ま、待て……げほッ」

風美香は何処かに行ったかと思うと、すぐにかえってきた。

『はい。アモバルビタールを10グラム、早く飲みなさい』

「致死量じゃねえか！」

『じゃあ、ハルンケア10グラム、早く飲みなさい』

「いや、そんな尿漏れでも頻尿でもないですから俺！」

『む……何よ、アンタ。文句しか言わない』

「お前が文句しか言わせてくれないんだろ！？だつておかしいだろ。あーやつべー、咳がやべ、苦しいよー。よし、ハルンケア飲もつと
つてならねえだろ！なつた奴、相当のパツ

パラパーに違いねえ！」

『あはははは』

「ていうか、なんでお前、先手にアモバルビタール出してきたんだよ。睡眠薬じゃねえか。俺をジャクソンの二の舞にする気が貴様

は？そこは普通咳止め出してこいよ」

『あはははは』

「しかも、咳が現在激しい奴にはとりあえず薬じゃなくて、普通水持つてくるし」

『あはははは』

「笑って誤魔化さないで！もう充分だよ！なんか俺が惨めな人みたいだからもうやめてえ！」

『えっ？だって惨めな人じゃん』

「酷ッ！しかも何そのナチュラルな驚き。そういえばちよつと久しぶりに聞いたな、そのあからさまな罵倒」

『罵倒じゃない。ただの事実』

「だ…駄目だ…心が…痛い。まっ、まさか…！こ、これが…こ、つてなるかボケ！」

『は？』

「その受け流し本気でやめて欲しい」

「風美香…もう充分だろ？既に当初の目的を見失ってるし」

『そうね。もう充分。罵倒はまだまだ足りないけど』

「お前最低だ。どんだけ俺のこと嫌いなんですか。そんなに嫌いか？」

『嫌いよ』

「一刀両断だ！…って、なんかさっきからデジャブ多いんだよな」

『ねえ、伊織』

「ん？」

『アンタも私のこと嫌い？』

「当り前だ」

『そっか』

伊織は気付かなかった。風美香の表情が一瞬強張ったことに。

「風美香」

『何？』

「お前、これから暇？」

『うん。暇って言えば暇だけど』

「近くにマクド ルドあるだろ。そこで食って行かない？昼飯まだだろ？俺久しぶりにハンバーガー食べたい」

『伊織の奢りなら良いわよ』

「えー……。まあ良いけど、高いのはなしな」

二人は並んで歩きだす。右に伊織、左に風美香。

絶え間ない会話の中、二人は語り合い、笑い合い、時にいがみ合い、楽しげに目的の場所まで向かっている。

『あ、伊織』

「どうした？」

『あそこに火坂さんがっ！』

「誰が騙されるかよ……って、うえええ！本当に居るぞ！ど、どうするべし！？」

『私は手を振り返しておくね』

「知ったこつちやねえよ！お前のことは！」

『だったら、当たって砕け散れー』

「いや、それただの悪口！」

遠くから手を振りこちらに向かってくる火坂に対し、伊織は焦り、それを見て風美香は笑っていた。

（了）

（SS）会話、雑用と偽会計（後書き）

さて、安道の苦手とするテンポ重視のSSはどうでしたでしょうか？

何気にツンデレ男とモロツンデレ女の掛け合いはこうなります（笑）

ここまで読んで下さった方、ありがとうございます！
お気に入り登録をして下さっている方、いつもお世話になっていきます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0082v/>

偽モノですが、何か問題でも？

2011年12月25日15時56分発行